

---

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

飛鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

### 【Nコード】

N3834N

### 【作者名】

飛鳥

### 【あらすじ】

ある世界で事件が起きた

その事件とはある一人の少年の逃走である

その少年はその世界から抜け出した

この事件により全ての世界の『歴史』が大きく変化することになる

本来の『歴史』なら決して出会わなかった者達

本来の『歴史』なら既に死んだ者達

これは

世界に嫌われ運命に翻弄され、仲間を失った少年

人の『無限の欲望』によつて生み出された少女  
かつて自分の犯した罪を贖罪し、消えていった少年  
自分が信仰する2人の神の信仰の為に奮闘する少女  
これ以上自分と同じ存在を作らない為に戦い死んだ少年  
自分の能力だけを見られ、最後には見捨てられた少女  
が数多の世界を駆け巡る物語である

## プロローグ シン・アスカ編

CE74・・・

後に『メサイア戦役』とよばれるこの戦いが終結した。

この戦いの後、ラクス・クラインは『プラント』最高評議会議長に就任し、世界は平和に進みつつあるように見られた。

しかし、その裏ではかつてデュランダル前議長の旗の下で戦った者達や現在でもデュランダル前議長を支持する者達に対し徹底的な弾圧、また非人道的な実験が数多く行われていた。

少年『シン・アスカ』もまたかつてデュランダル前議長の下で戦ったパイロットである。その中でもFAITHであったシンを憎むクライン派も多くクライン派に捕えられた後最も残酷で非人道的な実験の実験台とされた。

それは不老不死の薬の実験台と現時点でのプラントでは禁止されている人体実験の実験台であった。

シンはそんな環境でもなんとか生き延びていた。しかしCE78・・・とある実験により悲劇は起きた。

それはデュランダル前議長実験室で発見された『デバイス』呼ばれる兵器の実戦テストであった。

その相手はシンのパートナーであったルナマリア・ホークであり、実験終了の方法はどちらかが死亡するまでである。

このとき2人に渡されたデバイスはデュランダル前議長が異世界の技術を使い、開発した物であり2人が乗っていたMSを基に製作され、性能も破壊力もMSと同等というあまりにも危険過ぎる代物であった。そして、お互いを戦わせることにより戦闘データの収集とデュランダル前議長派である2人を抹殺するために行われた。その結果シンは自分がパートナーであり、守ると誓った少女をこの手で殺してしまったのである。

これによりシンの壊れかけていた心は壊れてしまい暴走した。事態

を知ったキラ・ヤマトが駆け付けた時に見たものは屍の山・・・そしてルナマリアの亡骸を抱きながら慟哭するシンのみだった。

この悲劇の後、シンはキラによって保護される。

しかし、この行動によってキラは命を狙われ、最後はシンを庇い、命を落とした。シンにある願いを託して・・・

CE80・・・キラの願いを託されたシンはキラが用意していた『携帯型次元転送装置』を使い、このCEから旅立った。

シンが最初にたどり着いた世界は人間と魔族が戦争している世界であり、シンはこの戦争を『デバイス』を使用し終結させ、その世界を去った。

悠久の時を経て数多の世界を旅したシンはある世界で1人の少女と出会い、共に世界を旅することになる。

その旅の途中シンは新しくできたパートナーと共に傭兵として海底にある『レリクス』と呼ばれる遺跡の調査をすることになり、かつて死別した親友との再会と新たな仲間と出会うことになる。

その再会と出会いの後に全ての世界を賭けた戦いが始まりその戦いのリーダーになってしうことを知らずに・・・。

## プロローグ シン・アスカ編（後書き）

はじめまして飛鳥です。

今回初めて小説を書きました。

この小説の主人公であるシンは自分が最も好きなキャラクターです。原作では主人公の座から落とされたシンですがこの小説では主人公をしていけるように頑張りたいと思います。

こんな厨二的な展開の駄文ですが今後ともよろしくお願いします。

## プロローグ スバル・ナカジマ編

新暦71年7月29日ミッドチルダ臨海第8空港・・・

今ここはロストギアと呼ばれる物によって大火災が発生し、必死の消火活動と救出活動が行われていた。しかし、全ての人が救出されたわけではなく、ある1人の少女が空港の奥に閉じ込められていた。その少女の名はスバル・ナカジマ・・・陸士108部隊隊長ゲンヤ・ナカジマの娘であり、戦いを好まぬ優しい少女である。

スバルは姉であるギンガと共に父であるゲンヤを迎えに来ていたが火災が発生した際にギンガと逸れてしまい、1人空港の奥まで来てしまう。

元の道に戻ろうにも激しく燃え上がる炎のせいで戻ることが出来ず、さらには進行方向にも炎の壁が出来てしまい動くことができなくなってしまう。

燃え上がる炎に恐怖を感じ、動けなくなったスバルに追い打ちを掛けるように近くにあった像がスバルの方に倒れてくる。

スバルは悲鳴を上げながら自分の死を直観した。

そして倒れてきた像がスバルを押し潰そうとした瞬間ひとつの影が現れ、倒れてきた像を切り裂いた。

その時スバルが見たものは機械の赤い翼を背負った少年であった。

その後、スバルはこの少年・・・シン・アスカと共に数多の世界を旅することになる。

それから4年後シンと共に色々な世界を旅したスバルは一人前のパイトナーとなり、シンと共にとある世界で傭兵として海底にある『レリクス』と呼ばれる遺跡の調査をしていた。

その調査の最中スバルはシンに次ぐ新たな仲間と出会う。

その出会いの後に全ての世界を掛けた戦いの中心人物となるとはこの時スバルは知らなかった・・・。

## プロローグ スバル・ナカジマ編（後書き）

ども飛鳥です。

今回はスバル編となっております。

原作ではなのはに助けられるスバルですが今回はシンがスバルを助けました。

個人的にシンとスバルは相性がよさそうなのでくっつけてみました。こんな文が続きますがよろしく願います。



## プロローグ リオン・マグナス編

かつて少年は少年大切な人を守るために仲間を裏切りその命を落とした。

その後エルレインと名乗る女性に蘇らせられた少年は彼女に背き一人の少年と出会う。

その少年はかつて自分が裏切った仲間スタン・エルロンの息子であるカイル・デュナミス達と出会い、カイルから新たな名前『ジューダス』という名を貰う。一度彼らと別れた少年であったがストレイズ大神殿にて再会し共に旅をすることになり、歪まれた歴史を正す為にエルレインと彼女を創った神フォルトゥナと戦い倒すことに成功する。

そして少年は歴史の修正作用によってこの世界から去った。

少年・・・リオン・マグナスは目を覚ますと自分が生きていることに疑問を感じていたが自分の服装と鞘に納まっている剣を見た瞬間驚愕した。

なぜなら今リオンが持っている剣は神の眼を破壊するために消滅したソーディアン・シャルティエ（以降シャルティエ）だったのである。

シャルティエは自分が存在していることに大いに混乱したがそれ以上に自分のマスターであるリオンが生きていることを喜んだ。

今の状況を確認するために行動するリオンだったがそこで見たことのないモンスターに遭遇する。いきなりのことです惑ったりリオンだったがそのモンスター事態は想像以上に弱かったためすぐに倒せた。さらに探索を進めていたら突然悲鳴が聞こえたので悲鳴の聞こえる方向でリオンが見たものはモンスターが武器を持っていない少女に襲いかかっているところであった。

以前の彼ならそのまま放っておいただろうがスタンやカイルの影響

を少なからず受けていたのと、少女に襲いかかっているモンスターはさつき自分が倒した雑魚だったのでリオンは少女に襲いかかっているモンスターを両断し、少女を助けた。

少女を助けたリオンはそのまま去ろうとするが少女に頼まれ仕方なく共に行動することになり、さらにそこで新たな仲間と出会うことになる。

この出会いの後、全ての世界を賭けた戦いの中心人物になるとは知る由もなかった・・・。

## プロローグ リオン・マグナス編（後書き）

ども飛鳥です。

今回はリオン編を書きました。

リオンは個人的に好きなキャラクターの1人です。

この小説の中心人物の1人として登場してもらいました。  
そしてリオンが助けた少女とは？

ヒントは東方プロジェクトの登場キャラクターです。

## プロローグ 東風谷 早苗編

ある世界に2柱の神を祭っている神社がある。

そこには2柱の神を信仰している少女がいた。

今この神社・・・守矢神社ではある大きな問題に苛まれていた。

その問題とは信仰である。

この世界では思うように信仰が集まらず、神である八坂 神奈子と洩矢 諏訪子にとって信仰がないことは命に直結することになる。

八坂 神奈子と洩矢 諏訪子は思慮の末にある決意をする。

それは今この地にある信仰を代償に守矢神社を幻想にし、人と妖怪が共存している世界・・・『幻想郷』へ移動し、人と妖怪から信仰を獲得するというものであった。それは少女・・・東風谷 早苗にとって自分が今まで住んでいたこの世界から離れるということであった。

早苗は長い葛藤の末に2柱の賭けに乗る事を決意し、自分が今まで住んでいた世界から去った。

だがここで大きなトラブルが発生する。それは次元移動をしている際に大きな歪みが発生し、早苗はその歪みの中に吸い込まれてしまったのである。

その後、目を覚ました早苗であったがまるで見覚えのない場所に自分がいて、神奈子と諏訪子の気配が感じられず、さらには早苗の秘術も使用できない状態であり、見たことのない異形に遭遇してしま

目を覚ました早苗であったがまるで見覚えのない場所に自分がいて、神奈子と諏訪子の気配が感じられず、さらには早苗の秘術も使用できない状態で見たとことのない異形に遭遇してしまう。

戦う術を持たない早苗は自分の死を覚悟した瞬間突然現れた少年によってモンスターは倒され、九死に一生を得た。

助けられた後は助けてくれた少年と共に行動するようになり、遺跡を探索をしている途中で新たな仲間と出会う。

この出会いの後に全ての世界を賭けた戦いが始まり、自分がその戦いの中心人物になることになる。とは今の早苗には知る術が無かった。  
・  
・  
・。

プロローグ 東風谷 早苗編（後書き）

ども飛鳥です。

今回は早苗さんのお話です。

この作品の設定ではしばらくの間彼女は一子相伝の秘術を使えませ  
ん。

なぜ彼女に登場してもらった理由としてはマリ안의代わりにリオ  
ンの支えとなるのは彼女かなと思いましたが。

さて、今回は種死からもう1人登場してもらいます。

ヒントはシンにとって親友でありライバルである彼です。

では、失礼します。

## プロローグ レイ・ザ・バレル編

少年は生まれた時から寿命が短かった。

なぜなら少年・・・レイ・ザ・バレルはある男のクローンとして生まれ生まれ時からテロメアが短く今では数年位までしか生きることができなかった。

彼と同じ存在であった男は世界の全てを憎み最後は自由の剣によって倒され果てた。

レイはこれ以上自分と同じような存在を創りださせない為にデュランダル議長の下で戦う決意をし、アカデミーの仲間のシンとルナマリアと共に世界を駆け巡った。

そして、デュランダル議長の夢のあと一歩までに近づいた。しかし、最終決戦の際に自分を創りだした原因であるキラに敗れ、最後には自らの手でデュランダル議長を撃つてしまう。悲しみと後悔に苛まれたレイはやってきたタリアと撃ってしまったデュランダル議長と共に散ることを決意するが、シンの言葉に覚悟を揺さぶられ、最早の息であるデュランダル議長からある物を渡された瞬間眩い光に包まれ、CEから姿を消した。

その時デュランダル議長の口はこう動いていた。

『私達の分まで精一杯生きてくれ』と・・・

眩い光に包まれ意識を失っていたレイは目を覚ますと記憶にはない場所に自分が倒れていた。

身体を起こしたレイは状況を確認するために周囲を探索していたら1人の少女と出会う。

その少女は見たことのないなぞの異形に襲われており、レイは少女を助けようとするが自分は装備を持っていない状態であることを知っているため何もすることができない。

そんな状況を歯痒く思っていたレイだったがデュランダルから渡さ

れた物が光りだしたと思っただけの間にか自分の姿がMSのレジ  
エンドを鎧として来ているような姿になっていることに当惑するが  
武器があると分かりその異形を倒した。

異形を倒した後奥へと進むレイと少女だったが見たことのない人型  
兵器に襲撃される。辛くも撃退した2人だったがレイは持病が再発  
し、動けなくなったところを再起動した人型に再度襲撃される。レ  
イは身体を張って少女を守るが致命傷を負ってしまい倒れてしまう。  
レイが守った少女は何かを言っているがあまり聞き取れず意識が闇  
の中に落ちていく中少女とは違う声が最後に聞こえた。

『あなたを死なせはしません・・・』と

その後、意識を取り戻したレイは自分の親友と再会する。  
再会の後さらなる出会いがレイを待っていた。

その出会いの後に全ての世界を賭けた戦いに参加し、自分がその中  
心になるとはこの時のレイは知らなかった・・・。



## プロローグ レイ・ザ・バレル編（後書き）

ども飛鳥です。

今回はレイに登場してもらいました。

シンを出すならレイもつとということで彼に登場してもらいました。

次回でプロローグは終わりです。

プロローグ最後に登場するキャラクターは、ファンタシースターポ  
ーダブル2から天才少女が登場します。

ではありがとうございました。

## プロローグ エミリア・パージパル編

母なる太陽とパルム・モトウブ・ニューデイズの3つからなるグラール太陽系……

この星系は3年前『SEED事変』と呼ばれる謎の生命体の襲撃とそれを利用しグラールを滅ぼそうとしたハウザーらの事件からの傷跡は未だに残されていた。

今、グラールでは資源枯渇等による危機的な状況から脱出するためインヘルト社の代表ナツメ・シュウの唱えた亜空間航行理論の研究とそれへの資金援助開発が進められていた。全てはグラールの新しい未来のために……。

パルム海底レリクス

SEEDの襲来の後多数発見されたレリクスの中でも最近見つけられたもので数多の企業はこの未開のレリクスに新たな発見を求めるために傭兵を雇い調査を進めようとしており、ここにはたくさん傭兵が来ていた。

そんな中この場には似つかわしくない少女が1人いた。

その少女……エミリア・パージパルは自分の引き取り手であるクラウチ・ミュラーによって無理矢理民間軍事会社……『リトルウイング』に加えられ、今回このレリクスの調査に参加させられることになる。

依頼を探してくる言ったクラウチを見送った後突然エミリアは頭痛に苛まれる。

そして、気が付いたらいつの間にか自分1人となっており、何もできないまま立ちつくしていたらいきなり原生生物に襲われてしまう。戦闘経験のないエミリアはただ逃げ回ることしかできず、とうとう追い詰められ、死を意識した瞬間突然現れた少年が現れ、原生生物

は彼の手によって倒された。

助けられたエミリアはその少年に礼を言う。エミリアを助けた少年はレイと名乗りここから脱出するために行動を共にし、レリクスの最深部に到着する。

最深部について安心したエミリアだったが、機能停止していた筈のスタテイリアが突如起動し、エミリア達に襲いかかってきた。

なんとか応戦し撃退したエミリア達だったが、突然レイが苦しみだし心配になったエミリアがレイの方に注意が向いた時、再起動したスタテイリアがエミリアを攻撃しようとした。

エミリアは今度こそ死んだと思った瞬間、レイがエミリアを突き飛ばし身代りになった。

このあとの記憶はエミリアには無くレリクスで起こったことは夢の中だと自己完結した時、クラウチから呼び出される。最初は拒否したエミリアだったが結局クラウチに押し切られ、リトルウイングへ向かうことになる。

その時エミリアは新たな仲間と会うことになる。

その出会いの後に全ての世界を賭けた戦いになりエミリアがこの戦いの中心人物になるとは彼女は知らなかった・・・。

## プロローグ エミリア・パージパル編（後書き）

ども飛鳥です。

今回でプロローグはラストになります。

最後に登場してもらったキャラクターはエミリアです。

彼女はファンタシースターポータブル2では欠かすことのできないキャラです。

この小説ではレイやシン達と共に依頼をこなして成長していくという過程を書きたいと思います。

では次から本編に移りたいと思います。

## 第1話前編 『海底レリクス』

シン・スバル side

ホルテスシティシンとスバルの家

シン

「『海底レリクスの調査』？」

スバル

「うん。なんでも最近発見されたレリクスらしくて今回の依頼者はどの会社よりも早くこのレリクスを調査したいんだって」

ここはグラール太陽系の惑星パルムのホルテスシティ。

拠点としている街である。

シンとスバルはグラールで起きた『SEED事件』と呼ばれる事件の直後にこのグラールを訪れ、SEEDに汚染された原生生物に襲われている女の子をスバルが独断で倒し、その時の言い訳で傭兵だと名乗ったのがきっかけで傭兵を始め、小さな依頼をこつこつとこなししていく内に信頼を得ていた。

そんなある日にある依頼がシンとスバルの元に届いた。

依頼主は最近急成長をしているインヘルト社からの依頼で、『近年発見された海底レリクスが他の会社が海底レリクスを調べられる前に他の会社より先行して調査をしてほしい』という内容であった。

シン

「先行しての調査か……。報酬もそれなりに高いし、受けるか！」  
スバル

「うん！」

報酬も相応の額であるため、シンとスバルはこの依頼を受けることにした。この後大量のステイリアを相手にする羽目になるとは知

らずに。

海底レリクス

シン

「で、この結果かよ！」

スバル

「ちょっとこれ洒落にならないよ……(汗)」

シンとスバルが遭遇したのは30機のスヴァルティアであり、スヴァルティアは侵入者であるシンとスバルを追い返そうと斧で威嚇している。

スバル

「どうするシン？」

スバルがシンにどうするかと尋ねたらシンの返事はこうだった。

シン

「逃がしてくれるとは思えないからな……一気に倒すぞ！」

スバル

「だよね！じゃあ……」

シン

「デステイニーー！」

スバル

「インパルス！」

シン・スバル

「「セットアップ！！」」

シンとスバルはデバイスを起動させスヴァルティアの方へ突撃していった。

リオン・早苗 side

海底レリクス

このレリクスはSEED事件の後最近になって発見され、人の手が届いていない未開のレリクスである。

そう、ここには人はいないはずである。

しかしそこにはふたつの人影があった。

リオン

「武器を持たずに遺跡を歩くとは・・・お前は馬鹿か？」

早苗

「そんなこと言われても無い物は無いんですから仕方ないじゃないですか！」

シャルティエ

『まあまあ、早苗さん。落ち着いて下さい』

ふたつの人影の持ち主であるリオンと早苗はつい先ほど早苗が襲われている所をリオンが助けたのはいいが早苗が武器を持っていないことにとことん呆れているリオンとそれに対してムキになって反発している早苗とそんな早苗を宥める剣、シャルティエという状況である。

そんなこんなで仲のいい(?) 2人だったが、シャルティエが何かを見つけたようである。

シャルティエ

『坊ちゃん！早苗さん！敵を発見しました！』

リオン

「わかった。僕の後ろにいる」

早苗

「え？でも・・・」

リオン

「武器を持っていない奴が前に出ても足手まといになるだけだ」  
早苗

「うう……。わかりました……」

シャルティエ

『坊ちゃん敵の数は2体です!』

早苗がリオンの後ろに隠れた瞬間、モンスターダヴァラスが突撃してきた。

リオンはシャルティエを抜き放つと

リオン

「幻影刃!」

すれ違いざまに切りつけダヴァラスを両断し、さらにもう一体のダヴァラスを

リオン

「グレイブ!」

土の昌術で尖った岩をダヴァラスの下に発生させ下から上へ尖った岩で貫いた。

リオン

「勝てると思っているのか?」

リオンはそう呟いて後ろを振り返ると早苗が何かを拾っているのを見た。

リオン



「おい。何をしている？」

早苗

「あ、リオンさん実はリオンさんがさっき倒したモンスターから何か出たのでそれを拾ったんです」

早苗は拾った物をリオンに見せるがリオンにはこれが何なのか分からなかった。

リオン

「なんだそれは？」

早苗

「たぶん銃だと思います」

リオン

「銃？」

シャルティエ

『僕も聞いたことがありませんね』

リオンとシャルティエの世界には銃というものは無い。そのため何に使う物なのかはもちろん知っている筈がない。そこで早苗は銃について簡単な説明をすることにした。

早苗

「えっと……。銃というのは遠くの敵に攻撃ができる武器です」

リオン

「弓のようなものか？」

早苗

「まあそれを誰でも使えるようにした物だと考えてもらってもいいですよ」

シャルティエ

『便利な武器もあるものですねえ……』

リオン

「そうか……。ならそれはお前が使い」

早苗

「えっ？」

リオン

「誰にでも使えるのだろう？なら武器を持っていないお前がもって  
おけ」

早苗

「は、はあ……」

リオン

「ならさっさと行くぞ」

早苗

「えっ、ちよっ、待ってくださいーい！」

シャルティエ

『（仲いいなあ……）』

そんな2人をシャルティエは微笑ましく見ていた。

レイ・エミリア *side*

海底レリクス

レリクスを出る手がかりを探して周囲を探索していたレイはモンスターに襲われていたエミリアを助けた。

レイ

「大丈夫か？」

エミリア

「う、うん……」

エミリアが無事だということが判断したレイはここがどこなのかを  
尋ねてみることにした。

レイ

「そうか。すまないがここはどこだか知らないか？」

エミリア

「え……？」

当然そんな事を聞かれることを想定していなかったエミリアは大いに戸惑った。

エミリア

「あなた……ここがどこだか知らないの!？」

レイ

「ああ。いきなり光に包まれたらいつの間にかここにいた」

レイの眼を見て嘘を言っているわけではないと判断したエミリアはとりあえずここがどういふ場所なのかと、自分達がおかれている状況を説明した。

レイ

「なるほど……。つまり頭痛にうなされている間に閉じ込められたということか？」

エミリア

「う、うん……」

レイ

「となると奥に進むしかないようだな……」

エミリア

「ええ!？ムリムリ!ヤダヤダ危ないって!ここは未開のレリクスなんだよ!スツゴイ危ないんだよ!」

レイ

「だがこのままこの場においても事態は好転しないぞ?」

そう言ったレイはそのまま奥へと進んでいく。

エミリア

「ええ！？本当に1人でいっちゃうの！？」

レイ

「ああ。そのつもりだ」

エミリア

「あっ！待って！行くから！」

レイ

「そうかでは行くぞ」

エミリア

「あ、ちょっと待って？」

そう言って再び先へ進もうとするレイだったが再びエミリアに呼び止められ振り返る。

レイ

「今度はなんだ？」

エミリア

「名前、聞いてなかったから。あ、私はエミリア。エミリア・パ  
ジパル。あんたは？」

レイ

「レイ。レイ・ザ・バレルだ。よろしく頼むエミリア」

互いの自己紹介を終えたレイとエミリアはレリクスの奥へと進むの  
であった……。

## 第1話前編 『海底レリクス』（後書き）

ども飛鳥です。

今回から本編に突入します。

会話とかを考えるのは難しいですね（汗）

スバルの使用しているデバイスですがプロローグの時点ではマツハ  
キャリバーを持ってないためシンが持っていたデバイス『インパル  
ス』を使用しています。

では失礼します。

## 第1話中編『海底レリクス』

シン・スバル side

海底レリクス

30機のスヴァルティア遭遇から1時間後

シン・スバル

「これで！終わりだ！！」

30機のスヴァルティアを相手にしていたシンとスバルだったがスヴァルティアの攻撃を見切り、1機ずつ確実に倒していき最後のスヴァルティアも斧を振り降ろして隙ができた所をそれぞれ持っていたアロンダイトとエクスカリバーで突き刺し、二人同時に斬り払って倒した。

シン

「ぜえつぜえつ・・・やつと片付いたか・・・」

スバル

「はあっはあっ・・・っ、疲れた・・・」

シン

「さすがに少しキツかったな・・・」

スバル

「30機相手はシンドイ・・・」

シン

「スバル。動けるか？」

スバル

「まだまだ戦えるよ！・・・というわけじゃないけど動くだけなら大丈夫だよ」

シン

「そつか……。じゃあ奥へ行くか！」  
スバル  
「うん！」

1機を1分で倒していたとはいえ30機を相手に戦っていただけにスバルの疲労は激しかったが動けない程ではなかったので2人はそのまま奥へ進むと行き止まりになっていた。

海底レリクス

スバル  
「……………」

行き止まりになっていたことに硬直するスバルだったがシンは部屋の中央に端末らしきものと箱らしきものを発見した。

シン

「この端末は……………」

スバル

「どうしたの？シン？」

シン

「ああ。この端末なんだがおかしくないか？」

スバル

「どこがおかしいの？」

シンが言ったことがイマイチ分からなかったスバルだったがシンが次に言った言葉によってシンがなにを言いたいのかが分かった。

シン

「この端末、俺の見間違いないかなければスバルの居たミッドチルダ

「物のじゃないか？」

スバル

「確かに言われてみればこれミッドチルダで使われてる端末だよ！」  
シン

「しかも放置されてからあまり時間が経ってない・・・だいたい2週間から3週間くらいだな・・・」

スバル

「なんでこんな物がこんなところにあるんだろ？」

シン

「詳しいことは俺には分からない。ただミッドチルダの人間がここにいた。そして・・・」

そう言いながらシンは端末を起動させるとそこには何かの研究レポートが記録されていた。

少年少女閲覧中・・・

スバル

「『ロストギア【エルシディオ】と【レヴァンティン】の威力と効果に関する結果と考察』？」

シン

「『報告先・・・時空管理局』だと・・・」

スバル

「時空管理局ってお父さんとギン姉が働いている組織だよ？」

シン

「ああ。となると時空管理局は2週間から3週間前にここに来てそのロストギアの研究を行っていた」

スバル

「となると箱の中身ってもしかして・・・」



レポートの内容を見てまさかと思って端末の近くにあった箱を開けたスバルが見た物は4振の剣であった。

シン

「たぶんこの剣が【エルシディオン】と【レヴァンティン】だろうな」

スバル

「どうするの？」

シン

「この端末のデータをコピーしたらこの端末を破壊してこの剣は俺達がついていこう」

スバル

「ええっ！？それって思いっきり泥棒なんじゃ？」

シン

「元々この剣は時空管理局の物じゃない。それに……」

スバル

「それに？」

シン

「こいつは時空管理局が持っているいい物じゃない」  
シンは今までの戦いで培ってきた勘でこの剣が時空管理局の手に渡るのは危険だと判断した。

シン

「データも取れたことだし俺は【レヴァンティン】を持っていくからスバルは【エルシディオン】を頼む」

スバル

「うっやっぱり人の物を盗むのは気が引けるなあ……」

シン

「誰かに悪用されて力の無い人が苦しむよりはいいだろ？」

シンは今まで愚かな権力者が大きな力を持ち、それによる弾圧などで苦しんでいる力のない人々を見てきたシンだからこそ導きだした結論である。

その後、シンとスバルは端末のデータを消して破壊し、依頼主へ報告をするために戻る為に元来た道を戻っていたらそこで1人の男とあった。

男

「すまねえ！あんたらは見た所傭兵のようだが頼みがある！」

スバル

「えっ？」

いきなりのことで混乱するスバルだったが男はそんなことを無視して話を続ける。

男

「ウチの会社の奴がポカッて行方不明になっちまったんだ。そいつを探すのを手伝ってくれねえか？」

シン

「分かりました。その依頼を受けます」

男

「すまねえ！助かる！俺はクラウチ・ミュラー民間軍事会社リトルウイングの代表をやってるもんだ」

シン

「俺はシン・アスカです。で、こっちがスバル・ナカジマです」

クラウチ

「わかった。じゃああんたらはこのレリクススの北の最深部へ向かってくれ！俺は西の最深部まで探す！」

シン

「分かりました！いくぞ！スバル！」

スバル

「う、うん！」

依頼の受諾と自己紹介とパートナーのスバルの紹介を終えたシンは  
やっと混乱から復帰したスバルを連れ最深部へと向かった。

1時間後

シン

「ここが最深部か・・・」

スバル

「シン！あそこに人が！」

海底レリクスの最深部へ着いたシンとスバルは倒れている2人の少年と少女を発見した。がそれはシンにとってはあまりにも意外過ぎる人物だった。

シン

「ウソだろ・・・」

スバル

「シン？」

シンからただならぬ雰囲気を感じ取ったスバルが声を掛けるが今のシンには聞こえなかった。なぜなら・・・

シン

「なんでレイがこんなところにいるんだ！」

その少年はかつて死別した親友レイ・ザ・バレルだったのだから・・・。

リオン・早苗 side

海底レリクス西部

探索開始から1時間後

早苗

「はあ・・・はあ・・・リオンさん少し休憩しませんか？」

リオン

「だめだ。あれから1時間しかたっていないんだぞ？」

早苗

「1時間も歩き続ければ普通は疲れます！」

シャルティエ

『坊ちゃん。僕も早苗さんの意見に賛成です』

リオン

「シャル！お前まで！」

シャルティエ

『確かに急ぐ旅路ですけど早苗さんが戦闘の時に動けなくて坊ちゃん動きに制限が掛かってしまいます』

リオン

「それもそうだな・・・。仕方ない10分だけだぞ」

1時間ずっと歩いていたりリオンと早苗だったがついに早苗が根を上げた。リオンも最初は無視していたが早苗がだんだんしつこくなってきたのとシャルティエの助言もあったので小休止をとることにした。

少年少女小休止中・・・

早苗

「そういえばリオんさんはどこから来たんですか？」

リオん

「それを聞いてどうする？」

早苗

「いえ・・・少し気になっただけです」

リオんは話そうかどうか迷ったが早苗の眼を見ているうちに今はもう会うことのできない仲間とその息子・・・スタンとカイルを思い出した。

そしてこの眼をしている奴はいくら言っても聞くことすると判断した。

リオん

「セインガルドだ」

早苗

「セインガルド・・・ですか？」

リオん

「なんだ？」

早苗

「いえ・・・なんでもないです！」

リオん

「もう10分たった。いくぞ」

早苗

「は、はい！」

10分ばかりの小休止を終えたりオンと早苗は探索を再会しようとしたがそこに1人の男が現れた。

男

「お、あんたらも傭兵か？」

早苗

「えっ？ええつと・・・」

いきなりのことで戸惑つ早苗だったがそこにリオンが割つて入る。

リオン

「ああ。そつだ」

早苗

「（ちよつ、リオンさん！？）」

リオン

「（今は口裏を合わせろ。いいな？）」

早苗

「（は、はい）」

男

「どうしたんだ？」

リオン

「いや、なんでもない」

男

「そうかい。あんたらも傭兵なら依頼したいことがあるんだがいか？」

リオン

「内容にもよる」

男

「ああ実はウチの社員がへましちまってな。このレリクス内に閉じ込められちまつたらしくてそのまま奥へ行つちまつたらしい」

リオン

「つまり僕たちはその社員を救出すればいいんだな？」

男

「ああ。それで引き受けてくれるか？」

リオン

「報酬は？」

男

「これくらいでいいか？」

男が見せた金額は15000メセタ。1人の社員を救出する依頼としては破格の値段である。

リオン

「わかった。引き受けよう」

男

「そうか！ありがたい！」

早苗

「えっと名前を覚えてもらってもいいですか？」

男

「そういや自己紹介がまだだったな。俺はクラウチ・ミュラーだ」

リオン

「リオン・マグナスだ」

早苗

「東風谷早苗です」

クラウチ

「そんじゃ早速あのバカタレの救出に行くか！」

早苗

「あっ！待って下さい！」

クラウチはそう言って先へ進もうとするが早苗がそれを止めた。

クラウチ

「ああん？まだなんかあるのか？」

早苗

「その先には誰もいませんよ！」

リオン

「僕たちはここ最深部まで行ってきたが誰もいなかった。別の方向を探すべきだろう」

クラウチ

「あんたらいつの間にかそこまで行ってたんだ？」

クラウチが痛いところを指摘してきたがこれに対してリオンは冷静に応対した。

リオン

「これだけのレリクスだ。先に調査をしている奴がいてもおかしくはないだろう？」

クラウチの疑問はまだ残っていたがさつき会った少年と少女を思い出し深く追求をすることはしないことにした。

クラウチ

「ここにはいねえとなると北側の最深部か・・・」

リオン

「東側にはいなかったのか？」

クラウチ

「東側はあんたらと同じく先に調査をしてた奴らがいたがそこにはいなかったらしい」

早苗

「南側はどうなんです？」

クラウチ

「あっちの方はもう調査済みだ」

リオン



「そうなる後は北側か・・・」

早苗

「行きましょう!」

リオン

「ああ」

クラウチ

「おう!」

早苗がそう言うところ人は北側最深部へ向かった。

海底レリクス北側最深部

クラウチ

「ここが最深部らしいな」

リオン

「そのようだな」

早苗

「あつ!あそこを見てください!」

最深部に着いたりオン達が見たものは折り重なるように倒れている少年と少女、そして彼らを助け起こそうとする少年と少女だった。

クラウチ

「やっと見つけたぜ!あんたらも手間を掛けたな」

リオン

「依頼を受けたのは僕達だ。気にしなくていい」

早苗

「そうですよ!困った時はお互い様です!」

クラウチ

「そう言ってくれれば助かるがこれじゃあ俺達にとってしめしがつかねえ」

リオン達はそう言ったがクラウチは納得できなかつたらしくしばらく考え込んでいたら何かを思いついたらしい。

クラウチ

「そうだあんたら俺の会社で働かねえか？」

クラウチの提案とはリオン達をリトルウイングへ入社させることだった。

クラウチ

「衣食住は保障するし給料も働きに応じて出すぜ」

クラウチの提案は今のリオン達にとっては非常に魅力的な内容だった。

早苗

「どうしますかりオンさん？」

リオン

「今、僕達が必要な内容は全て揃っている。この申し出は受ける価値はある筈だ」

早苗

「そうですね！クラウチさん、その申し出はありがたく受けさせていただきます！」

クラウチ

「おっ、そうか！それじゃあ俺達の本拠地クラッド6へ案内するぜ！で、もう一方のあんたらはどうするんだ？」

シン

「俺達もその申し出を受けさせてもらいます」  
スバル

「でも先に依頼主への報告と家の片づけをしないとイケませんから」  
シン

「正式な手続きはまた今度でよろしいでしょうか？」  
クラウチ

「ああ。俺は構わないぜ。それじゃ行きますか！」

こうしてリオンと早苗はクラッド6へ入りリトルウイングへ入社したのだった。

レイ・エミリア side

海底レリクス

シン達がクラウチと出会う2時間ほど前

互いの自己紹介を終えたレイとエミリアは敵を倒しながら奥へ進んでいた。

エミリア

「すごい・・・」

レイ

「これくらいなら造作もない」

エミリア

「なんか安心したよ！あんと一緒に安全っぽいし！」

レイ

「そうか？」

エミリア

「うん！」

そこでふとレイは疑問に思ったことを口にした。

レイ

「なぜエミリアはこんなところにいたんだ？」

レイがそれを地雷だと気付いたのは言うてからすぐのことだった。なぜならそのことを言った瞬間エミリアの機嫌が一気に悪くなつていったのである。

エミリア

「ああ・・・そのことね。」

レイ

「エミリア？」

エミリア

「あたしは軍事会社に登録されてるだけで戦うつもりはこれっぽちもないし！そもそも軍事会社に登録されたのもおっさんに強引に登録させられただけだし！それに今回のレリクス調査だってもうSEEDがないからもうレリクスは安全だって言うて強引に連れてこられただけだし！」

レイ

「落ち着けエミリア。お前は少し錯乱している」

エミリア

「ぜえっぜえっ！ごめん。ついカッとなって」

レイ

「気にするな。俺は気にしない」

エミリア

「そう。ありがとう」

レイ

「すこしここで休憩にしよう」

エミリア

「サンセー・・・」

さっきまで慣れない戦闘続きでかなり体力を消耗していたレイとエミリアはすこし休憩することにした。

少年少女休憩中・・・

エミリアは今レイが装備している鎧を不思議そうに見ながらレイに話しかけた。

エミリア

「ねえ。あんたのその鎧ってなに？」

レイ

「ああ。これか？」

エミリア

「そそ。大抵傭兵といってもシールドラインがあるから私服で戦っている人がほとんどだからね」

レイ

「シールドライン？聞くだけだと一種のバリア発生装置のようだが？」

エミリア

「ええっ！？あんたシールドラインをしらないの!？」

レイ

「ああ。」

エミリア

「信じられない・・・。よく生きてたね・・・。」

レイ

「ああ。おそらくはこの鎧のおかげだな」

エミリア

「ナノトランサーも無いのにどっからともなく武器を出しているし・・・。」

???????

『そのことなら私が説明しましょう』

レイ・エミリア

「「!?!?」「」

いきなり知らない声が聞こえたので警戒をするレイとエミリアだったがその声に敵意はないので声のする方向をすると

???????

『こちらです』

声のしてきた場所はレイの鎧に着いている緑色の球からだった。

レイ

「そうか。いくつか質問があるがいいか？」

???????

『はい』

レイ

「一つ目。お前は何者だ？」

???????

『私はデバイス・レジェンドと申します』

レイ

「レジェンド? MSのレジェンドか？」

レジェンド

『武装に関してはそう考えてもらってもよろしいかと』

レイ

「二つ目。デバイスとはなんだ？」

レジェンド

『デバイスとは異世界の技術であり、対人戦闘を想定して創られた兵器です』

レイ

「三つめ。デバイスのエネルギー源とはなんだ？」  
レジェンド

『ある特定のエネルギーをエネルギー源としています。これの技術を発明した世界では【魔法】と呼ばれています』

レイ

「四つ目。この装備は外せるのか？」

レジェンド

『はい。可能です』

レジェンドはそう言うのと騎士甲冑を解き、レイはザフトの赤服を着た状態になった。

エミリア

「わっ！服が変わった!？」

レジェンド

『騎士甲冑を装備する時はセットアップと言ってください』

レイ

「わかった。では最後の質問だ。」

レイはそう言うのと深呼吸をして最後の質問をした。

レイ

「お前を創ったのはギルなのか？」

レジェンド

『はい。私を創造したのはギルバート・デュランダル博士です』

レイ

「そうか。長々とすまないな」

レジェンド

『いえ。当然の疑問です。気にしないでください。私は気にしません』

レイとレジェンドとの会話をずっと聞いていたエミリアはそこである結論に至った。

エミリア

「ってなるとレイって異世界の人？」

レイ

「そうなるな」

エミリア

「だったらシールドラインを知らないのは頷けるね」

レイ

「というわけで俺達はこの世界に着いて何も知らない。よければ教えてもらってもいいか？」

エミリア

「う、うん。あたしの知ってることなら・・・」

少女説明中・・・

レイ

「なるほど。SEEDとはどこからともなくやって来た未確認生物で、そのモンスターや汚染されたモンスタのことをSEEDフォームというのか・・・」

レジェンド

『しかしSEEDですか・・・。これも何かの因果でしょうか？』

エミリア

「レジェンド？」

レジェンド

『我々の世界でもSEEDと呼ばれる概念があるのです』

エミリア

「へー。そんなこともあるんだね」

レイ



「まったくだな……。そういえばエミリア」

エミリア

「ん？どうしたの？」

レイ

「先程の話でSEEDはいないからここは安全だと言われてここに連れてこられたのだろう？」

エミリア

「うん。おっさんにはそう言われた」

レイ

「ならこのレリクスが安全なのはおかしいのではないか？」

レイからの指摘にエミリアは今自分が考えていたことと同じ内容だった。

エミリア

「そうだよ。今まで発見されてきたレリクスはSEED襲来があったときばかりに機能を覚醒させていたよ」

レイ

「そうらしいな。それで」

エミリア

「でも全部がそうだったかっていうとそういうわけじゃなかったんだよ」

レイ

「確かに話に行く限りではSEED襲来以外にも機能を覚醒されているレリクスがあるらしいな。続きを頼む」

エミリア

「わかった。だけど、同時に地場の乱れも観測されるからどうもそれだけじゃないと思うのよね」

レイ

「SEEDは3年前に一掃されているのならこのレリクスや他の

レリクスも機能を停止している筈だな」

エミリア

「うん。レリクス自体が何らかのプログラム管理である以上はトリガーとなるものも、それに準じた」

レジエンド

『となると、おそらくレリクスの機能を覚醒させる要因はSEED以外にも存在するということですね』

エミリア

「ってこんな話をしたけど今の説明は忘れて」

レイ

「なぜだ？」

エミリアが悲しそうな顔をしたのでレイは疑問に思い何故かと尋ねた。

そして、その解答はレイが想定していたものと一致した。

エミリア

「だってあたしが何を言っても誰も信じてくれないから・・・」

レイ

「（やはりか・・・。となると俺が言えるのはただ一つだ）俺は信じよう」

レイはエミリアの言ったことを信じることにした。誰にも信じてもらえない悲しみを持った彼女が哀れに見えたのそうだが、なによりも彼女の言っていることは非常に説得力があったからである。

エミリア

「え・・・？信じて・・・くれるの？」

レイ

「ああ。信じよう」

エミリア

「ってこんな話を長々してる場合じゃないよ！いい！」

レイ

「ああ。そうだな」

エミリア

「でも、信じてくれて……ありがとう……」

レイ

「エミリア？」

エミリア

「なんでもない！さっさと奥へい！」

レイ

「ああ。わかった」

この時レイが見たエミリアはすごくいい笑顔だった。

海底レリクス北側最深部

休憩終了から1時間半後

エミリア

「だいぶ奥に着いたけど出口はまだかな」

レイ

「いや……。おそらくここが最深部だろう」

あれからモンスター……原生生物になんども襲われたがレイがその度に撃退をしていく内にこの海底レリクスの最深部へたどりついていた。

レイ

「もしかしたらここを出る手掛かりがある筈だ。それを探すぞ」

エミリア

「うん。わかった!」

少年少女探索中・・・

レイ

「これは?」

レイが探索をしている時ある箱を発見した。

レイ

「レジェンド。この箱にトラップは無いか分かるか?」

レジェンド

『可能です。スキャン開始・・・』

していたら何やら人の形をした像があった。

レジェンド

『スキャン完了。罫は無いようです』

レイ

「わかった。では開けるか」

そして、レイが箱を開け中身を見たら長杖が入っていた。

レイ

「どうやら杖のようだが・・・。俺には必要無い物だな」

レジェンド

『どうしますかマスター?』

レイ

「エミリアに渡すでしょう。エミリア!」

箱に入っていた杖を見てどうするか悩んだレイだったがエミリアに

渡すことにした。

エミリア

「レイ？どうしたの？」

レイ

「箱の中にこの杖があった。お前が使える」

エミリア

「え？でもいいの？」

突然のことに困惑するエミリアだったがレイは構わずに話を続ける。

レイ

「どうやら特殊な杖らしいからな。お前の方が使えるだろう？」

エミリア

「う、うん。ありがとう！」

初めてのプレゼント？に喜ぶエミリアが周りを見るとエミリアの顔がサーと青くなった。

レイ

「エミリア？」

エミリア

「ねえ。ここにあるの全部自律人型機動兵器だよ？」

レイ

「自律人型機動兵器？」

エミリア

「うん。主にレリクスを守護している奴。見てるだけでも怖い動き出したらと考えると・・・ねえ。早く別のところに行こうよ・・・」

┌

レイ

「ああ。そうだな・・・」

エミリアの話聞いてるうちにレイはここにある人型兵器の戦闘能力について考察した。

旧文明を滅ぼしたSEEDに対抗していたのだから余程戦闘能力が高いのだろう。そう判断したレイとエミリアはここを離れようとするがさつきまで機能を停止していた筈の自立人型兵器・・・スヴァルティアがいきなり起動した。

エミリア

「って、ちょっと！言ったそばから動かないでよ！」

エミリアは泣きそうになりながら叫ぶがスヴァルティアはそんなことなどお構いなしにレイとエミリアに斧を構えた。

しかし、レイはレジエンドを起動させ臨戦態勢をとった。

レイ

「大丈夫だ」

エミリア

「【大丈夫】ってあんな奴と戦うの!？」

レイ

「それしか方法がないからな・・・」

エミリア

「うー！うううー！分かったよあたしも戦う！レイの【大丈夫】って言葉、信じるからね！」

レイ

「ああ。ではいくぞ！」

それからの戦闘は熾烈を極めるものだった。

レイ

「レジェンド！ビームライフルで奴を牽制するぞ！」

レジェンド

『了解です。ビームライフル展開！』

レイ

「そこだ！」

レイはレジェンドが精製したビームライフルでスヴァルティアの頭部を狙い撃つが特殊なバリアによってそのビームが防がれた。

レイ

「なに！？」

エミリア

「どうやらこいつには射撃が利かないみたいだよ！」

レイ

「ちいいっ！厄介な！」

そんなレイとエミリアに対してスヴァルティアが斧を振り降ろすがスピードが遅いためレイはエミリアを抱えて難なくかわした。

レイ

「しかし射撃が聞かないとなると厄介だな」

レジェンド

『マスター。私に提案があります』

レイ

「その提案はなんだ？レジェンド？」

レジェンド

『はい。実は……』

レイ

「なるほどな。エミリア！」

レジェンドが説明した方法を聞いたレイはすぐに行動に移した。

エミリア

「なに！？今こっちはキツイんだけど！」

レイ

「悪いが時間を稼いでくれ！一発で決める！」

エミリア

「ええ！？そんな無茶な！」

レイ

「俺を信じる！」

エミリア

「うっ！わかったよ！だけど絶対に決めてよね！」

レイ

「無論だ！」

レイは精神を研ぎ澄ませ始める。

無論スヴァルティアはこれを妨害しようとするが、

エミリア

「カミナリ！！！」

エミリアが出したギ・ゾンデによって足を止められる。

エミリア

「レイ！今だよ！」

レイ

「今だ！貫け！」

エミリアはレイにチャンスだと伝え、レイはドラグーンをスパイク



モードに変更させスヴァルティアへ特攻させる。  
スヴァルティアは特攻してきたドラグーンに胸部を貫通させられるんだところを

レイ

「終わりだ」

ビームサーベルを抜いたレイによって斬り裂かれ、機能を停止させた。

エミリア

「い、生きてる？あたし達本当に生きてるの？」

レイ

「そのようだな」

放心しているエミリアにレイが騎士甲冑を解きエミリアに近づくとエミリアがいきなりレイに抱きついてきた。

エミリア

「レイ！あんたすごいよ！あんなのを本当に倒しちゃった！」

レイ

「俺だけじゃない。エミリアもしかっり戦ってくれたからだ」

エミリア

「でも本当にすごいよ！レイの言葉を信じてよかった！」

レイ

「そうか・・・」

エミリア

「あたしたち本当にやったんだ！やったあ！やったあ！」

生還による喜びをかみしめていたエミリアだったがその時、突然も

う1機のスヴァルティアが動き出した。

レイも気がついたがレジエンドを起動させる時間が無かったのでレイはエミリアをその身で庇い、スヴァルティアのクローに引き裂かれた。

レイ

「かはっ！」

エミリア

「レイ！やだよ！どうしてあたしなんかを庇って……。ねえ起きてよ！起きて！起きてっばあー！」

エミリアはレイに問いかけるがレイからは返事がこず、レイを揺さぶるが感じたのはドロツとした血の感覚だけだった。

エミリア

「どうして……。どうしていつもそうなの！皆あたしを置いてっちやうの！あたしを1人にしないでよ！」

エミリアは叫ぶがレイはどんどん冷たくなっていく。エミリアはレイを起こそうとするがやはりレイは答えてくれなかった。

エミリア

「お願いだから！目を開けてよ！」

スヴァルティアはそんな2人を斧で押しつぶそうとするが、その時エミリアの身体に異変が起きた。

エミリア

「誰か！誰でもいいから！レイを助けてよ！」

エミリアの身体が輝いた瞬間その輝きでスヴァルティアは消えていった。

???

『あなたを・・・死なせはしません!!』

この時レイは自分の不甲斐無さとエミリアの言った言葉への疑問を持ちながら意識を完全に失った・・・。

## 第1話中編『海底レリクス』（後書き）

ども飛鳥です。

投稿が遅くなって済みません^^；

今回も海底レリクス編です。

デバイスなどの設定ですがまたの機会に設定集として投下します。

それでは！

次話も期待せずにお待ち下さい！

## 第1話後編『リトルウイング』

クラッド6リトルウイング管轄下 カフェ

海底レリクス調査から4日後

海底レリクスの一件から民間軍事会社『リトルウイング』に所属するようになったシン・スバル・リオン・早苗・レイと前から社員であったエミリアは自己紹介をするという流れになった。

シン

「俺はシン・アスカ。ここに来る前はこっちのスバルと一緒にフリーの傭兵をやっていた。これからよろしく頼む」

スバル

「私はスバル・ナカジマです！シンと一緒に傭兵をやっていました！よろしくお願いします！」

リオン

「リオン・マグナスだ。一応よろしく頼む」

早苗

「私は東風谷 早苗です。リオンさんと一緒にリトルウイングでお世話になることになりました。よろしくお願いします」

レイ

「レイ・ザ・バレルだ。成り行きでリトルウイングに所属することになった。これからよろしく頼む」

エミリア

「あたしはエミリア・パージパル！よろしく！」

マイルーム レイの部屋

自己紹介を終えたシン達は各自の部屋をエミリアに案内され、レイの部屋でマイルームの使い方をエミリアから教わった後、エミリアがレイのベッドで寝てしまったのでアイテムを買おうと部屋からで

ようとした時、突然シン達を呼び止める声がした。

??

『待つて』

スバル・リオン・早苗・レイ

「「「「!?!?!」」」」

??

『ここでなら落ち着いてお話しができます』

スバル達はまったく聞いたことが無い声で警戒するがその前にシンがその声に話しかけた。

シン

「あんたは、ミカさんか？」

ミカ

『やはりあなただったのですね』

シン

「あんたもな。まさかエミリアの中にいるとは思わなかった」

いきなりのことで動揺するスバル達だったがレイはすぐに冷静さを取り戻し、シンに尋ねた。

レイ

「シン。お前は彼女が何者なのかを知っているのか？」

シン

「ああ。彼女はミカ。今は滅亡している旧文明時代の人だ」

ミカ

『はい。シンの言つとおりです』

スバル

「旧文明って……。今から1万年以上前じゃん!?!」

旧文明と聞いたスバルはもう滅亡している種族の人物が目の前にいることに更に動揺した。

しかし、それは無理もない話である。1万年以上前の人物が自分の目の前にいるのだから。

だが、シンはそんなスバルを気にも留めずに話を続けた。

シン

「あなたがここで覚醒をしているとなると・・・」

ミカ

『はい。私の同朋が【あの作戦】を始めようとしています』

シン

「【復活計画】のことか？」

ミカ

『はい。あなたもその内容を知っている筈です』

レイ

「【復活計画】とはなんだ？」

いきなり聞きなれない単語が出てきたのでレイが質問するとミカはすぐに説明した。

旧文明人説明中・・・

リオン

「つまり、その復活計画とは僕らの抹殺計画と考えてもいいんだな？」

ミカ

「はい。そう感じとっていただいて結構です」

レイ

「俄かには信じられない話だが・・・」

ミカ

『突拍子もない話ですが、どうか信じて下さい!』  
スバル

「皆はどうするの?」

いきなり突拍子もない内容だったので他のメンバーはどうするのか  
スバルが聞いたら反応はバラバラだった。

リオン

「まだ本当だとは分からないから僕はパスだ」

早苗

「罪の無い人達を殺すなんて私は許せません!絶対に阻止します!」

レイ

「俺も今は信用できない」

やはり、リオンとレイは信用できなかった。しかし、次のミカの言  
葉で信じざるをえなくなった。

ミカ

『実は私は何のかわりの無い人には声が聞こえないのです』

リオン

「どういうことだ?」

ミカ

『レイさん。海底レリクスで起こったことは夢だと思っていますか  
?』

レイ

「いや、レジェンドの戦闘記録に奴と戦った記録があった。だから  
俺は1度死んだのだろう」

リオン

「だが僕と早苗とスバルはお前に会うのは初めてだぞ?」



ミカ

『あくまで私の推測なのですが、皆さんにはそれぞれ何らかの能力を持っているのだと思います』

20分後

リオン

「わかった。お前の言ったことを信じよう」

最後まで否定を続けていたリオンだったが、遂に現実を起こっていることだと判断した。

ミカ

『そろそろ彼女が起きます』

シン

「分かった。またな」

ミカ

『はい・・・』

エミリア

「ふわあ〜。ちょっと寝ちゃってた。って、みんないたの？」

レイ

「ああ。エミリアの寝顔を見ていた」

エミリア

「ちよっ、みんな私の寝顔を見ていたの!？」

早苗

「はい。かわいい寝顔でしたよ」

エミリア

「ううっ。恥ずかしい・・・」

レイ

「気にするな。俺は気にしない」

エミリア

「私が気にするの!！」

ミカの心配が消え、エミリアが起きたのでマイルームの説明は終わりを告げた・・・。

## 第1話後編『リトルウイング』（後書き）

ども、飛鳥です。

今回はかなり更新が遅れて申し訳ありませんでした！！

今回はミカが登場しました。

なぜシンたちもミカを認識できたのかはおいおい書いていくつもりです。

今回はフリーミッションとクラウチの借金取り立て依頼（？）編です。

こんな駄文ですがこれからよろしくお願いします。

## 第2話前編 『ドラゴン退治／草原の支配者／準備編』

リトルウイング管轄区

ミカとの出会いから10分後

エミリア

「ここはマイシップと言って依頼を受けるところで、この船で現地まで行くところだよ」

レイ

「ほう。では今から依頼を受けることができるのか？」

エミリア

「うん。それで・・・」

少女説明中・・・

ミカとの対面を終え、エミリアが目を覚ましたので、シン達はエミリアからマイシップの説明を受けていた。  
ちなみにエミリアからミカのことを聞いたら

エミリア

「ミカ？誰それ？」

と返され、シン達はこれ以上追及することはしなかった。

エミリア説明終了後

シン

「じゃあ早速依頼を受けないか？」

レイ

「賛成だが、生憎俺と早苗は武器を持っていないぞ？」

早苗

「あつ。そうでした」

シンは早速依頼を受けようとしたが、レイに装備が無いと言われ、シン達は一旦武器を揃えることにした。

少年少女準備中・・・

シン・レイ組

シン

「レイ。大分前にGRM社から報酬で貰った武器があるけど使うか？」

レイ

「ああ。この武器か？」

シン

「ああ。なんでも試作のライフルらしいけど俺は使わないからな。狙撃もできるだろ？」

レイ

「問題無い」

シン

「あと、スバルも使っている双剣と俺が使っているダブルセイバーの同型を使ってくれ」

レイ

「すまない。ここまで準備してくれるとはな・・・」

シン

「CEでは大分迷惑を掛けたからな。そのお礼だよ」

レイ

「俺がお前を利用していたのか？」

シン

「たえそうだったとしても俺は議長について行ったからな」  
レイ

「そうか……。この武器はありがたく使わせてもらうぞ」  
シン

「ああ」

レイはシンからエンシェントクォーツ、ティーガ・ド・ラガン、インフィニットコランダムを受け取った。

リオン・早苗組

リオン

「お前は撃たれ弱いからなシールドを装備した方がいい」

早苗

「分かりました」

リオン

「あとセイバーとレスタ、デバンド、シフタを購入する」

早苗

「そんなにも必要なのですか？」

リオン

「お前はサポートが得意らしいからな。これくらいは準備しておいた方がいいだろう」

シャルティエ

『そうそう！早苗さんは後方支援に向いているんだから！』

早苗

「そこまでおっしゃられるのなら……」

リオン

「ふん。じゃあ今から購入しに行くぞ」

早苗

「はい！」

早苗はセイバーとシールド、各補助テクニクのディスクを購入した。

スバル・エミリア組

スバル

「私達は回復アイテムの購入だね！」

エミリア

「うん。そうだね」

スバル

「ええっと、スターアトマイザー、モノメイト、ディメイト、トリメイト……」

スバルとエミリアは回復アイテムの調達の為に道具屋を訪れていた。

エミリア

「うっわ、すごい数になってる……」

スバル

「そりゃあ、6人分あるからね……」

エミリア

「とりあえず買い終わったからシン達のところに戻る？」

スバル

「うん。そうだね」

回復アイテムを買い終えた2人は一足先に合流地点へ向かった。

マイシップ

買い出しから1時間後

シン

「みんな準備はできたみたいだな」

リオン

「ああ。早苗に必要な物は全て揃えた」

スバル

「こつちもOKだよ！」

買い出しが終わり、準備が完了したシン達はマイシップに集合し、受ける依頼を探していた。

しかし、リトルウイングはあまり有名になっておらず、見つかった依頼はたったふたつだけだった。

レイ

「海底レリクスの調査とディ・ラガンの討伐依頼か……」

エミリア

「うう、ちょっと海底レリクスには行きたくないな……」

エミリアは海底レリクスでの出来事（エミリア曰く夢）のことを思い出し、顔色が悪くなってしまった。

早苗

「エミリアさんも辛そうですね、もう一方のディ・ラガンの討伐の依頼にしませんか？」

スバル

「賛成！」

リオン

「異論は無い」

レイ

「問題無い」

シン



「よし。じゃあ、ディ・ラガンの討伐に行くぞ！」

結果、早苗の提案により、シン達はディ・ラガンの討伐依頼を受けることになった……。

## 第2話前編『ドラゴン退治／草原の支配者／準備編』（後書き）

どうも、飛鳥です。

更新が遅れて申し訳ございません・・・；；；

今回はディ・ラガン討伐ミッションの一つ「草原の支配者」を受ける前の準備で、早苗、レイはそれぞれリオンとシンから武器を購入してもらったり、譲ってもらったりしています。

レイの武器ですが私の好きな武器のシリーズで、よく使う武器のひとつです。

次回はディ・ラガンと対決の予定です。

では失礼します（・ー・）ノシ

## 第2話中編『ドラゴン退治〜草原の支配者〜前編』

レイと一緒に行動するなんてひさしぶりだな・・・

メサイア戦役が終わってから色々あった

30億年過ぎてからは年なんて数えてなかったからな

レイと再会できたのは非常に嬉しかった

だが、どうしてもひっかかる

海底遺跡で見つけたあの剣を管理局が一時的にとはいえ確保して  
て解析していたこと

本人達は言っていないが早苗とリオンもそれぞれ違う世界の出身だ  
ろう

確かに色々な世界の人々が集まる世界もあったが、そこでは必ず共  
通点があったり、それぞれの世界が繋がっている世界だけだ

これはある種の奇跡かまたは何か危険なことがおこる兆候なのかも  
しれない

だとしたら俺は・・・

スバル

「シューン！目的地に着いたよー！！」

そして

シン

「わかった！今行く！」

いや、このことを考えるのはやめよう

俺が今することは新たにできた大切な人達を守るだけだ・・・

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

（世界を駆け巡る者達）

第2話『ドラゴン退治〜草原の支配者〜前編』

パルム

ラフォン草原

ブロッケ1

クラッド6から出発したシン達は問題となっているディ・ラガンが生息しているラフォン草原に来ていた。

早苗

「うわ〜！自然が豊かでいいところですね！！」

レイ

「かつて500年続いた戦争で傷ついた自然を回復させた人工的なものだな」

早苗

「へえ〜。そうなんですか」

リオン

「自分が赴く場所のことくらい覚えておけ、馬鹿者」

ラフォン草原の自然を目の当たりにして感動している早苗に対し、レイが補足するがリオンの小言を入れる。

早苗

「ひどい！馬鹿とまで言う必要は無いじゃないですか！！」

こんな感じでわいわい騒ぎながら進むシン達だが、ちょっとした洞窟の前についたところで突然何かが飛び出て来た。

エミリア

「あつ！可愛い！」

シン

「ポルティだな。皆はそこで俺の戦いを見ていてくれ」

飛び出て来たのはパルムに生息する原生生物の一種であるポルティで、シンはそういうなり武器を取り出し、ポルティの群れに突っ込んでいった。

エミリア

「ゲツ……。あれライトニングエスパーダじゃない！」

早苗

「ライトニングエスパーダ？」

エミリアはシンの取り出した武器に驚き、どういふ物かは分からない早苗はエミリアに聞いたらエミリアは説明を始めた。

エミリア

「GRM社の最新鋭のテスト武器のひとつで、まだ少数しか生産されていないGRM社最新鋭の武器だよ！」

早苗

「さ、最新鋭……」

リオン

「何故奴がそんな物を持っているんだ……」

エミリアの説明を聞いたリオンと早苗はシンが何故そんな物を持っているのか疑問に思った。

が、その疑問もレイによって解かれた。

レイ

「シンはリトルウイングに入社する前にGRM社で新型の試作武器

のテストを行う依頼を受けていたようで、あの武器は報酬で貰った物のひとつらしい」

レイはシンから今自分が装備している武器を渡された時にその武器を手に入れた経緯を聞き、そのことをリオン達に話した。

リオン達がレイの話の話を聞いている頃、戦闘はどうなっていたかというところ

シン

「はあっ！！」

シンの一太刀でポルティは断末魔をあげながらまっふたつになり、斬ったところから大量の血液が噴出、草原の一部を赤く染めた。

これに逆上したポルティ達はシンを取り囲んで一斉に攻撃をしようとするが

シン

「遅いんだよ！！」

シンは回転しながらライトニングエスパーダを横に振り回し、襲いかかって来たポルティ達をことごとく薙ぎ払った。

薙ぎ払われたポルティは皆まっふたつになって絶命した。

その場に残ったのは絶命したポルティの群れと無傷のシンのみだった。

シン

「これで全部片付いた。先へ進もう」

レイ

「見事な腕だな」

エミリア

「すつご〜。あの大群相手に無傷だなんて・・・」  
スバル

「いつ見てもシンは凄いいよね〜」

ポルティの群れを無傷で全て倒したシンに賛辞を送っていたレイ、スバル、エミリアだった。

リオン・早苗 side

早苗

「なんだか可哀想ですね・・・」

そんななかシン達から少し離れている所で倒されたポルティを見ていた早苗は悲しそうな表情で呟いたが、それを聞いたリオンはその考えを諭そうとした。

リオン

「だが僕達を襲ってくる以上倒さなくてはならない」

早苗

「ですが・・・」

しかし、早苗は納得していなかった。今まで自分の手で生き物を殺したことが無い生活を送っていたために自分の勝手に生き物を殺すことに戸惑いを持っているからである。

だがこのままだといずれ早苗に大きな災いが起きると判断したシャルティエはまだ納得できていない早苗に対しシャルティエはこう諭した。

シャルティエ

『可哀想かもしれないけど坊ちゃんも早苗さんも生きてるんだ。』

ふりかかる火の粉を払わないといけないんだ……」

早苗

「それが相手の命を奪うことでもですか？」

シャルティエ

「うん。確かに早苗さんの持っている感情はとても大切なものなんだ。けどそのことばかりに気を取られ過ぎていたりつかは自分や他の人達に大きな災いをもたらしてしまうかもしれない」

リオン

「シャル……」

シャルティエ

「僕は早苗さんにそんなことになるのはどうしても避けたい。もしその災いで早苗さんが大変なことになったら悲しむ人がいるでしょう？」

早苗

「！」

それを聞いた早苗は今まで自分と一緒に暮らしていた2人の神を思い出した。

シャルティエ

「だから例え相手が可哀想だったとしても僕は全力で坊ちゃんを支える。それだけだよ」

早苗

「シャルティエさん……。私……」

シャルティエ

「すぐに結論は出さなくてもいいよ。こういう答えはゆっくり考えて出すものだから。でも、僕の言ったことを頭の片隅に入れておいてほしいんだ」

早苗

「はい。わかりました。この問題の私の答えは必ず出します！」



リオン

「もう話をついたか？ならさっさとシン達と合流するぞ」

シャルティエの言葉である程度迷いが無くなった早苗はリオンと共にシン達と合流する為に先へ進んだ。

リオン・早苗 side end

ラフォン草原 デイ・ラガンの巢

遅れていたリオンと早苗と合流したシン達はさらに奥へ進み、デイ・ラガンの巢へたどりついた。

シン

「ここに今回のターゲットのデイ・ラガンがいる筈だ」

レイ

「そのようだな。警戒を強めた方がいいだろう」

シン達が警戒を強めようとしたところでなにかの咆哮が聞こえた。

???・???・???

「ギャオオオオオン!!!」

シン

「デイ・ラガンだな。よし!一気に奴を叩くぞ!」

スバル

「うん!」

レイ

「ああ!」

早苗

「はい!」

リオン

「わかった」

エミリア

「オツケー！」

シンの呼びかけに答えたスバル達は各々に武器を取り出し、**戦闘態**  
**勢をとる。**

ディ・ラガン

「ギャオオオオン！！」

それに対しディ・ラガンは先制とばかりに突進してきた。  
今、シン達のディ・ラガンとの戦いが始まったのだった。

## 第2話中編『ドラゴン退治〜草原の支配者〜前編』（後書き）

ども、飛鳥ですあけましておめでとっございます！

そして投下が遅くなっって済みません！！

今回はディ・ラガンとのエンカウントまでです。

道中早苗は自分たちの都合だけで生き物を殺してしまうことに戸惑いを持ち、

シャルティエはそんな彼女を説得する話となっています。

今回シンが使った武器はPSP02に登場するGRM製の最高水準の大剣です。

次回はディ・ラガンとの決着までを描きます。

ではノシ

## 第2話後篇『ドラゴン退治〜ディ・ラガン戦〜』

シンと出会ってから大体4年くらいたった。

最初の時はずっと迷惑をかけたっぱなしで少しでも役に立ちたいと頑張って戦う術を学んでいた。

今では背中を任されるくらいにはなっていると思いたいなー

海底レリクスの調査以来の時にシンのパートナーだった人にあつてからなんでか分からないけど胸がチクチクするんだ・・・

シン

「スバル！ぼつとするな！来るぞ！！」

スバル

「う、うん！！」

まあ、いいや

この仕事が終わったらレイさんと色々話したいなあ・・・

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〜世界を駆け巡る者達〜

第2話「ドラゴン退治〜ディ・ラガン戦〜」

ラフォン草原

ディ・ラガンの巣

ディ・ラガンは自分の巣に侵入してきた敵を察知すると、炎の塊を吐いてきた。

これに対してシンはライトニングエスパーダで炎の塊を真っ二つにしてこれを防いだ。

しかし、戦闘経験がほとんどないエミリアはまともに炎の塊に直撃してしまった。

エミリア

「あ、熱いいいいい!!」

シールドラインがあつたおかげで命に別状は無いが、炎によって服が燃え、燃烧状態になってしまった。

シン

「チイツ!!スバル!エミリアを頼む!レイは俺の援護を!!」

レイ

「わかった!」

スバル

「りょーかい!!」

スバルはすぐさまソルアトマイザーを取り出し使用する。ソルアトマイザーの効果によってエミリアは燃烧状態から脱出した。

エミリア

「アチチ……。よくもやったわねえ!!!!」

自分を燃烧状態にしたことにキレたエミリアはハンドガンを連射する。

早苗

「エミリアさん!落ち着いて下さい!!」

エミリアが連射した弾を掠めた早苗は抗議の声を上げた。

リオン

「馬鹿者！！今は戦闘に集中しろ！！」

リオンはそんな2人をいさめつつ、ディ・ラガンの頭を

リオン

「空襲剣！！」

連続で斬りつける。

ディ・ラガンの弱点は頭である。シンとスバルは陽動し、レイ達が頭を集中攻撃する。

その最中にレイが呟いた。

レイ

「これは時間がかかりそうだな」

その後、ディ・ラガンとの激戦が続いた。

ディ・ラガン戦闘開始から1時間後

シン

「これで！！終わりだ！！！！」

シンの斬撃がディ・ラガンの頭にクリーンヒットし、ディ・ラガンは崩れ落ちた。

スバル

「よっしゃあ！！勝った！！！！」

レイ

「さすがに疲れたな」

リオン

「まったくだ。とくにこの馬鹿者のせいだな」

早苗・エミリア

「ごめんなさい・・・」

勝利に喜ぶスバルと生身で長時間の戦闘で疲れているレイ、疲れという意味で同意するリオン、リオンの言葉でへこんでいる早苗とエミリアとそれぞれが思ったことを口にしていた。

シン

「任務も終わったことだし帰るか」

その後、シンの号令の後シン達はマイシップに戻り、クラッド6へ帰還した。

こうして、シン達のリトルウイングでの初仕事は終わりを告げた・・・。

第2話後篇『ドラゴン退治〜ディ・ラガン戦〜』（後書き）

どうも、飛鳥です。

色々と遅くなった割にこんな短いはなしですみません！！（土下座）  
今回はディ・ラガンとの戦いを書きましたが、短くなってしまいました・・・。

さて、次回で第2話は終了です。

内容は今回の戦闘での反省とクラウチからの依頼です。

では（・v・）ノシ



### 第3話『依頼完了の報告と新たな依頼』

まったく…この世界に来てからは色々と疲れることが多い…  
あいつらとの旅で少しは耐性がついたと思っていたがここの奴らは  
更に上をいくとはな…  
が、こんなやりとりも悪くないと思っている僕がいる…

早苗

「リオンさん。そろそろクラッド6に着きますよ」

リオン

「わかった。すぐに下船の支度する」

…どうやら僕もあいつらの影響を大いに受けているらしい…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

（世界を駆け巡る者達）

リトルウイング管轄区

デイ・ラガン討伐から3時間後

チエルシー

『確かに依頼の完了を確認したワ。みんなお疲れ様ダヨ！』

シン

「みんなお疲れ！今から1時間自由時間で、集合場所は俺の部屋な」

リオン・レイ

「わかった」

スバル

「オツケー！」

早苗

「わかりました」

エミリア

「りょーかい！」

チエルシーに依頼の完了をしらせ、マイシップから降りたシン達は1時間自由時間とし集合場所はシンの部屋と決め、解散した。

S i d e レイ&エミリア

エミリア

「ふい〜。やっと終わったあ…。あつ、あたしはオレンジジュースとパフェね！」

レイ

「初めてのミッションとしては上出来だと思っぞ。俺は紅茶とロールケーキをお願いします」

レイとエミリアはシン達と別れた後はカフェに来ていた。まず身体の疲労を考えたレイが提案したのだ。

エミリア

「うん！やっぱりここのパフェはおいしい！」

レイ

「このロールケーキもなかなかだな」

レイは紅茶とロールケーキをエミリアはオレンジジュースとパフェを注文し、舌鼓をうっていた。

S i d e シン&スバル

シンとスバルはレイ達と別れた後クラッド6のショップエリアに来

ていた。

スバル

「ふわ〜…疲れたあ…。シンはこれからどうするの？」

シン

「今回の依頼で消耗したアイテムの購入は今終わったからあとは今回の依頼の報告書の作成と新たな依頼の確保…」

スバル

「ええ〜…そんなことは後にしてアイスを食べに行こうよ」

スバルの質問をそう返したシンはそのまま報告書を作成しようとする。スバルは抗議の声を上げた。

スバルにとっては依頼が終わった後はゆっくり休憩…というより自分の好物であるアイスを食べに行きたいのである。

シン

「スバルがアイスを食べ始めると1時間じゃすまないだろ。ほら、さっさと報告書をまとめに行くぞ！」

スバル

「い〜や〜だ〜！！アイスを食べたいの〜！！！！」

スバルはシンに抵抗したが、シンはスバルの服の襟首を掴みそのままズルズルとシンの部屋にまで連行されていった。

スバル

「アイスを食べたー！！い！！！！」

S i d e リオン&早苗

リオンと早苗はシン達と別れた後、まっすぐ自室へと向かった。

部屋についたあと早苗に待っていたものはリオンの説教だった。

リオン

「お前は色々と無知過ぎる。依頼に行く場所くらいのことを知らないのなどはもつてのほかだ!!」

早苗

「あつう〜…」

リオン

「もう一つはせっかく購入したシールドを何故使わん!!あれを使っただけでもダメージをかなり軽減できるんだぞ!!」

早苗

「ひええ〜…」

リオン

「他にも…」

40分後…

リオン

「ふん。まあこのくらいで勘弁しておこう…」

早苗

「はいいい…」

やっと説教が終わった早苗はそのまま倒れこみ、足の痺れで動けな  
いでいた。

しかし早苗はこの説教は嫌だとは思わなかった。

何故なら今回の依頼でリオンも疲れている筈なのである。

それなのにリオンが自分の為に態々時間を割いてまでしてくれたもの  
なのだと思っていたからである。

実際リオンも2回の長い旅で自分の仲間が危機に瀕していたことが  
たびたびあり、早苗にもそのような空気があったためである。だが

ら少しでも早苗が大怪我をする確立を少しでも下げるために今回のような説教をした。

リオン

「足の痺れがとれたらのならシンの部屋へ行け。僕も後から行く」

早苗

「分かりました。では先に行っていますね」

早苗がリオンの部屋へ出て行ったあと、リオンはショップエリアに行き、ある物を買っていた。

リオン

「フツ…僕もすっかり甘くなったな…」

シャルティエ

「坊ちゃんも丸くなって僕は嬉しいですよ。できればディムロス達にも見せたかったなあ…」

リオンが自嘲的な笑みを浮かべながらそう呟くとシャルティエが横から口を出し

リオン

「（うるさいぞシャル！！）

シャルティエ

「アイタツ！！！」

リオンに思いつきりコアクリスタルを叩かれるのであった。

リトルウイング管轄区 シンの部屋

解散後から1時間後

シン  
「よし、みんな集まったな」

シンは自分の部屋に全員揃っていることを確認するとすぐにミーティングを始めようとするがそこにリオンのツツコミが入った。

リオン

「おい。お前の後ろにいる燃え尽きたスバルは何だ？」

そう。シンの後ろにはまるで「燃え尽きたぜ…」みたいな状態のスバルがいた。

シン

「ああ。コイツは報告書の作成をした後は大抵こうなる」

エミリア

「でもだからって普通はこうならないっしょ!？」

レイ

「あんな状態で大丈夫か？」

シン

「大丈夫だ。問題無い」

早苗

「ほ、本当に大丈夫なんですか？」

本気で心配しているエミリアと早苗をよそにシンはスバルに何かを呟くとスバルは

スバル

「ふっかーっ!！」

と叫びながら復活した。

シン

「と、じゃあ改めてミーティングを始めるぞ」

少女少女ミーティング中…

シン

「と、まあこんなもんだな。じゃあ今日はこれで解散な」  
リオン・レイ

「ああ」

早苗

「分かりました」

スバル・エミリア

「りよ〜かい！」

翌日

リトルウイング管轄区

シン達はクラウチに呼ばれリトルウイングのオフィスへ来ていた。

クラウチ

「よお！よく来てくれたな」

シン

「新しい依頼ってなんですか？」

シンはクラウチに依頼の内容を聞くとクラウチはこう答えた。

クラウチ

「コイツは緊急かつ重要な依頼だ」

それを聞いてごくりと喉を鳴らす早苗。  
そして

クラウチ

「今回の依頼は俺の借金の取り立てだ」

シン達は盛大にずっこけたのだった…。



### 第3話『依頼完了の報告と新たな依頼』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は依頼終了後のシンたちの動向とクラウチの新たな依頼です。

原作ではツケに関して抗議に行ったエミリア達に依頼されたものですが今回は正式な依頼として依頼されます。

まあシン達はずつこけましたがね^^;

この依頼を契機にいろんな事件に巻き込まれ+原作とは違う話になっていきます。

では失礼します(・・)ノシ

## スクリーンチャット集1

chat1「初めての共同任務」 任務開始直後

エミリア

「うう。ちゃんとアタシついていけるかなあ…?」

レイ

「できる限りはおれもサポートする」

エミリア

「ありがと…」

リオン

「気にするな」

エミリア

「リオン…」

リオン

「もとよりお前を戦力として見ていないからな」

エミリア

「ヒドッ!？」

早苗

「容赦ないですね…:;:;」

chat2「シンって何者? (1)」 シンがポルティを瞬殺した

直後

エミリア

「ねーねー早苗」

早苗

「なんですか? エミリアさん」

エミリア

「いやさーGRM社の最新鋭の試作品を持ってたっしょ? 一体何者なのかな〜って」

早苗

「そうですね〜あんなすごい武器を持っていますしね〜」

刹那、ナイフが飛んできてエミリアを掠めながら後ろにいたヴァーラの心臓に突き刺さる

ヴァーラ即死

シン

「2人ともぼさっとしてると置いて行くぞ」

シン、ヴァーラに刺さったナイフを回収して先へ進む

早苗

「は、はい!」

エミリア

「ちよっ、ちよっと待って!」

エミリア

「(シンって一体何者?)」

chat3「シンって何者?(2)」 chat2「シンって何者

?(1)」終了直後

エミリア

「ねーねースバル」

スバル

「どしたのエミリア?」

エミリア

「スバルっていつからシンと一緒にいたの?」

スバル

「うっん。だいたい4年ぐらいかな〜」

エミリア

「ぶっん。どんな経緯で会ったの?」

スバル

「え〜と。空港にお父さんを迎えに行った時に事故に巻き込まれて死にそうになったところを助けてもらってそれからずっと着いていつてる」

エミリア

「じゃあ何かシンについて知ってることってある?」

スバル

「知ってる限りでは色々仕事をしてそれが原因で何者かに追われているってことかな」

エミリア

「そ、そう。ありがとね」

スバル

「いいっていいって!」

エミリア

「(シンってますます何者なの?)」

chat4「何これ?」  
デイ・ラガン撃破直後

早苗

「ふうやっと終わりましたね…!」

リオン

「フン。まだまだだな」

早苗

「うー…」

早苗、近くにある岩に腰かけようとする。

早苗

「あいたっ!」

早苗、何かに引っかかってこける。

早苗

「いた〜い…」

リオン

「まったく馬鹿者が。自分の足元くらいしっかりと確認しろ」

早苗

「あう〜…。これってなんでしょう?」

早苗、自分の足に引っかけた物を拾う。

リオン

「何かの短刀のようだな」

早苗

「これも何かの縁ですしもらっておきましょう」

早苗、何かの短刀をゲット。

chat5「奇跡を起こす程度の能力」 chat4「何これ?」

終了直後

早苗

「(この短刀って何でしょう?)」

早苗、試しに目の前にある岩を手を取った短刀で斬ってみる。

岩石が真っ二つになる。

早苗

「え…?」

早苗、顔面蒼白になる。



「まさかとは思ったがそこまでの大業物だったとはな……」  
シャルティエ

『とんでもない運の持ち主ですね……』

早苗、短刀「カムイ」をゲット

chat6「休ませて〜」 パーティ解散後  
スバル

「シ〜ン…これで勘弁して…」

スバル、疲労困憊した顔をしている。

シン

「い〜や。駄目だ」

シン、人の悪い笑みを浮かべる

スバル

「ひえ〜…」

シン

「みんなが揃うまでに報告書が完成しなかったらアイスは1週間抜きな」

スバル

「うわ〜ん!!!」

## スクリーンチャット集1（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は短編集となります。

本編でなくてすみません。

今回のchat4・5に出てくるカムイは高レベルのディ・ラガンを倒した後に出てくるクリア箱にごく稀に出てくるかなりレアなダガーでかなりの強さをほこります。

では次回からはクラウチの依頼編になります。

では（・・・）ノシ



#### 第4話 『借金回収』前編』

私は何をやってるんだろう…

元の世界にいた時もお父さん、お母さん、神奈子様、諏訪子様に迷惑を掛けて…

私が中学校に入った時に事故でお父さんとお母さんが死んで、私の友達だった人達も戦争で皆死んで、幻想郷へ行く途中では神奈子様と諏訪子様ともはぐれて一人ぼっちになって

いきなり異形に襲われて殺されそうになった時にリオンさんに助けてもらって…

助けてもらった時にこの人と一緒に行きたいと言って無理矢理ついてきて…

最初の依頼だつて結局みんなの迷惑を掛けちゃって…

リオンさんとシンさん、スバルさんの高い戦闘能力…

レイさんとエミリアさんのような高い洞察力と記憶力…

でも私にはそんな能力なんか持っていない…

やっぱり私って必要ないのかな…

リオン

「早苗、さっさと準備してシン達と合流するぞ」

早苗

「は、はい！」

でも私は今ここに…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

『世界を駆け巡る者達』

リトルウイング管轄区 マイシップ

クラウチの依頼から30分後

エミリア

「うがー！！おっさんの奴隷には依頼も私物化してるじゃん！！」  
早苗

「まあまあエミリアさん」

レイ

「落ち着けエミリア。俺達はまだまだリトルウイングではルーキーだ。前回の依頼を受託できたのは運がよかつただけだ」  
リオン

「当然だな。ぽつとでの僕達をあのよくな依頼がくるだけでも優遇されているな」

スバル

「もしかしたらクラウチさんも何か考えがあるのかもしれないよ？」

エミリアが不満の叫びを上げ、それを4人がかりで宥めていると依頼の詳細を聞いてきたシンが入って来た。

シン

「みんな揃ってるな。じゃあ今回の依頼を説明するな」

傭兵説明中…

レイ

「なるほどな…。もういつでも発信できるようにしてある」

シン

「サンキュー。レイ」

スバル

「じゃあ出発進行！！」

傭兵移動中…

惑星モトウブ クロウドツク地方  
発進から1時間後

スバル

「さーて！着きましたよクロウドツク地方！！」

シン

「見渡す限り密林ばかりだな」

目的地に着き、周りの様子を見てみるとエミリアとレイはある事に気がついた。

エミリア

「ねえレイ。なんかここおかしくない？」

レイ

「ふむ。かなりの数の宇宙船がいるようだな」

エミリア

「でもさあ…これだけ船があるのに人っ子1人もいないなんて変じゃない？」

それは移動用の宇宙船はかなりあるのに肝心の人々がまったくみあたらないのである。

それを不審に思いながら探索を始めようとするとシン達を呼び止める声が上がった。

???

「おい、お前らここの住人じゃなさそうだな」  
リオン

「何者だ？」

その声に対してリオンはシャルティエを抜こうとするが先に呼び止めた声が自己紹介をする。

???

「俺はトニオ・リマ。ここでフリーの傭兵をやっている」

エミリア

「あたし達はリトルウイングの社員です一応…」

エミリアが代表として自分達の紹介をする（一言余計だったが）。そこにもう1人トニオを呼びながらやって来た人影がいた。

???

「駄目だよトニオ。こっちには人っ子1人いなかったよ!!…そっちの人達は？」

トニオ

「こいつらは俺達の同業者だよ…」

???

「そうかい…。あつ、あたしはリイナ・リマ！トニオと一緒に夫婦で傭兵をやってるんだ」

トニオ

「で、お前らは何の用でここに来たんだ？」

シン

「それは…」

傭兵説明中…

リイナ

「なるほどねえ。じゃあそっちは人探しに来たんだ」

スバル

「はい。そうですねです」

トニオはシンから説明を聞いた後シン達にある提案をした。

トニオ

「行く場所は同じか…。よっし、じゃあ俺達と一緒に行動しないか？」

エミリア

「えっ…？」

トニオの提案はシン達にとっては魅力的な提案であった。断る理由もないのでシン達はトニオ達と共に行動することにした。

早苗

「（なんだろう…：すごく嫌な感じがする・・・）」

一方早苗は凄く奇妙な感覚に囚われていた。

しばらくした後、この感覚の正体が明らかになることはこの時早苗は知る由もなかった…。

#### 第4話『借金回収〜前編〜』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はトニオ達と合流までのお話になりました。

今回はカーシユ族の少年との対決と事件の黒幕、そして異世界からの介入者の遭遇となる予定です。

では（・・・）ノシ

## キャラ設定1（前書き）

この小説に登場する主要人物の設定です。  
よろしければどうぞ。

\*原作のネタばれ？もあります。

## キャラ設定 1

シン・アスカ（特定不明）

本作主人公その1。

免疫能力のみ調整されたコーディネーター。

メサイア戦役の後彼に恨みを持つクライン派により捕まり、現在プラントでは表向きには禁止されている実験の実験台となり不老不死の薬を投与され、死ぬことができなくなってしまった。

デュランダル前議長の研究所にて発見された兵器『デバイス』のテストに参加させられたために彼の身に更なる悲劇が訪れる。

テストの内容とは相手の息の根が止まるまで戦闘を続けるといって危険過ぎる内容で、しかもその相手は自分のパートナーであり守ると誓ったルナマリア・ホークであった。

激闘の末にシンは生き残ることができたがその代償として、ルナマリアの命を自身の手で断ってしまった。

今までの過酷な実験で憎しみを抑えていたシンだったがこの実験に起きた悲劇により完全にタガが外れ、自分以外の全ての物を破壊しつくした。

実験の内容を知ったキラ・ヤマトが駆け付けた頃にはシンを除く全ての研究員が殺害されており、その惨劇の中心には亡骸となったルナマリアを抱きながら慟哭を上げるシンだけであった。

この事件の後、シンはキラに保護されたがこの件がラクス・クラインの耳元に届き、キラもまた命を狙われるようになり、結果キラはシンを凶弾から庇い命を落とした。

この後、シンはキラから渡された『携帯型次元転送装置』を使いC Eを離れた。

シンが転移した場所は人間と魔族が戦争をしている世界で、シンは



この戦争を止めるためにあの実験以来封印していた『デバイス・デステイニー』の封印を解き戦争を終結に導き、再び世界を旅する。そして悠久の時を経て数多の世界を旅したシンはミッドチルダ臨海第8空港にやってくるが丁度その時口ストギアという物によって大火災が発生している時であった。

その時シンが見たものはその場に取り残されていた少女・・・スバル・ナカジマが倒れていく像に押しつぶされそうになるという場面であった。

シンはすぐにデステイニーを起動させ倒れてくる像を両断し、スバルを命の危機から救った。

スバルを助けた後すぐに去ろうと次元転移をしようとするがスバルがシンの方に走ってきてしまったせいでスバルも転移に巻き込んでしまう。

すぐにスバルを帰そうとするシンだったが、スバルの決意の固さに遂に折れ、共に旅をすることになる。

スバルが共に旅をするようになって4年がたった時、2人はグラール太陽系と呼ばれる星系にやってきていた。

パルムを本拠地にし、傭兵を始めた2人は簡単な依頼を確実にこなしてある程度有名になった時ある依頼が届く。

その依頼を受けた時にかつて死別した親友とスバルに次ぐ新たな仲間達と出会う。

依頼が完了し、報酬を受け取った後にクラウチのスカウトを受けリトルウイングに入社することになる。

使用デバイスはデステイニー。

普段の依頼遂行時ではライトニング・エスパードとエンシエント・クォーツ、オブシディアン（ブラックカラー）を使う。

スバル・ナカジマ（15）

本作ヒロインその1。

シンの新たなパートナー。

『無限の欲望』というコードネームで創りだされた男・・・ジューエル・スカエリツティによって創りだされた『戦闘機人タイプゼロ・セカンド』。

父のゲンヤを迎えに行くために姉のギンガと共にミッドチルダ臨海第8空港を訪れるが、ロストギアによる大火災が発生しギンガと逸れてしまう。

安全な場所を求めて空港の奥へ向かうスバルだったが、そこは既に火の手が回っており、戻ろうにも元来た道は炎の壁によって塞がれ動くことができなくなる。

そして、崩れた像がスバルを押しつぶそうとした瞬間、突然現れた少年・・・シン・アスカに助けられる。

シンはスバルを助けた後すぐに去ろうとするがスバルはお礼を言っていないかったためお礼を言おうとシンに向かって走り出しシンを引き留めようとするがそのまま転移に巻き込まれ、ミッドチルダから離れることになる。

シンはスバルをすぐにミッドチルダへ帰そうとするが、9日にわたる説得の末に旅の動向を許される。

スバルがシンと旅をするようになって4年後、スバルは順調に成長し、今ではシンの背中を任せられる新たなパートナーとなっている。使用デバイスはインパルス（出会った時はマツハキヤリバーを持っている）。  
（いない為）。

普段の依頼遂行時使用武器はティーガ・ド・ラガンとティーガ・ラガン、サーペンティン（シルバーカラー）を使う

リオン・マグナス（16）

本作主人公その2。

本名エミリオ・カトレット。

元セインガルド王国客員剣士。

かつて自分の大切な人であるマリアンをミクトランの手から救い出すために仲間であったスタン・エルロン達を裏切り、スタンに未来を託し、濁流に飲み込まれ命を落とした。

しかしリオンはフォルトウナから生み出された聖女エルレインの力により蘇生されてしまう。

その後、スタンの息子であるカイル・デュナミスと出会い、彼から『ジューダス』という名を貰う。

カイル達と別れたりオンはカイル達を見守っていたがあまりにも頼りないのでストレライズ大神殿にて再び手を貸し、そのままカイル達と行動することになる。

その旅の中エルレインは過去へ向かい歴史を歪ませた世界へ来たりオン達は自分達の歴史を取り戻すべくエルレインと戦い神の卵にてエルレインとフォルトウナを倒すが歴史の修正作用によりリオンのいた世界から去った。

リオンは目を覚ますと自分が生きていることと現在の自分の服装、そして鞘の中に納まっていた剣が歴史を正す戦いの時に消滅した筈のソーディアン・シャルティエであることに驚愕したがシャルティエとの相談の末現状の確認の為に周囲を探索することにした。

その時にモンスターに襲われていた少女・・東風谷 早苗を助け彼女の頼みにより仕方なく早苗と共にレリクスの探索をしている時に新たな仲間と出会う。

レリクスを脱出した後はクラウドにスカウトされ早苗と共にリトルウイングへ入社することになる。

使用する武器はソーディアン・シャルティエ。

東風谷 早苗（16）

本作ヒロインその2。

守矢神社の風祝。

早苗のいた世界は神への信仰が薄れ信仰がないと存在することができない八坂 神奈子と洩矢 諏訪子は今後どうやって生き残るかを話し合った結果ある賭けに出た。

その賭けとは今早苗が住んでいる世界の信仰を代償に人間と妖怪が共存する世界『幻想郷』へ転移し、そこで人間と妖怪から信仰を得るというものであった。

早苗は長い葛藤の末に2柱の賭けに乗ることを決意し、自分がいた世界に別れを告げ転移した。

しかし、転移している最中に大きな歪みが発生し、早苗は歪みの中に吸い込まれてしまい、2柱から逸れてしまった。

目を覚ました早苗は自分が見慣れない場所にいることに混乱し、その状態でモンスターに襲われ迎撃しようとするが秘術を使用することができず絶体絶命の危機におそわれる。

しかし、偶然現場にいた少年・・・リオン・マグナスに助けられる。

助けられた後早苗はリオンと一緒に行動してほしいと頼み、結果リオンは同行してくれることになる。

その後、海底レリクスを脱出した2人はクラウチにスカウトされリトルウイングへ入社することになる。

なお、早苗の両親は事故で死亡し、友人達は戦地へ駆り出され全員戦死している。

装備は入社後にリオンと相談して購入したセイバーとシールド、探索時に拾ったハンドガンとウオンド。

レイ・ザ・バレル（17）

本作主人公その3。

シンの親友。

スーパーコーディネーターを創る資金源として創りだされたアル・

ダ・フラガのクローン。

クローンのため寿命が極端に短くメサイア戦役前には後数年しか時間が残されていなかった。

そのためレイはデュランダル議長の創る世界を創りだすためにキラ・ヤマトと戦い、敗れ、しかもデュランダル議長を自分の手で撃つてしまう。

悲しみと後悔に苛まれたレイはこのまま死ぬことを決意したがその直後にシンの呼びかけに覚悟が揺さぶられてしまう。

その時デュランダル議長からデバイス『レジェンド』を受け取った瞬間デュランダル議長によってCEから転移させられた。

転移したレイは現状の確認をすると今自分が持っている物は今着ているザフトの赤服とデュランダル議長から託された物のみだった。

何か使える物はないかと探索していくうちに、モンスターに襲われている少女・・・エミリア・パージパルを発見する。エミリアを助けようとするレイだったが、今自分は非武装状態であることを歯痒く感じたがその時デバイス『レジェンド』が起動する。

レジェンドを起動したレイはエミリアを襲っていたモンスターを倒し、エミリアと共にレリクスから脱出するために奥へと進み再起動したスヴァティアと遭遇し、辛くも撃退するが、レイの持病が再発し、心配になったエミリアの注意がレイに向けた瞬間にスヴァルティアが再び起動し、エミリアを庇い致命傷を負う。

薄れゆく意識の中最後に聞こえた声は  
『あなたを死なせはしません・・・』という声であった。

目を覚ましたレイは近くにいた女性・・・チエルシーにここはどこかと尋ねここがクラッド6と呼ばれるコロニーでこの部屋は民間軍事会社リトルウイングだということを知る。

その直後クラウチにスカウトされ、リトルウイングの社員となるこ

とを決意する。

その後シンと再会し新たな仲間の出会うことになる。

尚、ミカがレイの身体を修復する際にテロメアも修復したため、寿命の心配はなくなった。

使用デバイスはレジェンド。

普段の依頼遂行時はエンシエント・クォーツとティーガ・ド・ラガン、インフィニットコランダム（シルバーカラー）を使う。

エミリア・パージバル（16）

本作ヒロインその3。

記憶喪失の少女。

元ガーディアンズ。

（かつては孤児だったが非常に高い記憶力と演算能力に注目され、ガーディアンズの研究部に所属していたがリュクロスの調査隊のメンバーとして参加した時に見捨てられてしまい、命を落とした。その瞬間リュクロスに眠っていたミカが覚醒し、エミリアを蘇生するが、エミリアは見捨てられたショックで記憶を失ってしまう。また、非常に高い演算能力を持つエミリアを生体パーツとして稼働するテンマのコアとして利用されていた。これによってエミリアは無意識のうちにガーディアンズに対する不信任感を持っている）

家でいつもぐうたらしていたために自分の引き取り手であるクラウチに強引にリトルウイングに加入させられ、海底レリクスの調査が初任務となる。

クラウチが依頼を探しに行くのを見送った後突然頭痛に苛まれ、気が付いたら自分1人になっていた。

いつの間にか1人になったことにオロオロしていたエミリアは突然モンスターに襲われてしまう。

戦闘経験の無い彼女は逃げるので精一杯だったが追い詰められ、自

分の死を意識した瞬間、突然現れた少年・・・レイ・ザ・バレルによって助けられる。

レイはここから脱出するために奥へ向かうと言うがエミリアはこれに反対し引き留めようとするがレイはそのまま奥へ向かっていったため渋々ついていくことにした。

最深部に着いて一安心するエミリアだったが機能を停止していた筈のスヴァルティアがいきなり再起動しエミリアとレイに襲いかかれるが辛くも撃退に成功する。

しかし、レイが突然苦しみだし、心配になったエミリアが注意を逸らした時スヴァルティアがいきなり再起動しエミリアへ襲いかかるがレイがエミリアを庇い致命傷を負うこの時からエミリアの記憶は無いが彼女の中で眠っていたミカが再び覚醒し、レイを蘇生した。

目を覚ましたエミリアはここは自分とクラウチの部屋だと認識するときさっきまでの出来事が夢だったと自己完結する。

その直後にクラウチに呼び出され渋々リトルウイングへ向かった。

そこでエミリアは夢で会った筈のレイと再会する。

そして、新たな仲間と出会うことになる。

使用する武器は入社時に支給されたセイバーとハンドガン・海底レリクスを搜索している時にレイが発見したクラーリタ・ヴィサスを使う。

ソーディアン・シャルティエ

リオンの居た世界でかつて行われていた天地戦争で製作された決戦兵器。

シャルティエという人物の人格が埋め込まれており、自我を持っている。

リオンが「ジューダス」として行動している時に歴史修正の際に失われていたがフォルトゥナが消滅したことによって「なかったこと

に『されたため、リオンと共にグラールへ流れ着いた。流れ着いた後もリオンと共に行動しており、自分の声が聞こえるシン達の話相手になったり、相談役をしていたりしている。今のリオンの雰囲気がいい方向に向かっていることをとても喜んでおり、リオンを変えてくれた人々には常に感謝している。

#### 特殊設定

早苗の故郷について

早苗の故郷はシンとレイと同じC・E。

しかし、ラクス・クラインの行った政策に反対した結果戦争状態となり、その為友人は全員戦地へ駆り出され、全員死亡し、早苗が離れた直後にラクス・クライン直属の部隊通称『歌姫の騎士団』によって壊滅している。



## キャラ設定1（後書き）

どうも飛鳥です。

少し話が進んだので本編に出てくる7人の紹介と独自の設定を書きました。

早苗に関しては9割以上が早苗の設定をみて独自解釈をした結果こうなりました。

宗教が壊滅的な打撃を受けたC・Eなら2柱の神の存在が危険な状態に納得できるので…（ヲイ

では（・・・）ノシ

#### 第4話『借金回収〜後編〜』

今更だが世界は広いと知っている…

本当ならあの場で死ぬはずだった俺が今この場で生きている。

あの時ギルからレジエンドという名のデバイスを託されてから色々なことが起きた…

エミリアを庇い死んだと思えば何故か生きていて、更にはもう寿命が尽きてもおかしくなかった筈なのに人並み位には生きられるようになったりと…

それだけではなく、二度と会えないと思ったシンとの再会もできた…  
事実小説よりも奇なりというがまさにこのことだな…

エミリア

「お〜い。レイ！準備が終わったよー！！」

レイ

「わかった。すぐに出発するぞ」

今俺ができることはここにいる仲間と共に戦うことだな…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〜世界を駆け巡る者達〜

惑星モトウブ クロウドック地方

出発から10分後

トニオ達と共に行動し、カーシユ族の村を目指して進むシン達は襲いかかる原生生物を倒しながら進むと1つの分岐道にあたった。

スバル

「わわ！前の道は炎に遮られてて進めないよ！！」

リイナ

「たぶんカーシュ族がやったんだね。仲間にはか道を分らないようにするために」

トニオ

「近くに何かオブジェクトが無いか確認するしかないな」

レイ

「周辺の搜索をする組と周囲の警戒をする組と分けるべきだろう」

リオン

「同感だな。搜索はシン、レイ、エミリア、リイナの4人、周囲の警戒は僕と早苗、スバル、トニオでいいだろう」

スバル

「よーし！頑張るぞー！！」

傭兵搜索中…

早苗

「？これは何だろ？」

シン達が探索をしている間、周囲の警戒をしていた早苗だったが、変な形の塊を2つ見つけ、それを拾った。

早苗

「何かの剣のようだけど…」

早苗は自分が拾った2振りの剣を眺めながら

早苗

「でも何か変な形…」

そう拾った2振りの剣を酷評しながら周囲の探索をしていると何か変な暗号らしきものを発見した。

早苗

「これって…」

早苗はまさかとは思いつつもリイナを呼びに行くことにした。

惑星モトウブ クロウドック地方 分岐エリア

探索から20分後

リイナ

「まさかここに暗号があるなんてね…」

レイ

「まさに灯台下暗しだな」

早苗が見つけた暗号のあった場所とはエリアの中央にあった紫の花の中にあつたのである。

傭兵解読中…

リイナ

「えーと読むよ。『我ら火を恐れぬ者なり。怖れる抱く者怖れに焼かれるであろう』って書いてあるよ」

リイナがそのメッセージを読み終わると同時にレイは答えを導き出した。

レイ

「おそらくは火に怯えて別の道に行くと待っているのは灼熱地獄。

つまり正解は炎のある方だろう」

エミリア

「ええっ！？でも本物の炎だったらどうするのさ！」

レイの回答に対して進むことをためらっていたエミリアを見て、早苗はそのままつっきることにした。

早苗

「あれ？まったく熱く無いですよ？」

早苗の勇気ある行動もあってこの道が確実に正解だと判断したシン達は炎の遮る道を進んだ。

傭兵進行中…

惑星モトウブ クロウドック地方

レイ

「ここまで順調に進むことができたな」

トニオ

「だな。おっ、これも目印だな。リイナ、解読を頼む」

リイナ

「あいよ。…うーん、これは…」

エミリア

「あ、これこの先の道のりについてだ」

リイナ

「え？」

エミリア

「今までの目印と違ってかなり詳細に書いてあるね」

レイ

「おそらくこれが最後の目印だろう」

エミリア

「だね。とすると……」

レイ

「ふむ、どうやら割と近い場所にあるようだな」

先程のような分岐エリアに何度か遭遇したがその度に解読し、順調に進み続けたシン達はまた新たなメッセージを発見して解読しようとする。エミリアとレイがすぐに解読して見せた。

リイナ

「…なんで読めるんだい？」

エミリア

「なんで…って」

リイナに質問されてレイはこう返した。

レイ

「先程からリイナが読んでいる所を後ろから見ただけだが…」

リオン

「だとしても理解が早すぎないか？僕にはさっぱりわからんが…」

エミリア

「そ、そんなことないって。誰にだってできるよ、これくらい！」

リオンにも言われてしどろもどろになりながら答えを濁したエミリアは近くにいたスバルに助けを求めたが。

スバル

「うん！全然わかんない！！」

スバルは堂々と分らないと返した。

レイ

「気にするな。俺は気にしない」

エミリア

「レイは気にしなくても私は気にするの！！ホラホラこっちだよ！早くいこー！」

レイのフォローになってないフォローに突っ込みを入れながら先へ進もうとするとエミリアの目の前にフォトンの矢が刺さった。

エミリア

「え、なに！？」

トニオ

「あいつか！」

エミリアいきなりのものでパニックになる。そんなエミリアをよそにトニオは矢を放った犯人と思われる少年を発見した。

トニオ

「もらったぜ！！」

????

「ッ！ハアアアア！！！！」

トニオ

「なに！？」

リイナ

「危ない！！」

スバル

「大丈夫ですか！？」

トニオはその犯人である少年に対しクローで斬りかかろうとするがそれに対し、何かの魔法陣を展開し迎撃、リイナがトニオに飛びかかって回避できたがその炎の影響で2人とも大ダメージを受けた。もし回避できなかつたら完全に2人の肉体が溶けていたかもしれない。

リオン

「あれはミラージュブラストか、厄介だな…」

早苗

「ミラージュブラスト？」

リオン

「擬似的に精霊を呼び出して攻撃をする攻撃方法のことだ」

早苗

「そんな物が…」

シン

「俺達は2人の治療に入るから2人は奴を頼む！」

早苗

「は、はい!!」

シン達はトニオとリイナの治療をしていて手が離せない為、リオンと早苗は2人で戦うことになった。

???

「はあ!!」

リオン

「遅い。幻影刃！」

少年は槍を使ってリオンを突き刺そうとするがリオンは難なく回避し少年を斬りつけた。



???

「うつ…」

まさかの反撃に少年は少し態勢を崩したが、それが命取りであった。

リオン

「一気に畳み掛ける！爪竜連牙斬！月閃光！月閃虚崩！飛燕連斬！崩龍斬光剣！！消えろ！雑魚が！！」

早苗

「す、すごい…」

少年に待っていたのはリオンの剣技のラッシュであった。早苗はリオンの独壇場を見て呆然とする。

早苗

「（皆これだけ頑張っているのに私は何もできないまま…）」

がそれと同時に強い自己嫌悪に陥り、最初の分岐エリアで拾った剣を強く握りしめた。

早苗が自己嫌悪に陥っている間にリオンは少年にトドメを掛けに入った。

リオン

「塵も残さん！！奥義！！浄破滅焼闇！！！！」  
???

「僕は…まだ…」

リオン

「闇の炎に焼かれて消えろ！！！！」

リオンの放った奥義によって少年は気を失い、リオンの勝利となった。

た。

リオン

「勝てるつもりでも思ったのか？」

惑星モトウブ クロウドック地方

カーシュ族の少年との戦闘から30分後

シン

「これでよし」と

トニオ

「わりいな。まさかここまでやられるとは思わなかったぜ」

トニオとリイナの応急処置を終えたシン達はリオンに負けて気を失っている少年を見ながら今後の方針について考えることにした。

スバル

「この子をどうするのか？」

レイ

「おそらく彼はカーシュ族の者で、カーシュ族の村に何か異変があったのだろう」

トニオ

「仕方ねえ。ここは分担するか」

エミリア

「でも、あたし達の船に医療用の施設は無いし…」

リイナ

「じゃあ、あたし達がこの子を運ぶよ」

トニオ

「俺達の船には医療用の設備もあるからな」

スバル達はその提案に賛成しようとしたがそこにシンが異論を唱えた。

シン

「でもトニオ達もさっきのミラージュブラストのダメージを受けているだろ？俺と一緒に同行するけどいいか？」

エミリア

「ええ！？それじゃあこっちの戦力はほぼ半減じゃん！！」  
レイ

「しかし、傷だらけの彼らでも不安は残るからな」

スバル

「うん。わかった！じゃあトニオさん達はよろしくね！！」

エミリア

「うー…分かったよ！でも早く追いついてきてね！」

エミリアはそれに対して不満を漏らしたが傷だらけのトニオ達をこのままにすることにも抵抗があつたため渋々承諾した。

傭兵進行中…

惑星モトウブ クロウドック地方 カーシュ族の村

カーシュ族の少年との戦闘から10分後

シン達と別れ、先へ進んでいたスバル達は襲いかかる原生生物達を蹴散らしながら進み、カーシュ族の村にたどりついた。

スバル

「やっとカーシュ族の村に着いたね！」

レイ

「途中の原生生物も大したことはなかったな」

しかし、ここでエミリアはある異変に気がついた。

エミリア

「でもなんか凄く焦げ臭くない？」

そう。エミリアの気付いた異変とは焦げ臭さであったのである。

カーシュ族の話聞く限りここまで焦げ臭くなるような事はしないし、なによりもシン達と別れる前に襲ってきたカーシュ族の少年の事を考えるとここで何か事件が起きている筈である。

そう思ったエミリア達が先へ進むと彼女達の眼に映ったのは村全体が炎で覆い尽くされており、その中心に黒服の男とエミリア達が探していたワレリー・ココフをはじめとする逃走している集団、そして明らかに場違いの服装を着た女性と少女と子供2人であった。

??????

「まさか貴様らが動いているとはな」

??????

「あなたを次元犯罪者として逮捕、及びあなたの持っているソレを渡してもらいます！」

??????

「ふん！これはこの世界を貴様達の手から守る希望なのだ！貴様達などに渡すような物ではない！！！」

黒服の男が忌々しげにどこかの組織の名前を呼び、その組織の所属している人物が黒服の男の名を呼び男の逮捕と同時に彼の持っている赤いノートのような物を渡せと言うが無論、男はこれを拒否し、戦闘が始まった。

目の前で繰り広げられている戦闘はとてもではないが人間ができるような動きではない。

しかし、これをただ黙ってみている訳ではないエミリアが叫んだ。

エミリア

「あんた達ね!!ここをこんなにもした奴らは!!」

??????&?????

「!」

エミリアの叫びを聞いて戦闘を中断してエミリア達に目がいった。

??????

「こんなところにまだ人が居たのか!早くこの場から立ち去れ!」

エミリア

「いやそうはいかないね!ここをこんなにした犯人が目の前にいるんだから…」

エミリアが黒服の男に対して反論していたらいきなり女性の方がビームのような光線を放ち、エミリアに直撃した。

早苗

「エミリアさん!!」

早苗が悲鳴にも似た叫びを上げてエミリアのもとに駆け寄ると、エミリアは気を失っていた。  
が、ひとつ違和感があった。

早苗

「(傷が付いていない?)」

それはエミリアの身体に傷が一つもついていなかったのである。

??????

「あなた達もこの場を見た者なら『保護』させてもらいます」  
リオン

「ふん。『保護』よりも『確保』だろう?」

シャルティエ

『(うわー…坊ちゃん滅茶苦茶怒ってるよ…。)』

レイ

「お前達のような奴に『保護』されるのはごめんだな」

?????

「仕方がない…ならあなた達を『保護』させてもらいます!!皆準備

はいい?」

?????

「は、はい!」

女性の言葉に対してリオンとレイは反抗の意思を見せ戦闘が始まった。

?????

「落ちなさい!!」

レイ

「遅いな。こんな弾などすぐに撃ち落とせる」

まず女性の傍らにいた銃らしきものを持った少女が銃らしき物を構え光弾を放つがレイはインフィニットコランダムを使って全て撃ち落としました。

更にお返しとばかりに逆に少女の持っている銃を狙撃して破壊した。

?????

「ウソ!?クロスミラージュが!」

レイ

「この程度か?」

一方リオンはというと少年と少女2人を相手にしていた。

???

「はあ!！」

リオン

「遅い。幻影刃!！」

???

「フリード!お願い!」

フリードと呼ばれたドラゴン

「ぎゃおおおん!！」

リオン

「チッ!」

少年が繰り出した槍を難なくかわしたりリオンだが少女が召喚したドラゴンのプレスを受けそうになって回避したが苦戦していた。

134

早苗

「リオンさん!！」

倒れたエミリアを介抱していた早苗は自分の無力を呪っていた。

早苗

「(なんで私には力が無いの!?またあの時のような事を見ているだけしかないの!?)」

早苗はかつて自分の居た故郷のことを思い出していた。戦争によって戦地へ駆り出されて死んでいった友人達。そして、それをただ見送ることしかできなかった自分。

早苗

「もうあんな思いはしたくない！私だってリオンさんと一緒に戦いたい！！」

そう自己嫌悪している早苗に聞きなれない言葉が頭に響いた。

??????

『（お前。力が欲しいのか？）』

早苗

「（誰！？）」

スバル

「早苗？」

??????

『（力が欲しいのなら我の名を呼べ！）』

その内容は早苗にとって最も欲しい答えだった。

スバルは早苗を心配そうな目で見ていたが、早苗はスバルの視線を無視し、自分の頭の中に響く言葉に呼応するかのようにその声がする剣を掲げその剣の名…

スバル

「ちよつと！早苗！？」

??????

『（我が名は…）』

早苗

「（あなたの名前は…）」

??????&早苗

『「デイルロス！！」』

リオンの世界で失われた筈だった天地戦争の切り札としてシャルテ



イエと共に開発されたソーディアン…  
『ディムロス』の名を叫んだ。

リオン

「ディムロスだと!？」

シャルティエ

『うそ!? 確かに懐かしい気配がすると思ってたけどまさかディムロスだったなんて!!』

驚愕するリオンとシャルティエを余所に早苗とエミリアのいた場所を中心に巨大な炎の柱が立った。

惑星モトウブ クロウドツク地方

ディムロスの覚醒によって発生した炎の柱はスバル達と合流する為に移動していたシン達も見えた。

トニオ

「おいおいあそこは…」

リイナ

「カーシュ族の村がある所だよ!!」

シン

「まさかスバル達に何かあったのか!？」

炎の柱を見たシンはそのまま走りだした。

トニオ

「お、おい!! 待って!!」

シン

「(スバル、みんな! 無事でいてくれ!!)」

シンを追うようにトニオとリイナも走り、シンはスバル達の無事を願いながら全力で走って行った。

惑星モトウブ クロウドツク地方 カーシユ族の村

正体不明の敵との戦いは早苗がディムロスを覚醒させたことにより危険と判断して正体不明の敵が撤退し、黒服の男もいつの間にかいなくなったことにより終息した。

その最大の功労者である早苗は敵が撤退した直後に気を失い、リオンに支えられていた。

そこに別れていたシン達がやってきた。

トニオ

「おいお前ら！無事かって…なんじゃこりゃ！！」

リイナ

「ひどい…」

やって来たシン達もカーシユ族の村の惨状を見て思わず息を飲んだ。その後事後処理をしてシン達はトニオ達と別れクラッド6へ帰還することとなった。

シンを除く全員が依頼失敗という最後に顔を歪めながら…。

#### 第4話『借金回収〜後編〜』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回もこのような小説を読んでいたいただきありがとうございます。

さて、今回はカーシュ族の少年との戦い黒幕の男と異世界からの介入者の遭遇と早苗と彼女が道中に拾ったソーディアン「デймロス」の覚醒ともう一つの謎の剣の獲得というお話です。

いきなりデймロスが出ることにびっくりしているかもしれません。何故デймロスが存在しているのかは後に明らかになります。

では（・・・）ノシ

## 第5話『動き出した影』

あたしが何を行っても信じてくれる人なんかいなかった。あたしが言うことはみんな子供の戯言だと言って聞く耳を持ってくれる人なんていなかった。

でも、最近はおたしの言うことを信じてくれる人ができた。

シン…早苗…スバル…リオン…そしてレイ…

この人達はあたしが言うことを信じてくれた。

早苗やスバルなんかはこんなあたしと友達だと言ってくれている。まるで夢みたいに感じるんだ。

でもこれは現実だと信じたいの。

チエルシー

「あ！エミリア！やっと気がついたのネ！！」

エミリア

「チエルシー？あたし…」

そうしないとあたしの心が壊れてしまうから。

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

（世界を駆け巡る者達）

リトルウイング管轄区 カフェ

モトウブ帰還から10分後

モトウブから帰還したシン達はまだ気を失っている早苗とエミリア、カーシュ族の少年をチエルシーに任じたシン達はクラウチに呼ばれ、シンとスバルはカフェへ向かいリオンとレイは早苗とエミリアを見てほしいと頼まれ医務室へ向かった。

シン

「シン・アスカ及びスバル・ナカジマ、出頭しました」

クラウチ

「よお来たか。先に一杯やらせてもらっているぜ」

シンとスバルが見たのはカフェで飲酒しているクラウチだった。

シン

「昼間に飲酒は体に毒ですよ？」

クラウチ

「まあいいじゃねえか」

スバル

「あ、あの今回依頼をしてもらったのに失敗してしまってますみません！！」

シンとクラウチがお決まりの定型文を言った後スバルは最初にしたことは謝罪だった。しかし、クラウチの反応はスバルの予想の斜め上を言っていた。

クラウチ

「あん？なに言ってやがる？俺は報酬の話でお前らを呼んだんだぜ？」

スバル

「はへ？」

失敗した筈なのに報酬の話と聞いてスバルは思考停止寸前になった。それも無理はない話である。つい先程まで依頼が失敗した事での叱責だと思っただけ報酬の話になってるからである。

スバル

「え？でも？あたし達依頼に失敗した筈じゃあ？」

シン

「ああ。状況が状況だったから言えなかったが…」

スバルがこれ以上考えると知恵熱を起こして倒れそうだったのでシンが説明することにした。

シン

「実はと言うとあの炎の柱が立った位にクラウチさんがワレリーさんを捕まえて借金を回収していたんだ」

傭兵説明中…

つまりシンのお話をまとめると

シン、炎の柱を見て嫌な予感がする。

ワレリーの船が動き出す。

シン、通信を開いてクラウチにワレリーが動き出したことを伝える。

クラウチ、先回りする。

ワレリー確保。

借金回収（ついでに事情聴取）。

スバルはシンの手腕に感服するばかりだった。

もし自分がシンと同じ場面に直面したらここまでの機転は利かなか

「ただらう。絶対に早苗達を心配してクラウチに連絡することを怠ったらう。しかし」

スバル

「じゃあ何で先に説明してくれなかったのさ!？」

事前にこのことを知っていればここまで落ち込まなくてもよかつただらう。

このことにスバルは不満を持っていた。

が、シンにも言わなかった理由はあつた。

シン

「もしあの状況でスバル達に言つてもリオンやレイはともかくスバルだと混乱するだらう？」

スバル

「う…」

立て続けに状況が変わり続けたあの戦場でそのようなことを言つてもおそらく頭に入るところかかえつて混乱しただらう。

そのためシンは報酬を貰つてから事情を話そうとしたのだ。

クラウチ

「つてなわけで俺は借金も回収できたし言つことは無いんだがあいつの言つていたことが気になつてな」

シン

「気になること？」

クラウチ

「なんでも変な嬢ちゃん達に声を掛けられてから記憶がまったく無くて気が付いたらカーシュ族の村がボウボウと燃えていただよ」

スバル

「（もしかしてカーシュ族の村にいたあの人達かな？）  
クラウチ

「ま、それに関しては俺も調べとく」

シンはクラウチの言っていた「変な嬢ちゃん」という単語にひっかかりを覚えたが報酬を貰ったのでそれ以上の追及はしないことにした。

クラウチ

「足手まといを抱えながらにしては上等な成果だぜ。あとさっきエミリアと早苗が目を覚ましたと連絡が入ったぜ」  
スバル

「本当ですか！？ならいこ！シン！！」

シン

「わ、わかったって…あんまり引っ張るなよ！」

エミリアと早苗が目を覚ましたと聞いてシンを引っ張っていくスバルを見てクラウチは昔の事を思い出し、思わず頬を緩めながらシン達を見送っていた。

惑星モトウブ レリクス

ここは惑星モトウブに存在するレリクス  
しかしグラールの人達にはここにはまだ足を踏み入れているレリクスである。

そこにはカーシュ族の村を襲撃した犯人である女性達…  
時空管理局のグラール本部が設営されていた。

?????

「フェイトちゃん。首尾はどうだった？」



フェイトと呼ばれた女性

「あ、なのは。ごめん、駄目だった。あと少しまではいったんだけど…」

なのはと呼ばれた女性

「フェイトちゃんらしくないよね…。どんな人が相手だったの？」

フェイト

「黒いコートを着た男性なんだけど…」

なのは

「今私達が追っている次元犯罪者カムハーンだね」

フェイトと呼ばれた女性はなのはという女性に自分の戦った黒服の男との戦闘データを見せた。

なのは

「うそ！？これ本当に人の動き？」

なのははフェイトから見せてもらった戦闘データを見て、ただ驚くばかりだった。

それも無理は無い話で魔法を使っている自分達はともかく魔法なしでこのような動きをしてみせたのである。

フェイト

「あとこの人以外にも危険な人物がいたの」

なのは

「危険な人物？」

なのははこの世界にまだ危険な人物がいると聞いて驚き、フェイトに続きを促した。

フェイト

「うん。まず金髪の女の子なんだけど私の撃ったサンダースマッシュの直撃を受けても気絶しただけだった」

なのは

「え？」

フェイト

「次は黒髪の男の子。エリオとキャロが2人がかりで挑んだけど傷をつけられなかったの」

なのは

「あの2人もかなり強くなってる筈だけど…」

フェイト

「次に金髪の男の人。ティアナが戦ったけどクロスミラーージュを破壊されてしまったの」

なのは

「…確か今ティアナの魔導ランクはAだった筈だよね…」

フェイト

「最後に緑の髪の女の子。この子自体は攻撃してこなかったけど一番危険だと思う」

なのは

「なにがあつたの？」

フェイト

「なのはもあの炎の柱を見たと思うけどその発生源は彼女なの」

なのは

「うわあ…」

フェイト

「さらに…」

なのは

「まだあるの!？」

なのははさっきからぶっ飛んだ内容ばかり聞かされていたが次にフェイトが口にした言葉が彼女を更に驚愕させることとなる。

フェイト

「この人達と一緒にいた女の子も含めて全員ロストギアを所持して  
た」

なのは

「そんな…」

フェイト

「ロストギアは危険な物だから早く確保しないとイケないね…」  
なのは

「うん」

彼女達：遺失物管理部・機動六課：通称起動六課はグラールにある  
ロストギアの回収の為にこの世界に来ていた。

なのは達は自分達がやっていることは正しいと思っている。

その価値観はおそらく死ぬまで無くならないだろう。

全ては管理世界の平和の為に…。

その正義を妄信しながら機動六課はこの世界に大きな混乱を起こし、  
それが原因で次元戦争がおこる事など知らずに…。

## 第5話『動き出した影』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はクラウチへの報告と異世界の介入者「機動六課」のお話です。クラウチから聞いた不審な人物にシンは疑問を抱き、次のお話でその正体が発覚、シンと時空管理局との関係を描きたいと思います。ここからは原作と大きく話が変わっていきます。  
では（・・・）ノシ

## キャラ設定2（前書き）

今回紹介するキャラクターはシン、レイ、早苗と密接なかかわりを  
持っている

C・Eのキャラが中心です。

名前がまだ出ていないキャラクターも多数います。

原作を重視していますが違つところも多いのでご了承ください。

## キャラ設定2

キラ・ヤマト（享年25歳）

ラクス・クライン親衛隊「歌姫の騎士団隊長」

スーパーコーディネーター。

シンにとって切っても切れない縁があった人物。

シンの両親や守りたい存在だったステラ・ルーシエを殺した張本人メサイア戦役の後ラクス・クラインの護衛として行動していた。

しかし、彼女と行動を共にしていくうちに不信感が大きくなり独自に彼女のやっつけていることを調査していた際に不老不死の研究、新型兵器『デバイス』の起動実験を知り現場へ急行した。

その時に心が壊れたシンを保護し、彼を匿うことにした。

2年の時間をかけてシンの心がようやく治りかけていたところに歌姫の騎士団の襲撃にあう。

その際にシンを狙った凶弾からシンを庇い、致命傷を負う。

自分の死を悟った彼はシンにあることを頼み、息を引き取った。

シンは彼の願いをかなえるために今も世界を駆けまわっている。

ルナマリア・ホーク（享年22歳）

元ザフト赤服

プラントのコーディネーター。

シンのパートナー。

シンとはザフトのアカデミーからの仲。

メサイア戦役後シンと同じく歌姫の騎士団に捕らわれクライン派が所持している研究施設に入れられ人体実験の被検体とされる。

その際に人の枠を超えた力を持った彼女だが、代償は彼女の心だった。

心が壊れた彼女は体の隅々を改造し尽くされ、ついにはメサイアで発見された新型兵器『デバイス』の実験体とさせられる。

その後、テストと称してシンと戦わされ命を落とす。

このテストの後その施設は暴走したシンによって破壊された。彼女の死は未だにシンが背負う十字架となっている。

ギルバート・デュランダル（享年32歳）

元プラント最高評議会議長。

プラントで最高評議会の議長をする前は学者だった。

実はこの時にジェイル・スカエリツティと接触しており、彼からデバイスの作成方法とクローンの寿命を延ばす方法を知り、議長としての仕事をこなしながらレイが服用していた薬の精製とデバイス『デステイニー』、『レジェンド』、『インパルス』を作り上げた。

その後メサイア宙域戦でレイへ『レジェンド』を託し息を引き取る。しかし、このデバイスが原因でシンの悲劇が引き起こされるとは彼は知る由もなかった。

その他

ラクス・クライン（25）

現プラント最高評議会議長  
存命。

早苗の故郷を滅ぼした元凶。

密接に関わっていた人物曰く彼女の父であるシーゲルの死から変わったと言っている。

裏で何か怪しい実験をしている。

アスラン・ザラ（25）

オーブ軍中将

存命。

早苗の故郷を滅ぼした部隊を指揮していた人物。キラの死後から性格が急変し、邪魔をする者は問答無用で殺すほどになった。

カガリ・ユラ・アスハ（25）

元オーブ元首  
存命。

メサイア戦役の後自分の無知さを痛感し、一通りの作業を行った後オーブ防衛戦で奇跡的に生きていたユウナ・ロマ・セイランのもとで政治学を勉強中。

メイリン・ホーク（享年22歳）

元ミネルバオペレーター

ルナマリアの死後、重い病を患い彼女の後を追うかのように息を引き取った。

ユウナ・ロマ・セイラン（29）

オーブ五大氏族セイラン家当主  
存命。

メサイア戦役後壊滅したセイラン家の当主となる。

現在は仕事の合間にカガリへ政治学を教えている。

ステラ・ルーシエ（享年16歳）

エクステンデット

ベルリン事件にてキラの手で致命傷を負い、シンの腕の中で息を引



き取る。

彼女の死はルナマリアと共にシンが背負う十字架となっている。

マユ・アスカ（死亡していたら享年9歳）

オーブ解放作戦の際にフリーダムの流れ弾によって行方不明となる。  
シンは彼女は死んだのだと認識している。

八坂 神奈子（特定不明）

早苗が仕えていた神。

自分と諏訪子のいく末を考慮した結果幻想郷へ行くことを決意。  
しかし幻想郷へ移動している最中に早苗と逸れてしまう。

洩矢 諏訪子（特定不明）

早苗が仕えていた神。

自分と諏訪子のいく末を考慮した結果幻想郷へ行くことを決意。  
しかし幻想郷へ移動している最中に早苗と逸れてしまう。

また、早苗の先祖でもある。

ソーディアン・ディムロス

天地戦争で作られた決戦兵器。

ワレリーを追っている最中に早苗が拾った剣。

早苗の精神に感応し、覚醒する。

もともとはダイクロフトでその役目を終え消えるはずだったが  
他のソーディアン共々、何者かの手によってグラールへ飛ばされる。  
他のソーディアンはどこにあるかは不明。

## キャラ設定2（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はキャラ紹介です。

種死からのキャラが大半ですが別の作品のキャラもいます。  
色々とおかしいかもしれませんがそこは脳内補正で（ヲイ  
では（・・・）ノシ

## 第6話 『決意する者達』

僕は正直なぜ自分が生きているのかよくわからない。

あの時に僕はソーディアンの役割を終えて消える筈だった。

しかもまた坊ちゃんとかうして話をして、共に戦うことができる。

さらには坊ちゃんがマリアン以外の人に興味を持ったことに僕はすごく嬉しい。

最近は早苗って子が気になる。

なんか坊ちゃんに似ている所もあるし僕の声も聞こえる。

まあ早苗さん以外にも僕の声が聞こえる人が4人もいたけどね…。

最近は早苗さんがこの前の任務の時にディムロスを持ってマスターになった。

ディムロスが言うには僕たち以外のソーディアンもどこかに飛ばされたらしい。

でも、状況が変わろうと僕の役目は変わらない

早苗

「ほえ…?」

シャルティエ

『あ、早苗さん。起きたんだ。坊ちゃん、早苗さんが起きましたよ！』

リオン

「まったく…。やっと起きたか」

早苗

「はれ?リオンさんにシャルティエさん?」

僕はソーディアン・シャルティエ。

僕のマスター、リオン・マグナスの剣だ。

〈世界を駆け巡る者達〉

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

クラウチへの報告から10分後

クラウチから早苗とエミリアが目を覚ましたと聞いたスバルはシンを引っ張って他のメンバーがいる医務室へ向かった。

医務室へ着くとすぐに入ったスバルは早苗とエミリアに身体の調子を聞くが特に問題は無かったので全員はシンにカーシュ族の村で起きたことを話す為にシンの部屋に向かった。

シン

「それでカーシュ族の村で何があったんだ？」

レイ

「ああ。まずは……」

少年説明中……

レイ

「ということだ」

エミリア

「えっと……その事は夢じゃないの？」

リオン

「そつだ。何も覚えていないのか？」

レイがカーシュ族の村で起こった事の説明を終えたらエミリアがいきなり夢じゃなかったと言いだしたので不審に思ったリオンはエミリアを問いただすことにした。

少年説明中…

エミリア

「やっぱり夢じゃなかったんだ…」

そのことを聞いたエミリアは表情を暗くするともうひとつ自分が夢の出来事だと思っていたことがもしかしたら現実に起こったことなのではないかと思ったエミリアが更にレイへ質問した。

エミリア

「もしかしてあたしのせいでレイは一度死んじゃっているの!？」

レイ

「……………ああ。そうだ」

ミカ

『そうです。夢ではありません』

レイが質問に答えたあとエミリアからミカがでてきた。

ミカ

『ようやく私の存在に気づいてくれたのですね…エミリア…』

エミリア

「え!?! あんた誰!?! 急に私の身体から出てきた!?!」

エミリアはいきなりこのことで動揺する。

しかしこれは大抵の人はエミリアと同じ反応をするだろう。いきなり自分の身体から何も知らない女性が出てきたのだから無理もない。

更には自分の頭の中に様々な情報が流れ込んでくるのである。しかし、エミリアはその情報からひとつの結論を出した。

エミリア

「ようはこれってあたし達の抹殺計画ってことなの？」

ミカ

『身体を器、精神を命と考えるならそうなりますね』

エミリアはしばらくうつむいたままだったが、ある決意をした。

エミリア

「ねえみんな」

レイ

「なんだ？」

エミリア

「あたし戦うのは好きじゃないし得意じゃない。けど、強くなりたいの！！」

エミリアの決意：それは強くなることである。

確かに今の自分は強くない。しかし、強くなることができる。

だからエミリアは自分が知っている中でも最高峰の実力を持つシン達に強くしてほしいと願った。

レイ

「その心構えが大切だ」

リオン

「フン。そこまで強くなりたいのなら付き合おう」

シャルティエ

『僕もできる限り手伝うよ！』

スバル

「うん！あたし達でよければいつでも付き合おう！！」  
シン

「でもあまり無理はするなよ」

レイ達はエミリアの頼みを受け入れた。

エミリア

「みんな…ありがとう！」

自分の頼みを聞いてくれたシン達が承諾してくれたことに喜ぶエミリア。

しかし、シン達はそこに影を差している少女が居たことに気がつかなかった。

早苗

「（やっぱり私は弱い…。皆の前で私も強くしてほしいなんて言えない…）」

影を差している少女…早苗は喜ぶエミリアを傍目に自己嫌悪に陥っていた。

自分も一緒に強くしてほしいと言えばおそらく彼らは協力してくれるだろう。

しかし、早苗はその一步を踏み出せずに皆の眼に入らぬ所で俯くだけだった。

ディムロス

『（早苗？どうかしたのか？）』

早苗

「（いえ、なんでも無いです）」

そこに心配になったディムロスが声を掛けるが早苗は気が付きなんでもないと答えた。

その反応がかえってディムロスを心配させていることに気がつかず

に。

惑星パルム インヘルト社 シズルの部屋

モトウブでの戦いから2日後

ここは惑星パルムにあるインヘルト社。

今やグラールに無くてはならないほどに急成長をした会社である。

この部屋はインヘルト社の社長ナツメ・シュウの息子であるシズル・シュウの部屋である。

そして、その部屋にいるのはこの部屋の主であるシズルと彼の中に宿っている太陽王カムハーンであった。

シズル

「（カムハーン。あの時あなたが言っていた時空管理局とは彼女達のことなのか？）」

カムハーン

『（うむ。奴らはお主たちで言う旧文明時代からこの世界の宝を盗もうとしていた者達だ）』

シズルはカムハーンにカーシュ族の村で遭遇した女性…フェイト達の事を聞いた。

シズル

「（でも管理局とやらはむこうの世界では1000年程度しか歴史が無い筈だったが…）」

シズルの疑問…。

それはどう考えても彼女達の時間とここグラールの時間の流れがどう考えても違うことに気がついた。

それに対してカムハーンの答えはこうだった。



カムハーン

『（奴らの世界とこの世界との時間軸はかなり異なる）  
シズル

「（そんなことが本当に起こるのか？）」

カムハーン

『（現にモトウブで奴らと出会ったのがその最たる例だ）  
シズル

「（そうか……。ではあなたの言っていた【復活計画】とは？）」

カムハーン

『む、そういえば説明していなかったな』  
シズル

「（ああ。説明を頼む）」

もうひとつシズルが疑問に思ったのは【復活計画】の内容である。  
カムハーンはこの質問に対する答えも持っていた。

カムハーン

『（あの計画は元々この世界の民たちを乗っ取るなどという計画ではない）』

シズル

「（？では本当の内容は？）」

カムハーン

『（【復活計画】の本来の目的は奴らを我らの潜伏場所であるマガハラに奴らを誘き出して一網打尽にする計画の事だ）』  
シズル

「（しかし、前に言っていたミカという女性はこの世界の民を乗っ取る計画だったとして反対したらしいが？）」

カムハーン

『（うむ。私とお前以外にこの計画の真相を知っているのは私の友

「ただだ」

シズル

「（友？）」

カムハーン

「（その者の名はシン。そしてワイナルだ）」

シズル

「（片方は聞いたことがある。確かシン・アスカ。今は傭兵をやっているらしいけど）」

カムハーン

「（ああ。だから私はSEEDに侵された身体を押しして奴の剣を創った）」

シズル

「（剣？）」

シズルは今のグラールの技術を超えた技術を持つ旧文明人の最先端の技術を持ったカムハーンが創ったという『剣』が気になった。

カムハーン

「（それは奴が生まれた世界で使っていた兵器だ）」

シズル

「（そうか…）」

カムハーン

「（さて、時空管理局にこれ以上この世界を汚さない為にもうしばし、付き合ってくれ）」

シズル

「（ああ。一度失われた命だ。だからこの命は僕を育ててくれたこの世界を守るために使う！！）」

シズルはこれ以上管理局に自分達の故郷を汚されない為に自分の命を賭して戦うことを決意するのだった…。

## 第6話『決意する者達』（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は目を覚ましたエミリアの決意と早苗の葛藤、そしてシズルの決意という話になっています。

本作に登場するカムハーンは原作とは性格が違っているのでそこはご了承ください。

では（．．）ノシ

## キャラ設定3 (前書き)

キャラ紹介第3回目です。

今回紹介するキャラクターはシン達が所属しているリトルウイングとグラールを騒がす起動六課、影でグラールを守る者達です。

まだ出ていないキャラもいます。

では、どうぞ。

### キャラ設定3

クラウチ・ミユラー（34）

リトルウイングの総括役でありエミリアの保護者。  
元警察官。

リトルウイングで依頼の管理や新しい人材のスカウトを主に担当している。

原作よりは真面目に働いているがたまにサボる。

しかし、彼の仕事は非常に質が高く彼がいなかったらリトルウイングの機能は麻痺してしまう。

また、人材を見抜く眼を持っており、シンをはじめ優秀な人材を見事に集めている。

エミリアに対しては自分の娘のように大切にしているが昔いた自分の娘を思い出してしまうこととリトルウイングの総括をしているために私情を挟めないため冷たく接している（まあそれでも彼女にあった依頼を用意したりレイ達を教官にするあたりは甘いが）。

チエルシー・トーン（特定不能）

リトルウイングの経理および受付嬢。  
元同盟軍教官。

リトルウイングの経理などが彼女の仕事。

クラウチと同じく彼女がいなかったらリトルウイングの機能が麻痺してしまう。

特徴的なしゃべり方が特徴。

エミリアは自分の妹または娘として可愛がっている。クラウチの悩みを知る数少ない人物。

ミカ（28）

エミリアの中に宿る旧文明人。

カムハーンの妃でもあり、太陽妃と呼ばれていた科学者。

もともとカムハーンの仲は良好だったのだが管理局の仕業によって関係が悪化、それが誤解だと知る前に封印される。

クノー・オーガスト（26）

傭兵。

元ガーディアンズ。

リトルウイングに所属する傭兵。

前にエミリアの教官になったことがあるが1日でエミリアがギブアップした。

エミリアはガーディアンズにいたころから顔を知っておりそれ故に彼女を気にかけている。

今後はバスク共々早苗の特訓を手伝うことになる。

バスク・ウギン（特定不能）

傭兵。

リトルウイングに所属する傭兵。

もともとはフリーの傭兵だったがクラウチにスカウトされ、リトルウイングに入ることにする。

エミリアと早苗が非常に気になっている。

今後はクノー共々早苗の特訓を手伝うことになる。

トニオ・リマ（29）

傭兵。

元ガーディアンズ。

リトルウイングに所属する傭兵。  
もともとはフリーの傭兵でシン達と行動していたがユートのミラー  
ジユブラストによって負傷する。  
その後、気を失ったユートをリイナとシンと共に自分の船へ運び、  
スバル達と合流する。  
スバルの話聞いてリイナと共に荒らしまわった犯人達を逮捕して  
いたところをクラウチにスカウトされ、リトルウイングに所属する  
ことになる。

ガーディアンズを辞めたのはリイナのこともあるが制服を着せられ  
そうになったため抜けたらしい。

リイナ・リマ（25）  
傭兵。

元タイラー・ファミリーでラインディール号の副艦長。

もともとはフリーの傭兵でシン達と行動していたがユートのミラー  
ジユブラストによって負傷する。  
その後、気を失ったユートをリイナとシンと共に自分の船へ運び、  
スバル達と合流する。  
スバルの話聞いてリイナと共に荒らしまわった犯人達を逮捕して  
いたところをクラウチにスカウトされ、リトルウイングに所属する  
ことになる。

実はトニオの子供を懐妊している。

高町 なのは（19）

時空管理局に所属する少女  
機動六課隊長。

管理局の指示によりグラールに点在するロストギアの回収のためと次元犯罪者カムハーンの逮捕の為にグラールへやってくる。自分に気に食わないことをすると「少し、頭冷やそっか…」と言って肅清することもある（主にティアナ）。

管理局の正義を妄信している傾向がある。

しかし、その無茶苦茶な行動である人物の逆鱗に触れることになる。

フエイト・テストロッサ・ハオラウン（19）

時空管理局に所属する少女。

機動六課副隊長。

管理局の指示によりグラールに点在するロストギアの回収のためと次元犯罪者カムハーンの逮捕の為にグラールへやってくる。

惑星モトウブのカーシユ族の村を焼いた犯人。

理由は危険なロストギアを渡さなかったため。

カーシユ族の村でレッド・タブレットを入手する直前まで順調だったがカムハーンとリオン達の妨害により失敗する。

しかし、その無茶苦茶な行動である人物の逆鱗に触れることになる。

八神 はやて（19）

元時空管理局に所属していた少女。

J・S事件を契機に時空管理局の闇を知ってしまい現在狙われているグラールにこの危機を伝えるためにヴォルケンリッターと共に管理局を脱走する。

しかし、途中でなのは達の妨害に遭い散り散りになってしまう。

無一文の状態で生き倒れてしまい、シユウに保護される。

この時にシズルに惚れてしまう。



ヴォルケンリッターの面々  
夜天の書の守護プログラム

主であるはやてと共に管理局を脱走するが逸れてしまい、散り散りになった。

シグナムは同盟軍

ヴィータはガーディアンズ

シャマルはグラール教団

ザフィーラはリトルウイングに保護される。

それぞれ別の方面ではやてと仲間を探している。

フォワードのメンバー

原作との大きな違いはスバルがいないこと。

惑星モトウブのカーシュ族の村でレイとリオンの2人に戦闘を挑むがティアナはクロスミラージユを破壊され、エリオとキャロは連携でリオンを苦しめたが早苗の介入により敗北した。

シズル・シュウ（20）

新進気鋭の会社インヘルト社の会長ナツメ・シュウの息子。

亜空間発生装置を完成させたのは彼による功績だが一度事故を引き起こしその際に一瞬だがマガハラへの道を開く。

その際に致命傷を負うがカムハーンの手によって蘇生され、カムハーンからこのグラールを狙うものが来ると言われ半信半疑でカーシユ族の村へ向かった際に管理局の所業を見て真実だと分かり、彼と共に管理局と戦うことを決意する。

その後、情報収集のために街へ行こうとする際に行き倒れたはやてと遭遇、急遽インヘルト社へ連れていきはやてから管理局の狙いを聞くこととなる。

カムハーン（特定不能）

かつての旧文明人の頂点に立っていた太陽王。

管理局からグラールを守っていた人物。

かつてSEEDが来襲する前にやってきた管理局員を殲滅し、反撃としてミットチルダに赴き、管理局に大ダメージを与えたことにより次元犯罪者とされる。

旧文明人の大半に嫌われていたがそれでもグラールと自分の民の為に奔走していた。

ミカとはかつて最も信頼していた人物だったが、管理局により【復活計画】の情報の行き違いが発生、関係が悪化してしまい、誤解を解く前にミカは封印されてしまった。

現在はシユウの中に宿り、時としてシズルの身体を借りて行動することがある。

おそらく本作で最も原作から離れたキャラとなっている。

### キャラ設定3 (後書き)

どうも飛鳥です。

今回はシン達の見方と敵を中心にしたキャラ設定です。

一部原作からかけ離れた設定となっておりますがそこは脳内補正で  
ライ

では(・・)(ノシ

## 第7話『休息』

何故我は生きているのだ

我らはソーディアンとしての役目を終え消える筈だった  
しかし、気が付いたらまだ幼い少女が我を手にしていて  
そして、その少女は我の精神と無意識にリンクしていた  
その時我は奇妙な縁を感じこの少女…早苗を我のマスターに選んだ  
この少女は誰かの為に行動をしたいと願っている  
だから我は早苗の剣となったのだ

だが、このままではいずれ自滅してしまうそれだけは避けねばならぬ

早苗

「デймロス？どうかしましたか？」

デймロス

『む、少し考え事をしていただけだ』

早苗

「そうですか…」

この幼きマスターを戦場で死なせるわけにはいかんからな

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〈世界を駆け巡る者達〉

第7話「休息」

クラッド6 リトルウイング管轄区

パーティ解散から10分後

エミリアの決意を聞き、今後の方針を決めたシン達はパーティを解

散することにした。

本当ならすぐにも修行をしたいところなのだがクラウチの依頼を遂行していた際の戦闘の疲労があるため一時休養をするべきだとリオンが提案したからである。

side シン & スバル

シン

「まさか管理局がもうここまで手を出していたとはな…」

スバル

「え？あの人達管理局の人だったの!？」

シンはスバル達からカーシユ族の村で起こった事件を聞き、顔を顰めた。

一方スバルカーシユ族の村で遭遇した女性達が管理局と聞いて驚いていた。

シン

「お前、あいつらの正体に気がつかなかったのか？」

スバル

「う、うん…」

シンはそんなスバルを見て盛大に呆れていた。

まあ管理局の本拠地であるミッドチルダの住人でしかも父親と姉が管理局の職員（更に父親は1つの部隊の長）のスバルが管理局の顔の1人であるフェイトを知らなかったと聞けば誰もが呆れるだろう。

シン

「しかし現地の住人を操ってまでロストギアを奪おうとするなんて

「正気じゃないな」  
スバル

「その人達は保護されたらしいけどその時の記憶が無いつてクラウド  
チさんが言ってたね」

シン

「おそらくフェイト・テスタロッサがいるなら高町　なのはと

八神　はやてが来ていてもおかしくないな…」

シンは海底レリクスで発見した2振りの剣を思い出した。

エルシディオンとレーヴァンティン

この2振りはおそらく管理局が喉から手が出るほど欲しがっている  
ロストギアの中でも最高峰の逸品だろう。

だからこそシンはこの2振りだけは絶対に管理局に渡さないと決意  
したのであった…。

S i d e l e i & エミリア

シン達と別れたレイとエミリアはカフェに来ていた。

このカフェはレイとエミリアのお気に入りの店である。

だからこうした自由時間の時には必ず来ている。

エミリア

「ごめんね。無茶を言って…」

レイ

「気にするな。俺は気にしない…」

注文を終えた後、エミリアは開口一番に謝罪の言葉を発した。

が、レイは特に気にしないと返し、注文したモノが来るのを待って  
いた。

エミリア

「みんなはミカの事を知っていたの？」

レイ

「ああ。お前に部屋の使い方を聞いた後にな」

エミリアはミカの事をいつから知っているのかとレイに聞いたらレイはエミリアに  
マイルームの使い方を教わった後だと答え、エミリアは少しへこんでいた。

エミリア

「やっぱりあの時かあ……」

レイ

「あの時に伝えなかったのはお前が信じないと思っていたから皆黙っていた。気を悪くしたらすまない」

エミリア

「ううん。いいよ……。たぶんあの時に言ってもあたしは信じなかったと思うし……」

レイは今までエミリアにミカの事を黙っていた事を謝罪するがエミリアは気にしていなかった。

もしあの時に自分がそのことを聞いても信じなかっただろう。今でこそミカと話せるために本当だと信じられるがあの時に言っても信じなかっただろう。

だからエミリアは気にしてないと答えたのだった。

そんなやり取りをしているうちに注文していたモノが着た。

エミリア

「さあ！湿っぽい話は終わり！食べよ！！」

レイ

「ああ。そつだな……」

湿っぽい話を終わりにしたレイとエミリアは注文した料理に舌鼓を打つのだった…。

S i d e リオン&早苗（+シャルティエ&デймロス）

シン達と別れた直後、シャルティエはリオンに話しかけた。

シャルティエ

『坊ちゃん。ちょっと早苗さんと話したいんですけどいいですか？』

リオン

「？かまわん」

デймロス

『なら我は少しリオンと話がしたいのだが構わないか？』

早苗

「？はい。わかりました」

なにやら真剣な声でシャルティエがリオンに頼んだのでリオンは承諾し、デймロスもリオンに用があるらしいのでリオンと早苗はお互いのソーディアンを交換したのだった。

S i d e リオン&デймロス

リオン

「なに？早苗に剣の扱い方を教えてほしいだど？」

デймロス

『うむ。早苗は剣を扱ったことは無いらしくてな』

リオンはデймロスに『早苗に剣の扱い方を教えてほしい』と頼ま



れて眉をひそめた。

無論、デймロスも無理な頼みだと承知しつつもリオンに頼んだ。しかしデймロスの知り合いでこのような頼みを言える人がいるわけもない。

だからデймロスはシャルティエのマスターでありセインガルドでも有数の剣士であったリオンにしかこの頼みはできないのである。

デймロス

『それにお前はシャルティエを使っている期間が長いだろう？』

リオン

「たしかに物心がつく前からシャルと共にいたからな」

デймロス

『だからこそだ。ソーディアンを扱える者が増えれば戦力の増強もできるだろう？』

デймロスの言っている事は正論だった。

今はただでさえ戦力が傾いている今のパーティの状態であるため早苗が強くなれば戦力の向上にもなるしデймロスを使いこなせればリオン達にとっては大きくプラスになる。

リオン

「ふん。いいだろう。その頼みを聞こう」

デймロス

「！すまん。助かる」

リオン

「ただし、あいつが根を上げたらすぐに中断するからな」

デймロス

『それでも助かる』

だからリオンはデймロスの頼みを聞いた。

リオンは何故こうも簡単にこの頼みを引き受けたのかと思いつながら…。

Side 早苗&シャルティエ

シャルティエ

『お疲れ様。早苗さん』

早苗

「ありがとうございます。シャルティエさん」

シャルティエ

『うーん。そうだ。早苗さん、これから僕のことを【シャル】って呼んでくれないかい?』

早苗

「え? いいんですか?」

シャルティエ

『いいのいいの』

早苗

「はい。じゃあこれから私の事は【早苗】って呼んでくださいね」  
シャルティエ  
『オツケー。早苗』

リオンと別れた早苗は自分の部屋でシャルティエと話をしていた。シャルティエはこれから自分を呼ぶ時はシャルと呼ぶように頼み、早苗もさんづけ無しで呼んでくれるように頼んだ後早苗は気になった事があった。

早苗

「ねえシャル」

シャルティエ

『なんだい早苗?』

早苗

「この剣って見覚えはないですか？」

シャルティエ

「！これって！？早苗、君はこれをどこで！？」

そういつて早苗が見せた物は何かの剣であった。

それを見たシャルティエは驚愕し、早苗にどこでこの剣を捨てたのかを尋ねた。

早苗

「えーっと、ディムロスを捨てたところと同じ場所ですけど」

シャルティエ

「ソーディアン・ベルセリオス！？確かもう存在していないはずなのに！」

早苗

「ベルセリオス？」

早苗はシャルティエがここまで驚く物だとは思わなかったらしい。

シャルティエ

「僕やディムロスと同じソーディアンだよ！」

早苗

「ええええええええ！？」

ベルセリオス（以下ハロルド）

「なによ〜うるさいわね〜！シャルティエ！！」

シャルティエ

「ハロルド！？目を覚ましたの！？」

慌てる2人に聞き覚えのない女性の声及早苗の頭に響いた。

どうやら先程のやり取りで目を覚ましたらしい。

ハロルド

『たしか天地戦争で兄貴が死んだあと機能を停止した所までは覚えてるんだけどね』

早苗

「お兄さん？」

ハロルドの兄貴という言葉に早苗は疑問に思ったのでシャルティエに尋ねたら

シャルティエ

『うん。ソーディアン・ベルセリオスはハロルドの意思が入ってて

…』

ハロルド

『私の兄貴がマスターだったわけ』

早苗

「なるほど…」

と説明されて納得した早苗だった。

そこにハロルドがさらなる質問を早苗に投げかけた。

ハロルド

『あんた見ない顔ね。もしかして異世界にでも飛んだのかしら？』

早苗

「え？どうしてそれを？」

ハロルド

『あらら。一番低い可能性を言ってみたけれどそれが当たりなんてね。さっすが私』

早苗はハロルドがいきなり的を射た質問をしてきたので戸惑う。

ハロルドはそんな彼女の様子を見て自分の予想が当たった事に満足していた。

シャルティエ

『と、とりあえず坊ちゃんもディムロスにこの事を話そう！』

早苗

「は、はい！」

ハロルド

『ディムロスもいるのね…。ぐふふ これからが楽しみだわ 』

早苗はとりあえず新しいソーディアンを手に入れた事をリオンに伝えるためにリオンの部屋へ向かったのだった…。

S i d e リオン&早苗

リオンの部屋

早苗はもう一つのハロルドの事をリオンを話をする為にリオンの部屋を訪れた。

早苗

「リオンさん！ちょっといいですか？」

リオン

「どうした？」

早苗

「この剣を知っていますか？」

リオンに用件を聞かれた早苗はナノトランサーから

ソーディアン・ベルセリオスを取りだし、リオンとディムロスに見せた。

ハロルド

『ハアーイジューダス。久しぶりねえ』

リオン

「なっ!？」

ディムロス

『ハロルド!？お前もこの世界に来ていたのか!？』

ハロルド

『そーよお。なんでも早苗が言うにはアンタの隣に落ちていたそうよ』

リオンとディムロスはかつての仲間との突然の再会にただ驚くしかなかった。

ハロルドは自分がディムロスと共に早苗に回収され、ついさっき眼を覚ました事をリオンとディムロスに伝えた。

リオンはハロルドの説明を聞き終わった後ディムロスからの頼まれごとを思い出した。

リオン

「なるほどな。それと早苗、お前に話がある」

早苗

「はえ？」

リオン

「明日から僕の下でソーディアンの扱い方の訓練をするぞ」

早苗

「!それじゃあ!..」

リオン

「ただし、少しでも音をあげたら中止するからな」

早苗

「はい!ありがとうございます!..」

早苗はリオンが自分の訓練に付き合ってくれと聞いて喜び、  
リオンはそんな早苗を呆れながら見ているのであった…。

## 第7話『休息』（後書き）

どうも飛鳥です。

投稿が遅くなって誠に申し上げられません。（土下座）

今回の話で早苗が持ってきたもう1振りの剣はソーディアン・ベル  
セリオスこと

ハロルドでした。

今後ハロルドはシン達の頭脳として共に行動をしていく予定です。  
では（・・・）ノシ



## スクリーンチャット集2

小説本文 chat7「教えて！シン！！（1）」 クラッド6から帰還した直後

スバル

「ねーねーシン！」

シン

「どうした？」

スバル

「ミラージュブラストってなに？」

シン

「元々はカーシユ族が持っていた技術で…」

スバル

「あーそういう難しい話は勘弁…」

シン

「まあ簡単に言うと必殺技だな」

スバル

「必殺技かあ…」

シン

「ユニットがあれば俺達も使えるぞ」

スバル

「ホントに！？じゃあ今からユニットを買ってくる！！」 走って去ろうとする

シン

「おい！クラウチさんへの報告はどうするんだよ！？」

スバル

「あつ。そうだった…」

シン

「まったく…それに今装備しているシールドラインにもつ登録され

ているぞ」

スバル

「え…？あ。ホントだ」シールドラインの情報を見て気がつく  
シン

「おいおい…」

chat8「教えて！シン！！（2）」パーティ解散後シンとスバルの会話の後

chat7「教えて！シ

ン！」を見ている

スバル

「ねーねーシン」

シン

「またなにか気になることがあるのか？」コーヒーを口に含む  
スバル

「シンが言っていた高町 なのはって人と八神 はやてという人って誰？」

シン

「ブハッ！！」口に含んだコーヒーを吹いてむせる  
スバル

「大丈夫？」シンを心配そうに見る  
シン

「ゴホゴホ…。お前その2人のことを知らないのか！？」  
スバル

「あとフェイトっていう人も知らない！」胸を張って答える  
シン

「…高町 なのはは管理局のエースオブエースと呼ばれていて八神  
はやては

若き指揮官として注目されていてフェイト・テストロッサ・ハオ  
ラウンは

若い執政官だけではなくて成功率100%で有名な奴らで管理局の広告塔だ」

スバル

「へーすごい人なんだねー」

シン

「スバル…」ジト目でスバルを見る

スバル

「ほえ？」

シン

「1週間アイス抜きな」

スバル

「ええー!?!」

chat9「シンって何者?(3)」  
ームへ戻っている途中

カフェで一息ついてマイル

chat3「シンって何者

?(2)」を見ている

エミリア

「ねーねーレイー」

レイ

「どうした？」

エミリア

「シンって何者が知ってる?」

レイ

「ある程度なら知っているが…」

エミリア

「よかつたら教えてもらってもいい?」

レイ

「俺が知る範疇でいいのならな」

エミリア

「うん」

レイ

「まずあいつは俺と同郷で別れる前まではルームメイトだった」

エミリア

「ええ！？そうなの！？」

レイ

「ああ。後俺の居た世界ではエースとして有名になったが暴走するあいつを抑えるのは大変だった…」どこか遠くを眺める視線

エミリア

「そ、そう。ありがとね！レイ！！」

レイ

「俺の知っている情報が役に立ったのなら幸いだ」

エミリア

「(とてつもなく戦闘力が高くて仕事のせいである組織に追われていてレイとは同郷でエースって…ホントに何者?)」

chat10「1000年ぶりの再会」リオンが早苗に剣術と昌術の扱い方を教えると言った後

デймロス

「まさかこうしてハロルドと会話できる日が来るとはな…」

シャルティエ

「第2次天地戦争では話すことができませんでしたからね…」

ハロルド

「私のせいで色々あったらしいけどよろしく頼むわねん」

デймロス

「ああ。これからよろしく頼むぞ」

シャルティエ

「ハロルドがいるとこっちの戦力もアップしますね！」

ハロルド

「ぐふふ この天才科学者ハロルド様にまかせなさい」

chat11「強運？」　リオンが早苗に剣術と昌術の扱い方を教えると言った後

chat5「奇跡を起こす程度の能力」を  
見ている

リオン

「まさかソーディアンを二つも持ってくるとはな……」

早苗

「私もびっくりしてます……」

リオン

「一体いつ手に入れた？」

早苗

「皆さんが目印を探している時にデймロスと一緒に端っこに落ちていたのを拾ったんです」

リオン

「拾ったのか……(汗)」

早苗

「はい……(汗)」

デймロス

『我はエリアの端に落ちていたのか！？』ショックを受けた声を上げる

シャルティエ

『すごい偶然ですね……デймロスと会う前に行った依頼では

この世界に3振りしかない短刀を拾ってましたし(汗)』

ハロルド

『もしかしたら早苗ってばそういう能力を持っているんじゃないかしら？』

スクリーンチャット集2 (後書き)

どうも飛鳥です。

今回はスクリーンチャット5本立てとなっております。

次回はいつになるかはわかりませんがよろしく願います。  
では(・・・)ノシ

あの戦争が終わってからどれだけ時間が経ったのだろう……

あの戦争が終わった後プラントに戻った俺に待っていたのは過酷な人体実験だった……

何だか妙な薬を身体に打たれ、普通の人間ならば確実に死ぬ実験が続けられた……

死ぬよりも辛い痛みを毎日経験してきた……

こいつらを殺したい……

いつしか俺は憎しみの渦に捕らわれかけていた……

それでも俺は何とか心を保ち続けてきた……

いつか俺が自由の身になってみんなと笑いあえるようになる日を待ち望みながら……

研究員

「被検体01！」

シン

「はい……」

研究員

「今回貴様にはわが軍で開発された新兵器のテストを行ってもらおう」

シン

「何故俺に……？」

研究員

「貴様が質問をする権利はない」

シン

「……………」

研究員

「ただし結果次第では貴様が自由の身になる権利を与える」

シン

「……………！」

研究員

「せいぜい有用なデータを出すことだな」

この時俺はようやく自由の身になれると心が躍った……………  
このテストで自分の大切な人を殺してしまうとは思わずに……………

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〈世界を駆け巡る者達〉番外編 デバイス事件の真相

C・E78 8月31日 デバイス事件発生から1日前

プラント アプリリウス1 新型兵器第3研究所

ここはプラントのアプリリウス1に存在する新型兵器の3つ目の研究所。

表向きではZ・A・F・Tで使用される新兵器の開発を行っている。しかし、その裏ではクライン派に反対する者や『平和の敵』とされた者を使って非道な人体実験を繰り返し、多数の死者を出している研究所である。

シン・アスカもまた世界を混沌とさせようとしたギルバート・デュランダルの懐刀として戦った者であり、キラ・ヤマトを倒した唯一の人物故に『平和の敵』とされこの研究所に收容されていた。

そしてシンはこの研究所に收容された直後に特殊精製されたナノマシンによって構成された薬を飲まされ、ある種の不老不死となっていた。

皮肉にもこの薬のおかげでシンはどのような実験をされても生き残ることができた。

そして、この研究所にてデュランダルの議長が残した兵器『デバイス』がある研究員によって解析が完了された。



女性研究員

「あははははは！！ついに解析することができた！！」

彼女はラクス・クラインの狂信的な信者であり、自身が神と崇めているラクス・クラインからデュランダル議長が残した遺産：『デバイス』の解析を命じられていた。

MAともMSとも違うこの『デバイス』は今まで数多の科学者が解析してきたが誰一人として解析することができなかった。

女性研究員

「これでラクス様もお喜びになるわ！！」

だから彼女は狂喜していた。

誰にも解析できなかったデュランダル議長の遺産を1人で解析することができたこと。

そして自分の神であるラクス・クラインの勅命を果たすことができたのだから。

女性研究員

「この『デバイス』が量産の暁にはナチュラル共の軍なぞあつという間に殲滅することができると！！」

デュランダル議長が残した『デバイス』とはMSに使われている兵装や機能を破壊力そのままにしてかつ人が装備できるまでにサイズダウンしたものを情報として保存し、使用する時に展開させるという一種のパワードスーツのようなものであった。

そしてこれを量産することができれば最強の軍隊を作れるほどのものである。

女性研究員

「あとは戦闘データが欲しいわね…」

しかしこの『デバイス』には1つの欠点があった。それは特定の人物にのみにしかこの『デバイス』を使用することができないのである。

そこで彼女は今いる研究所で実験体となっているシンとルナマリアに『デバイス』を使用させることにした。

それが自分の命を奪われることになることなど知らずに…。

C・E78 9月1日

プラント アプリリウス1 新型兵器第3研究所 テスト場

シン

「このテストでいい結果を出せば俺を釈放してくれるんですね？」

研究員

「そのとおりだ。精々結果を残すことだな」

シン

「忘れないで下さいよ？…シン・アスカ！行きます！！」

シンは自分の実験を担当をしている研究員から約束を確認していた。このテストで結果を残せば自由の身になれる。

シンは自由の身になるためにテスト場まで駆けて行った。

シン

「デステイニー！セットアップ！！」

シンはあらかじめこの『デバイス』…『デステイニー』のことをある程度説明されていた。

まず起動時デバイスの名を言って起動すること。

兵装は自分の愛機であったデステイニーとかわらないこと。

の2点である。

シン

「(この機体：何故かは知らないけど馴染む!)」

合成音声

『これより現ザフトで使用されている対人兵器を射出します』

シン

「敵は…あれか!」

合成音声の後射出されてきた者は現在ザフトが使用している対人兵器『スパイダー』である。

この兵器は目標を特殊なジェルで動けなくしたところで仕留めると  
いう反ラクス派にとって忌むべき兵器である。

しかし…

シン

「見えた!そこだ!!」

スパイダー

『!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?』

シン

「敵は…あと49か!」

一瞬でDESTINYニーデスティニーの扱いをマスターしたシン相手には荷があまりにも重すぎた。

片や地上を這ってでしか動けないスパイダー

片や自由自在に空中を飛びまわれるシン

いくら対人に特化したスパイダーでも空中からの攻撃は想定されておらずまた1機また1機と破壊されていった。

女性研究員

「素晴らしいわ！今まで誰にも逃れることができなかったスパイダーをこつとも容易く次々と破壊するなんて！！」

女性研究員は自分の想定を遙かに上回るこの状況に狂喜していた。シンはそんな彼女のことは知らずに最後の仕上げにかかっていた。まずはビームライフルでスパイダーの足を止め、足が止まったところにパルマ・フィオキーナからの射撃でスパイダーの脚部を破壊し、トドメにアロндаイトを突き刺した。

シン

「これで！ラスト！！」

合成音声

『テスト終了』

シン

「よし！やった！！」

シンはこの時ようやく自由の身になることができると思った。しかし、この世界の神はシンに対して無情であった。

女性研究員

『いい動きだたわね。シン・アスカ』

シン

「あんたは？」

女性研究員

『私はそのデバイスを解析した者よ』

シン

「それで？もうテストは終わりなんだろう？」

女性研究員

『いいえ。最後にもう1つテストをしてもらおうわ』

シン

「なんだって？」

女性研究員

『今から射出する兵器を撃破できたら貴方の勝ち』

シン

「そいつに勝てばいいんだな？」

女性研究員

『ええ。貴方が勝てればね…』

合成音声

『被検体02射出』

??????

「アアアアアツ！！」

シン

「そんな…。嘘だろ…？」

シンは目の前のモノを見て愕然とした。

女性研究員

「さあ、貴方に討つことができるかしら…？」

シン

「なんでなんだよ！？ルナ！！」

ルナマリア

「アアアアアアツ！！」

女性研究員

「貴方の守りたい存在であるルナマリア・ホークをね！」

そこには変わり果てた姿のルナマリア・ホークがいたのだから…。

どうも飛鳥です。

今まで投稿がなくて申し訳ございません！（土下座

今回はシンがまだC・Eにいた頃のお話です。

今回はとにかく鬱な内容になってしまいました。

次はルナマリアとの激闘とキラがシンを保護するまでです。

ではではm（\_\_\_\_\_）m

この世界はいつもそうだ……。何の罪を持たない人々からすべてを奪い、力を持つごく一部の者だけが笑う世界……。

その中でもラクス・クラインはかつて俺が討ったブルーコスモスのトップであるロード・ジブリールよりも酷かった……。

特にロゴスやデュランダル議長と関係ない国をいきなり『平和の敵』と称して自分の私兵である歌姫の騎士団をけしかけ、その国の人々を皆殺しにする……。

しかも自分の手を汚さずに……。

だから俺は…俺達は終戦した後すぐにプラントを離れようとした……。

だけど奴らはデュランダル議長の懐刀であった俺達を放っておくとはなく……。

俺を含むミネルバ隊全員は全員逮捕された……。そして……。

ルナマリア

「ガアアアアッ!!」

シン

「何で…何でこんなことになるんだよ!!」

俺は守りたかった人……ルナマリア・ホークだったモノと命の奪い合いをしていた……。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〈世界を駆け巡る者達〉番外編 デバイス事件の真相2

C・E78 9月1日

プラント アプリリウス1 新型兵器第3研究所 テスト場

金属同士が激突しあう戦場……………

旧西暦の前時代的な戦いがここで行われていた。

シン

「ッ！クソッ！」

ルナマリア

「ウガアッ！！」

シン

「ルナ！！聞こえないのか！？俺だ！！シンだ！！」

ルナマリア

「ウアアアッ！！」

シンは先程のスパイダーとの戦いと比べると明らかに苦戦していた。シンの持つ『デバイス・デステイニー』とルナマリアの持つ『デバイス・インパルス』の性能は確かにシンの持つ『デステイニー』の方が圧倒的に性能が高い。

しかし、を投与された以外強化されておらず、ルナマリアを討つ事に躊躇しているシンと肉体のありとあらゆる能力を改造され、ただ目の前の物体を排除する事のみ暗示されているルナマリアという違いが現在の状況を生み出していた。

ルナマリア

「ウガアアアッ！！」

シン

「しまった！！うわあッ！！」

ルナマリアは『インパルス』にスラッシュエッジを投影させてシン



に投擲し、シンはいきなり違う攻撃をされたために対応できず直撃してしまい片膝をついてしまった。  
ルナマリアはその隙を逃すはずもなく動けないシンにトドメを刺す為に一気に間合いを詰め、投影したエクスカリバーでシンを切り裂こうとした。

シン

「（ここで…終わりか…結局俺は何もできなかったな…）」

ルナマリア

「アアアアアッ！！」

シン

「（死ぬ…？俺が…？イヤだ！死にたくない！！このまま何もできずに死にたくない！！）」

シンは確実に迫る死に諦めの情を抱いていた。

しかし、同時にシンは身体の底から湧きあがる強い生存本能がシンを包み込んだ。

そして…

シン

「俺は死にたくない！！」

シンの持つ種子…『SEED』が覚醒した。

シンはあまりにも遅く見えるルナマリアの斬撃を軽く受け流した後隙ができたルナマリアをその手に持つアロンダイトでルナマリアの心臓を突き刺した。

ルナマリア

「ああ…シン…やっと…会えた…ね…」

シン

「あ、ああ…ああ…」

ルナマリア

「私を…解放…して…くれて…ありがとう…」

シン

「そんな…俺は…俺は…!!」

死の直前となってようやく暗示が解けたルナマリアはシンに礼をい  
い…息を引き取った。

女性研究員

『素晴らしい!!MSと同等の火力にMS以上の機動性!!このデ  
ータさえあればこの兵器を量産することは容易いわ!!』

悲しみにくれるシンに追い打ちをかけるかのように女性研究員の『  
デバイス』に対する賛辞にシンの理性は限界を迎えた。

シン

「お前が…お前達なんかがいるから…」

女性研究員

『ひよっ?』

シン

「お前達なんかがいるから!!世界はあ!!!!」

女性研究員

『ひっ…!!す、すぐに被検体01を拘束しなさい!!』

シン

「うわあああああああ!!!!!!」

その後…新型兵器第3研究所は暴走したシン・アスカの手によって  
壊滅したのだった…。

番外編 episode シン・アスカの過去 中編『デバイス事件2』(後書

どうも飛鳥です。

今回もシンの過去編となっております。

別に作者はルナマリアは嫌いではないのですがこの物語のキーとなるため

この時に死んでしまいました。

次で番外編は終了となります。

ではではm(\_\_\_\_\_)m

【デバイス事件】から2年後。

あの事件の後、キラさんに保護された俺は少しずつだが壊れてしまつた心が治つていった。

俺がこうも立ち直れたのは一重にキラさんの尽力とキラさんの娘さんであるサクヤちゃんとの触れ合いもあったからだろう……。確かに家族を…ステラを殺したキラさんは許すことはできない。

けれど、再び独りになつてしまった俺を救ってくれたキラさんとサクヤちゃんに恩返しをしたい。

だから俺は今できる事をしようとしていた。

この先に起こる悲劇など知らずに……。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

～世界を駆け巡る者達～番外編 ～キラ・ヤマトとの再会と永遠の別れ～

C・E80 6月30日

プラント アプリリウス1 キラの自宅 中庭

キラ

「シン、君に渡したいものがあるんだけどいいかな？」

シン

「え？別にかまいませんけど…」

サクヤ@5歳

「じゃあサクヤはさきにやすんでますね！…」

シン

「おう。お疲れ様。ナイフの訓練はまた明日な」

キラ

「じゃありビングに来てね」

シン

「分かりました」

シンはヤマト家の家事（サクヤにもある程度伝授）とサクヤとの訓練（ナイフの使い方）を日課にしており、丁度訓練を終えたところにキラが話しかけてきた。

シンは丁度サクヤとの訓練がおわった後なのでタオルで汗を拭いた後、リビングに向かった。

プラント アプリリウス1 キラの自宅 リビング

キラ

「あ、来たようだね」

シン

「それで渡したいものってなにですか？」

シンはキラが自分に何を渡したいのかわからなかった。

キラはそんなシンの質問に答える為に取りだしたものは何かのペンダントのような物だった。

シン

「？何ですかこれ？」

キラ

「君の【デバイス】にあったデータを元に作ったモノだよ。…確か『携帯型次元転送装置』っていう名前らしいよ」

シン

「らしいって…」

シンはよくわかっていないのに作ったキラに呆れながら『携帯型次

元転送装置』を見た。

見た所は普通のペンダントである。

キラ

「効果は身を持って実証したから」

シン

「おい！それで帰れなくなったらどうするつもりだったんだよアンタは！！」

キラ

「いや〜。僕もいざ帰還した時にそのことを思い出して思わず震えちゃったよ！H A H A H A！！」

シン

「アンタって人はー！！」

サクヤ

「サクヤですけどおとーさまとシンおにーさまがなにやられたのしそ  
うにおはなしてます」

このような景色こそが現在のヤマト家の日常である。

翌日

キラ

「それじゃあ皆、準備はいいかい？」

シン

「本当にやるんですか？」

意気揚々としているキラにシンは溜息交じりに質問するとキラはサクヤの方を見た。

サクヤ

「おとーさまがいったせかいがどんなところなのかたのしみです！」

サクヤは今まで自分が行ったことのない世界に胸を躍らせていた。キラはそんなサクヤの様子をシンに見せ、改めて尋ねた。

キラ@親馬鹿

「君はここまで楽しみにしているサクヤから楽しみを奪うのかい？」  
シン@親馬鹿

「わかりました。行きましょう！」

この2人はかなりの親馬鹿であった。

キラ

「じゃあ行こうか？」

サクヤ

「はいっ！！」

3日後

キラ

「あー楽しかった！」

サクヤ

「はいっ！！とつてもたのしかったです！」

シン

「俺達普通に前人未到のことをしてたんだよな……」

しかし、このような幸福な日々は長く続かなかった……。  
そう、彼ら……時空管理局がラクス・クラインの下にやってきた……。

同日 クライン亭 執務室

ラクス・クライン

「それで、貴女方の望みとは何でしょうか？」

高町 なのは

「はい。ここにいると思われるロストギア不法所持者…シン・アスカの逮捕です」

ラクス

「？彼はこの世にはいない筈ですが？」

フェイト・F・ハオラウン

「いえ…、それがこの街のどこかに彼が潜伏しているのです」

ラクス

「！わかりました。貴女方の捜査に協力いたしましょう」

なのは

「ご協力、感謝します」

ラクスはこの話を聞いて1つ思いついた事があった。それは最強の戦力になりうる兵器を連れて自分の下から去っていった彼…キラ・ヤマトをこの世から抹殺することであった。そして…悲劇の日が訪れた。

C・E80 10月15日

何も知らないシン達は普段と変わらない生活を送っていた。

シン

「今日の訓練はここまでだな」

サクヤ

「ありがとございまして！…」



いつもどおりの訓練を終えたシンとサクヤだったが玄関付近で銃声が鳴った。

サクヤ

「な、なに!？」

シン

「これは…銃声!？」

キラ

「シン!! いるかい!？」

いきなりの銃声で混乱していたところにキラがやってきた。

シン

「キラさん!! 何なんですか!？この銃声は!!」

キラ

「どうやら僕が君を匿っていたことがラクスにはれたみたいなんだ」

シン

「なっ!？」

キラ

「時間が無い! はやく奥のシェルターまで避難するよ!」

シン

「わかりました!」

シンは自分がキラに匿われていることに驚いたがここで立ちつくしている暇はないと直感してサクヤを連れてシェルターの中まで避難した。

キラ

「どうやらサクヤは疲れて寝てしまったようだね…」

シン

「なんで俺1人の為にここまでするなんて…」

キラはサクヤが眠っている事を確認するとシンはぼつりと呟き、キラはそんなシンに対してラクスの狙いを話した。

キラ

「恐らくラクスは君の体に埋め込まれているナノマシンが目当てみたいだね…」

シン

「……………やっぱり『平和の世界の為』ですか？」

キラ

「多分ね…後サクヤも狙われている」

シン

「え…？」

キラ

「サクヤはね…君のいた研究所で作られた僕のクローンなんだ」

シン

「なっ！？サクヤがクローン！？」

キラ

「シッ。サクヤが起きてしまう」

キラはサクヤが目を覚ましてしまう事をシンに注意した後、サクヤの生い立ちを語り始めた。

キラ

「サクヤはね僕の持っている能力の限界まで引き上げて『時間を止める能力』を強くされた子なんだよ」

シン

「『時間を止める能力』？キラさんも持っているんですか？」

キラ

「うん。この能力のおかげでマルチロックオンによる無力化ができたんだ」

シン

「でも俺はなんとも無かったですよ？」

キラ

「どうやら君にはこの能力が利かなかつたみたいだね…。それで、サクヤはその能力を無理矢理引き上げられたんだ」

シン

「…俺やルナの時と同じ方法で…ですね？」

キラ

「うん…。そして、その事を知った僕はサクヤをあの研究所以ら連れ出してラクスの下を去ったんだ…」

シン

「そんなことが…」

シンは目の前の少女の信じられない過去を聞いて返す言葉を考えていた時にキラが口を開いた。

キラ

「どうやらおしゃべりしている時間はここまでのようだね…」

シン

「…そのようですね」

シエルター越しから聞こえる爆音がシン達に残された時間がもう僅かしかない事を告げていた。

サクヤ

「おとーさま？」

キラ

「サクヤ…。ごめんね…どうやらここでお別れみたいだ…」

サクヤ

「おとーさま?」

キラ

「サクヤ、僕は君の父として大したことは出来なかった…でも僕は君を愛して…うぐ!？」

キラはサクヤに自分の思いを伝えきる前に青色の光の球がキラに直撃した。

シン

「キラさん!」

サクヤ

「いやああ!おとーさま!」

シンはキラに近付こうとしたが煙から出てきた人物がそれを許さなかった。

なのは

「シン・アスカ、貴方をロストギア不法所持者として逮捕します!

!」

フェイト

「そして、キラ・ヤマトさんにサクヤ・ヤマトさん。貴方をシン・アスカを匿った者として逮捕します!」

シンは彼女達…時空管理局の言っている事がさっぱりわからなかった。

シンはやってきた2人…なのはとフェイトに尋ねた。

シン

「ロストギア不法所持?」

なのは

「そう、貴方の持っているデバイスは危険な物です！！だから貴方を逮捕します！！」

シン

「そうか…そういうことか…」

フェイト

「わかってくれましたか？なら…」

シン

「なら…俺の答えはこれだ！！サクヤ！目と耳を塞いでろ！！」

サクヤ

「は、はい！」

なのは

「なにを…」

なのはとフェイトはシンが何を言っているのか理解できなかったが、シンが手榴弾らしき物を地面に叩きつけたと思ったたらおびたらしい光と音がなのはとフェイトを襲った。

シン

「今だ！脱出するぞ！！」

サクヤ

「は、はい！」

なのはとフェイトが怯んだのを確認するやいなやシンはキラを担いでシェルターから脱出し、キラの家にあるエレカに乗って港へ向かいキラの私用のシャトルに乗った。

シャトル

シン

「これで一安心か…」

キラ

「う、ううん…」

サクヤ

「おとーさま!…」

キラ

「サクヤ?それにこれは僕のシャトル?」

シン

「はい。ここならもう安心ですよ…」

キラ

「!いけない!…」

脱出して警戒を解いていたシンとサクヤだったがキラはシンに向けて  
られている銃口に気が付きシンを突き飛ばすと次の瞬間キラの胸に  
紅い華が咲いた。

サクヤ

「!…」

シン

「キラさん!?この!…」

シンはキラを撃つた追撃者の心臓をナイフで刺して殺した。

キラ

「はは…。どうやら本当にここまで…みたいだね…」

サクヤ

「おとーさま!…」

キラ

「サクヤ…今から君をここから遠く離れた世界に飛ばすよ…」  
サクヤ

「いやです！ー！サクヤはおとーさまといっしょにいたいです！ー！」  
キラ

「ごめんね…でもこのままだと確実に君もシンも殺されてしまう…だから…」

サクヤはキラから離れようとしなかったがキラはサクヤを優しく抱きしめた後離し、サクヤの首に掛けられているペンダント型の『携帯型次元転移装置』を起動させた。  
泣き崩れるサクヤを見たキラはシンに話しかけた。

キラ

「シン…」

シン

「キラさん…俺は…」

キラ

「いつかはこうなる…運命だったんだよ…。覚悟はしてた…でも思ってたより…早かったなあ…」

シン

「俺があの時警戒を解いて無かったら！ー！」

キラ

「シン…。いいんだよ…でも…頼みが…あるん…だ…」

シン

「キラさん？」

キラは息が絶え絶えになりながらも懐中時計をポケットから取り出した。

キラ

「サクヤが…立派に…成長したら…これを渡して…ほしいんだ…」  
シン

「…わかりました」

キラ

「頼んだよ…僕は…最後の後…始末を…しなくちゃ…いけない…」  
シン

「…さようなら…キラさん…」

シンはキラから懐中時計を受け取った後、『携帯型次元転移装置』を起動させてサクヤの傍によった。  
そして、シンとサクヤはC・Eから旅だった…。

キラ

「さて…と…」

キラはシンとサクヤが旅だったのを確認するとシャトルの自爆シークエンスを起動させた。

キラ

「まさか…君と同じように…死ぬなんてね…」

キラは自嘲気に笑いながら自分が愛した人物の名を呟いた。

キラ

「フレイ…いま…そっちに行くよ…」

キラはそう呟いた後息を引き取り、キラを乗せたシャトルは爆散した。

次元空間

サクヤ



「おとーさま…」

シン

「サクヤ…」

サクヤ

「シンおにーさまもいなくならないで…」

シン

「ああ。約束す…」

敵の追手からなんとか逃げ切ったシンとサクヤだったがサクヤはキラの死を受け入れられていなかった。

だからこそサクヤはシンにいなくならないでほしいと願った。シンもその願いに応えようとした。しかし、更なる悲劇が彼らを襲った。

シン

「！サクヤ！俺から手を掴め！！」

サクヤ

「え…？」

直前に次元空間の異常を察知したシンはサクヤの手を掴もうとするがサクヤは反応に遅れ、サクヤは吹き飛ばされてしまった。

サクヤ

「！シンおにーさま…！！」

シン

「サクヤあ…！！」

サクヤ

「おにーさまあああ…！！」

シンは吹き飛ばされたサクヤに手を伸ばそうとしたが届く筈もなくサクヤは次元の彼方へ吹き飛ばされてしまった。

シン

「くそ！ー！うわあああああ……」

そして、シンもまたサクヤとは逆の方向の次元の彼方へ吹き飛ばされてしまった。

サクヤ side

???? ????

サクヤ

「う、ううん……」

サクヤは目を覚ますと目の前に広がった景色は前にキラとシンと一緒に遊びに来た世界だった。

サクヤ

「おとーさま……シンおにーさま……」

??????

「わはー」

自分の周りに誰もいない寂しさ故にキラとシンの名前を呟きながら夜の森を進んでいくと1人の金髪の少女が現れた。

サクヤ

「だれ……?」

サクヤは金髪の少女に話しかけると金髪の少女はこう返してきた。

金髪の少女

「あなたは食べてもいい人類？」

サクヤ

「え？」

金髪の少女

「いいのか？じゃあ、いただきますーす」

サクヤ

「ひいっ！」

サクヤは逃れられない死に恐怖し、腰を抜かしてしまった。

サクヤ

「（おとーさま！シンおにーさま！！）」

金髪の少女

「わはー…ヒデフツ！！」

サクヤ

「え…？」

サクヤはいつになってもやってこない痛みに疑問に思って恐る恐る目を開けると金髪の少女はおらず、かわりに蝙蝠のような翼を持った少女がサクヤの前に立っていた。

蝙蝠のような翼を持った少女

「お前…名はなんという？」

サクヤ

「サクヤ…サクヤ・ヤマト」

蝙蝠のような翼を持った少女

「サクヤか…私の名はレミリア・スカーレットだ。そうだな…お前は我が紅魔館のメイド見習いになってもらおう」

サクヤ

「え…?」

サクヤは少女…レミリアが言ったことが理解できていなかった。そんな様子を見かねたレミリアは口を開いた。

レミリア

「このような場所にお前の行き場所などあるまい?名は…: そうだな…: 今宵は素晴らしい満月だからお前はこれから十六夜咲夜と名乗れ」  
サクヤ

「いざよい…: さくや…?」

レミリア

「そうだ。サクヤ・ヤマトという名はお前の言っていた父か兄と再会するまで私が預かる」

サクヤにとってそれはあまりにも都合の良い内容だった。

そして、5歳のサクヤが人を疑う事をしなかったサクヤはその提案を呑んだ。

こうしてここ…: 幻想郷の紅魔館前にて新しいメイドの卵が誕生した瞬間だった…:。

シンスide

とある管理外世界

シン

「クソ!俺がもっと注意していれば!」

シンは己の無力さと警戒の無さを呪った。

シン

「俺がもつとしっかりしていればあの2人は幸せな時をもつと過ごせたというのに！ー！うわあああああ！ー！！！！！」

シンはキラとサクヤの幸せ自分が奪ってしまったと思い、魂の慟哭を上げた。しかし、そんな彼に神は休まる時間を与えなかった。

男性

「た、助けてくれー！！！」

女性

「ひいいい！！！」

シンは目の前で起きている光景を見て信じられないと思った。

子供

「うわああああん！！おとーさん！おかーさん！！！」

魔族

「新鮮な人間の肉…いただきませす！！！」

人が人とは違うナニかによって襲われているのである。

シン

「そうか…俺に出来る事はまだあつたな…！」

シンは自分の胸ポケットに入っていたデバイス…デスティニーを取りだした。

シン

「デスティニー！！セットアップ！！！」

シンはあの時から封印していたデスティニーを起動させ、今にも子

供を喰らおうとしていた魔族を吹き飛ばした。

魔族

「ああん？なんだてめえは？」

突然現れたシンに対して魔族はシンを新たな餌だと思って喰らいかかるうとした。

シン

「はあー!!」

魔族

「ギアアアアアアアア!!」

しかし、その時には魔族の首は胴と離れ、魔族は絶命した。

シン

「まだサクヤの『携帯型次元転移装置』の反応は残ってる…なら…」

シンはサクヤの事を諦めていなかった。だからこそシンはある決意をした。

シン

「薙ぎ払ってやる!!サクヤを…力の無い人から奪う物を!!すべて!!」

この日、シンは再びその手に剣を取り戦う決意をした。

この瞬間、次元管理局のなかでももっともランクの高いSSS級次元犯罪者『紅き翼を持つ男 シン・アスカ』が誕生した瞬間であった……。

どうも飛鳥です。

今回で番外編 episode シンの過去編は終了となります。

ここでシンが不老不死になった原因と新キャラサクヤが登場しました。

サクヤは内容を読めば分かるように、本作に登場予定の東方キャラの十六夜咲夜の前身となるキャラクターです（もっとも彼女は亜空間事件編以降の登場となりますが…（オイ））。

何故サクヤをキラの娘にした理由は次回の補足編で補足します。

では（・・・）ノシ

## 番外編@設定集(前書き)

ここでは番外編に登場した新キャラ等の詳細が書かれています。  
最後の2項目は本編に直結する重大なネタバレがあるため苦手な人  
はこの項目を閲覧しないことを推奨します。



## 番外編@設定集

### 【新キャラ紹介】

サクヤ・ヤマト（5歳）

第2次ヤキン・ドゥーエ、メサイア戦役を止めた英雄キラ・ヤマトの娘。

その正体は非常に高い能力と時間停止能力を持ちクライン派に対する不信感を持っていたキラの力を求めたラクス・クラインが新型兵器第3研究所に命じて作らせた生体兵器。

スーパーコーディネーターの持つ非常に高い身体能力とキラの持つ時間停止能力を極限までに引き上げるように遺伝子を操作され続けた結果、性別が女性になり、髪も銀髪になってしまった。

そうやって産み出されたサクヤだが最強の生体兵器を欲したラクスの意向によって生まれた後も肉体改造が行われ、最後にラクスに対する絶対的な忠誠心を植え付ける為にサクヤの脳に手を加えようとした時に事の顛末を知ったキラによって保護された（その後今までのデータを基にサクヤのカーボンヒューマンを生産する計画が建てられたがルナマリアの死によって暴走したシンによって研究所が壊滅し、計画は頓挫した）。

キラを父として懐き、数日後にサクヤと同じくキラに保護されたシンを兄として懐いた（これが2人を親馬鹿にする原因になった）。この時のサクヤとの触れ合いがシンが人の心を取り戻すきっかけになった。

キラに保護された後幸せな日々を送っていたがシンの持つデバイス『デステイニー』を奪おうとした時空管理局の襲撃によって父であるキラを亡くし、時空管理局から逃れるために次元空間に入った直後に起こった次元震によってシンとも離れ離れになってしまった。

1人になったサクヤはかつてキラとシンと一緒に訪れた森を彷徨っ

ているところに肉食妖怪に襲われ、偶然居合わせたレミリアに助けられる。

その後、彼女の計らいで紅魔館のメイド（見習い）となりその時にレミリアから十六夜 咲夜という新たな名を与えられ、十六夜 咲夜としての人生を歩み始めることになる。

好きな人：キラ、シン、レミリア

嫌いなもの：父であるキラを殺した時空管理局

好物：タマゴサンド（シンがサクヤに初めて作ってあげた料理でサクヤが初めて覚えた料理）

キラの娘として起用した理由：時止め繋がり（原作にてキラのハイマツトフルバーストを討たれた敵が

どう見ても棒立ちの状態で直撃したため筆者はキラに時間停止能力があると思つた為）

レミリア・スカーレット（489歳）

幻想郷にある紅魔館の主。

肉食妖怪に襲われていたサクヤを助け、彼女を紅魔館のメイド（見習い）にし、サクヤに十六夜 咲夜（紅魔館のメイドとしての名前）という新たな名を与えた吸血鬼。

彼女にとってレミリアの出会いが新たな人生を歩むきっかけになった。

## 【デバイス】

デバイス・デステイニー

ブランド最高評議会前議長ギルバート・デュランダルが学者時代の時に接触したスカエリッティから提供された技術を基に作りだしたデバイス『デュランダルシリーズ（以下Dシリーズ）』の3番機。

このデバイスの武装や能力はこのデバイスのモデルとなったMSデ

ステイナーの兵装と能力をそのままダウンサイズしたものになっている。

戦闘能力はDシリーズ3機の中でも最も戦闘能力が高い。

プラントのアプリリウス1にある新型兵器第3研究所のテスト場での惨劇の後キラが回収し、人としての心を取り戻したシンにインパルスと共に渡された。

デバイスマスターはシン・アスカ。

デバイス・インパルス

プラント最高評議会前議長ギルバート・デュランダルが学者時代の時に接触したスカエリツティから提供された技術を基に作りだしたデバイス『Dシリーズ』の1番機。

このデバイスの武装や能力はこのデバイスのモデルとなったMSインパルスの兵装と能力をダウンサイズしたものになっている（分離・合体の機能は無い）。

プラントのアプリリウス1にある新型兵器第3研究所のテスト場での惨劇の後キラが回収し、人としての心を取り戻したシンにステイナーと共に渡された。

戦闘能力はDシリーズ3機の中でも最も戦闘能力が低かったがシンが次元世界を旅を始め、その道中でシンのパートナーになった数多の者によって少しずつ改良と武装の追加をされていくうちにステイナー、レジエントと同レベルになるまで改造された。

初代デバイスマスターはルナマリア・ホーク

現デバイスマスターはスバル・ナカジマ。

デバイス・レジエント

プラント最高評議会前議長ギルバート・デュランダルが学者時代の時に接触したスカエリツティから提供された技術を基に作りだしたデバイス『Dシリーズ』の2番機。

メサイア戦役の際、瀕死のデュランダル前議長によってレイに託さ

れた。

このデバイスの武装や能力はこのデバイスのモデルとなったMSレジェンドの兵装と能力をそのままにダウンサイズしたものになっている。

戦闘能力は火力ではデステイニーに一步及ばないものの、レジェンドの最大であるドラグーンによるオールレンジ攻撃のおかげでデステイニーと同等に戦える。

デバイスマスターはレイ・ザ・バレル。

### 【兵器・施設】

スパイダー（型式番号 ZGMF-H01 SPIDER）

ラクス・クラインが自分に反抗する者を捕える為に新型兵器第3研究所に命じて製作させた対人兵器。

ラクス・クラインに反抗する者が用意できる武装ではこのスパイダーを破壊できるものは無く、運よく1機破壊しても他のスパイダーによって捕えられてしまう。

武装は対象を捕獲するスパイダーネットと神経系の毒が塗られた針で相手を攻撃し、相手を動けなくするスパイダーニードルの2つである。

このスパイダーによってラクス・クラインに反抗する者が捕えられた。

モデルはスーパーロボット大戦OGに登場するイルメヤ（コードネームがスパイダー）

### 新型兵器第3研究所

アプリリウス1にある新兵器の研究所。

表向きはMSの新兵器の研究所だがその実態は対人を想定した兵器や生体兵器の研究が行われている研究所である。

ここで対人兵器のスパイダーはここで開発され、キラの娘であるサ

クヤもここで産み出された。  
ルナマリアの死によって暴走したシンによって壊滅した。

【携帯型次元転移装置】

デュランダル前議長が作ったタイプとキラがデステイニーのデータバンクにあったデータを基に作ったものの2つのタイプがある。前者は特定した個人を転移させるタイプに対し、後者はこの装置から半径4m以内にいる者全てを転移させるタイプである。

本編でスバルがシンに助けてもらったお礼を言うために駆け寄った際に丁度転送圏内に入ったため、スバルは転移に巻き込まれた。

【キラが発見し、シンとサクヤが初めての次元転移訪れた世界】

その正体は早苗と守矢の2柱が信仰の為に目指した幻想郷。  
数多の種族が共存する極めて珍しい世界であり、時空管理局も発見していない世界。

元々は日本に繋がっていたが現在は1つの次元世界となっている。  
代表者は八雲 紫。

【シンが不老不死になった原因】

シンが不老不死となった原因とはシンが新型兵器第3研究所に捕えられた当初、彼のことを嫌ったラクス・クラインの意向によって当時新開発された最新鋭のナノマシンを投与されたため。

このナノマシンは肉体に侵入した後瞬時に細胞に溶け込み、強力な再生能力、極めて高い身体能力を服用者に与える。

一度服用してしまうと二度と普通の肉体に戻せず、殺そうにも細胞一つでも残っていた場合瞬時に再生してしまうため、結果的に不老不死となってしまう。

このナノマシンの製作データは製作者によって闇に葬られたはずがシンとサクヤがC・Eから旅立つときに使用した携帯型次元転移装置による次元転移の時に生じた衝撃波で月人（東方）の都に流れ着き、このデータを基に蓬莱の薬が作られた（本作のみの設定）。

【ラクス・クラインがシンとサクヤを狙った理由】

シンを狙った理由はシンが不老不死になった原因であるナノマシンを採取するため。

サクヤを狙った理由は最強の剣を欲したラクスが彼女を基に大量のカーボンヒューマンを作り出そうとしたため。どちらもデータは存在していたがナノマシンのデータは製作者によって封印され、製作した本人も自殺したため入手できず、サクヤのデータはシンの暴走によって壊滅した新型兵器第3研究所にあったためデータが物理的に消滅したため、シンとサクヤを狙った。

## 番外編@設定集（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は番外編に登場したサクヤと少しだけ登場したレミアアの紹介、シンとスバルとレイが使うデバイスの設定、番外編に登場した兵器と施設の紹介、『携帯型次元転移装置』の設定、ちよっとした補足とシンが不老不死になった原因とラクスがシンとサクヤを狙った理由という内容です。

とても無茶な設定ですが生温かく見守っていただけると幸いです。次回からは本編と十六夜 咲夜となったサクヤがシンと再会するまでの出来事を描いた外伝「サクヤのメイド奮闘日記」書いていく予定です。

この外伝は本編の区切り区切りに挟む予定です。

では（・・・）ノシ



外伝 サクヤのメイド奮闘日記 1ページ目 ～十六夜 咲夜、紅魔館に立つ

おとーさまがへんなひとたちにくろされてシンおにーさまとはなればなれになってレミリアさまにたすけられたサクヤはこーまかんでメイドみならいとしてはたらくことになりました。

はじめていくばしよだからこわいけどいつかシンおにーさまとまたあえるひがくるまでがんばります。

だからいつかあえますよね？シンおにーさま。

サクヤの日記1ページ目より

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイド奮闘日記

1ページ目 ～十六夜 咲夜、紅魔館に立つ

幻想郷第3大陸 紅魔館 玄関前

ここは幻想郷にある紅魔館。

普段夜には人が寄り付かないこの紅魔館に1人の少女が居た。

咲夜

「うわー。おっきいー」

レミリア

「そうだろう？ここが私の屋敷、紅魔館だ」

少女の名は十六夜 咲夜。

この幻想郷とは違う異世界からやってきた少女はここ紅魔館の主であるレミリア・スカーレットに連れてこられた彼女は紅魔館の大きさに驚いていた。

レミリアはそんな彼女を微笑ましく見ていると緑色のチャイナドレ

スを着た女性がやってきた。

????

「お帰りなさいませ、お嬢さま。となりの女の子はどうしたのですか？」

レミリア

「む、美鈴か。この少女の名は十六夜 咲夜という。」

美鈴と呼ばれた門番は咲夜の目線に合わせるようにしゃがみながら咲夜に挨拶をした。

美鈴

「咲夜ちゃんですか……。私は紅美鈴<sup>ホン・メイリン</sup>。ここ紅魔館の門番をしているの」

咲夜

「いざよいさくやです。よろしくおねがいますー！」

美鈴

「うん。いい返事ね。よろしく、咲夜ちゃん」

レミリア

「挨拶は済んだようだな」

美鈴は咲夜の挨拶に満足げな笑みを浮かべたところでレミリアが本題に入った。

レミリア

「それで美鈴この咲夜だがこの紅魔館のメイド見習いをさせようと思っっているのだがかわらないな？」

レミリアから告げられた内容に対して美鈴は少しの沈黙の後、口を開いた。

美鈴

「メイド見習いですか……。しかしこの紅魔館にメイドは居ませんよ？」

そう。今まで門番以外の身の回りのことはこの主であるレミリアがしていたため、紅魔館にはメイドが居ないのである。そのため咲夜に教えられる者が居ないと美鈴は思ったのである。しかし、レミリアの回答は美鈴にとって斜め上の回答だった。

レミリア

「なに、私がメイドとしての技術を伝授すれば問題ないだろう？」

美鈴

「……………」

レミリアの回答を聞いた美鈴は自分の主はこういう人物だということ进行い出した。

そして一度決めたことは誰が何と言おうと変えない頑固者でもあるので自分が何を言っても無駄だと判断した。

美鈴

「わかりました。そういうことなら私が口を出す余地はありません」

レミリア

「わかっているではないか。では引き続き門番の任を任せたまぞ」

美鈴

「かしこまりました」

レミリア

「さて、それでは中に入るぞ？」

咲夜

「は、はい…」

美鈴に門番の任をまかせたレミリアは咲夜と共に紅魔館の中へ入った。

幻想郷第3大陸 紅魔館2階東エリア 空き部屋

レミリアに空いている部屋まで案内された咲夜はレミリアここで待つように言われ、ベッドの上に座った。

咲夜

「このベッドすっごくフカフカだ!!」

咲夜は今までになかったフカフカのベッドに感動していた。

キラの家のベッドもプラントではかなり高級な部類に入るベッドだったが、咲夜が今座っているこのベッドは今まで自分が寝ていたベットよりも遥かにフカフカだった。

咲夜がフカフカのベッドを堪能しているとレミリアが戻ってきた。

レミリア

「ベッドを堪能している所ですまないが風呂を沸かしてきた。今から身体を洗ってきなさい」

レミリアにそう言われた咲夜は自分の服の状態を思い出した。幻想郷に流れ着き人食い妖怪に襲われた咲夜は泥まみれになっていた。

咲夜は顔を赤くしながらレミリアに紅魔館の風呂場まで案内された。そして、風呂場に案内された咲夜は新たな感動を覚えた。

咲夜

「うわあ!すごくひろい!!」

それは風呂場の広さであった。  
プラントにはここまで大きな風呂場…大浴場は無い。  
更にただ広いだけではなくこの大浴場の壁と床と浴槽は大理石によ  
ってできており、シャワーヘッド等の備品もこの大浴場の景観に  
合ったものが使われている。

咲夜

「こんなにひろいお風呂ははじめてみました!!」

初めての大浴場に感動している咲夜にレミリアが声をかけた。

レミリア

「咲夜。この大浴場に感動してくれるのは私としてはとても嬉しい  
のだが早く身体を洗って風呂に入らないと風邪をひくぞ?」

咲夜

「あつ。ごめんなさい!!」

レミリア

「お前の着ていた服は私が洗濯しておく。着替えは脱衣所の籠に入  
れてからそれを着てくれ。後風呂から上がったらさっきの部屋まで  
戻ってくるように」

咲夜

「はい!わかりました!!」

咲夜の返事を聞いたレミリアは咲夜の着ていた服を持っていき、咲  
夜は髪と身体を洗い、湯船につかった。

3時間後

幻想郷第3大陸 紅魔館2階東エリア 咲夜の私室（レミリアと美  
鈴が用意した）

レミリア

「おそいな…」

美鈴@入浴時間は20分

「女の子のお風呂は長いものですけど流石におそいですね…」

レミリア@入浴時間は30分

「少し様子を見てくる」

美鈴

「私も行きます」

3時間たつても帰ってこない咲夜が心配になつた2人は大浴場に向かうと2人が思っていた予感が見事に的中した。

10分後

幻想郷第3大陸 紅魔館 2階東エリア 咲夜の私室

咲夜@のぼせた

「きゅー…」

美鈴@団扇で咲夜の身体を冷やしている

「予感が見事に的中しましたね…」

レミリア@氷の入った袋で咲夜の頭を冷やしている

「まったく。大浴場に感動してくれるのは非常に嬉しいがそれが原因でのぼせるとはな…」

2人の予感通り大浴場に感動して湯船(41)につかりながら周りを見回していた咲夜は完全にのぼせてしまい、レミリアが咲夜の仕事を教えるのが1日ずれてしまったのは言うまでもない…。

どうも、飛鳥です。

今回はこの作品の外伝にあたるサクヤのメイド奮闘日記の第1話と  
なりました。

この外伝は本編の節目あたりに投稿していく予定で、サクヤが一人  
前のメイドとなっていく過程を描いたものです。

本編が鬱展開になりやすいのに対し、こちらの外伝では基本ほのぼ  
のとした雰囲気の話が進んでいきます。

尚、こちらもある程度話が進む度にスクリーンチャット集を作る予  
定です。

次は外伝に登場したキャラクターの紹介となります。

では(・・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介1（前書き）

サクヤのメイド奮闘日記に登場するキャラの紹介です。

また最後の項目は本編及び外伝のネタバレとなっておりますのでそういったことを嫌う方はスルーすることを推奨します。



## 外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介1

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介

十六夜 咲夜（5歳@初登場時）

紅魔館のメイド見習いの少女。

紅魔館の付近を彷徨っていたところを人食い妖怪に襲われていた所を紅魔館の主であるレミリアに助けられ紅魔館のメイド見習いとなった。

自覚は無いが強力な時間停止能力を持っている。

家事スキルはそれなりにあるがたまにドジをする。また、コンピューターを使用した作業もできる。

強さは5歳の少女にしては異常なくらいの強さだがそれを遥かに上回る実力の持ち主がいる為紅魔館の中では最弱。が、体術基本は完璧でナイフにいたってはレミリアも認めるほどの実力の為今後の成長に期待。

尚、この名前とは別にもう1つの名前があり、今の名前は主であるレミリアからもらったものである。

レミリア・スカーレット（489歳@初登場時）

紅魔館の主である吸血鬼。

日課である散策をしている時に人食い妖怪に襲われていた咲夜を助け、紅魔館のメイド見習いとするために紅魔館へ連れ帰った。

『運命を操る程度の能力』を持っており、この能力の応用で対象が今までたどってきた運命を見ると事で過去の経歴を知る事ができるが、レミリアはこの能力を使う事はほとんどない。

吸血鬼の為かなり長い生を送っており、それを利用して色々な事に

手を出していたため、裁縫・料理・掃除・給仕・探掘・コンピュータ関連の作業・魔法・錬金術・古文書解読・遺跡発掘・鍛冶・MSの操縦及びMSを使った戦闘（強さ的にはシンと同レベル）・MSをはじめとする重機や車両の製作と設計及び整備・対人戦闘・モンスターや妖怪との戦闘集団での戦闘は完璧にこなせる万能吸血鬼。紅魔館の主の筈なのにメイドや執事がするような仕事をしている為、紅魔館にメイドと執事はいない（実質咲夜が紅魔館初のメイド）。

そのため咲夜を一人前のメイドにする教育為に自分の持っている技術を授けることにし、また人食い妖怪に襲われても生き残れるように自身の十八番である槍術を教えることになる。強さは吸血鬼だけあって非常に強い。また、ある事故によって吸血鬼の弱点がまったく通用しなくなっている為弱点が存在しない。人望も強く美鈴をはじめとする優秀な者が彼女の下におり、友好的な力を持つ妖怪も多い。

種族は吸血鬼であるが人間から吸血する必要はない。尚、スタイルは良い（本編に登場する早苗と同レベル）。

一見全てにおいて完璧であるレミリアだが性格は我が道を行くを体現した性格で美鈴はよく思いつきで行動するレミリアに振り回されている。

紅美鈴（年齢不詳）

紅魔館の門番の女性。

咲夜がレミリア以外で初めて会った紅魔館の人物で紅魔館で働くようになった彼女の姉貴分となる。

レミリアが紅魔館に住み始めた時から門番をしている。

武術の達人であり、紅魔館の住人の中でレミリアと真正面に戦って勝てる唯一の人物。

咲夜が紅魔館に来たあとは人食い妖怪の対策の為に咲夜に体術を教えることになる。

家事スキルは高いがレミリアの前だと霞んでしまう（比べる相手が

間違っている)。

スタイルは非常に良い(本編に登場するチエルシーレベル)。

正確は温厚で咲夜はすぐに懐いた。

思いつきで行動するレミリアに振り回される苦勞人。しかし、それでもしっかり付き合うあたりかなり義理堅い人物でもある。

## 十六夜 咲夜の正体

番外編の人物紹介にもあるように名前はサクヤ・ヤマトが本名で咲夜の産まれた世界…コズミックイラの時代の地球圏に存在するプラントにある研究所で生み出された生体兵器。

身体能力が高いのも自分のオリジナルであり、亡き父であるキラ・ヤマトの持つ能力を遺伝子操作で極限までに引き上げられ、産まれた後にも肉体を改造されたために5歳にしては異常な程の高い身体能力を持つ。

さらに2年の間本編主人公であり、ナイフ戦の達人であるシンの下でナイフの訓練を受けていた（シンは乗り気ではなかったが）ために、戦闘能力も高いレベルである（それでもレミリアや美鈴には勝てないが）。

家事やコンピューターを使った作業ができるのもシンの家事の手伝いをしたり、キラがコンピューターの使い方を教えてもらっていた為である。



外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介1（後書き）

どうも飛鳥です。

現時点で登場した3人のキャラ説明となっております。

この話に出てくるレミリアはよく二次創作にあるイメージとは魔逆になっていくかもしれません。

本編でも登場する予定です。

とんでもない設定（主にレミリア）ですが生温かく見守っていただけると幸いです。

では（・）（ノシ

## 第8話『それぞれの休日』

よくは分からないけどあたしはこのグラールっていう所に飛ばされてきた

どういうわけかディムロスとシャルティエもこの世界にとぼされてきたらしい

このグラールはあたしが知らないモノが山のようにある

ここまで心が躍ったのはソーディアンを完成させた時以来かもしれない

だから決めた事がある

せっかくソーディアンになって長い時を生きられるようになったのだから…

ハロルド

『ぐふふ』

早苗

「ハロルド？どうかしたのでしょうか？」

リオン

「話しかけるな。こういう時は碌な事を考えてないぞ」

この世界は勿論他の世界の不思議を解明してみせるわよ

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〈世界を駆け巡る者達〉

第8話「それぞれの休日」

Sideシン&スバル

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋  
パーティー解散から2日後

シン

「ふう…。これでよし…っ」と

エミリアの決意表明から2日、シンが自室のビジフォンに向かいながら作業をしている時にシンがあらかじめ呼んでいたスバルが入ってきた。

スバル

『シンー？入るよー？』

シン

「ああ、スバルが入ってくれ」

「なにしてたの？…って何これ？」

シン

「これか？エミリアの特訓メニューの仮組だ。スバルを呼んだのはスバルの意見が聞きたかったからな」

シンはビジフォンにあったデータをプリントアウトしてスバルに渡した。

スバル

「特訓かー。私がシンの旅について行く為にもらった特訓が懐かしいな〜」

スバルは渡された特訓メニュー（仮）の内容を見るとかつて自分がシンについて行くと言い張った時にシンに渡された特訓を思い出していた。

スバル



「あ、私の時の特訓メニューとほとんど同じだ。懐かし〜」

シン

「スバルが俺について来ると言った時はまだ11歳だったからな」

スバル

「もつとも、私が13歳の時にインパルスを起動させてしまったから特訓の量が数倍になったけどね…」

シン

「今なら分かるだろうけどインパルスは状況に合わせて瞬時に武装変更が出来るのが強みだ。それにデバイスの起動できる時間が短い程換装にかかる時間が短くなるからな」

スバル

「それは分かっているけどさー。とりあえず内容は大丈夫だと思うよけどここをこうしたら…」

少女説明中…

シン

「なるほどな。じゃあこいつを内容に組み込んでこいつを除外すれば完成だな」

シンはスバルからの意見を取り入れ、エミリアの特訓メニューを完成させた。

シン

「サンキューなスバル」

スバル

「そう言うなら今度アイス奢ってね？」

シン

「8個までな」

スバル

「やりー！！じゃあ早速いこつ！」

シンから礼を聞いたスバル満面の笑みでアイスをねだった。

シンは呆れながらも了承し、シヨップینگモールへ行こうとした時に突然クラッド6が大きく揺れた。

スバル

「な、なに！？」

シン

「なんだか分からないが揺れの原因は近くだな。スバル！行くぞ！」

スバル

「う、うん！！」

シンとスバルは揺れによつてパニックになっている人の塊をかき分けながら揺れの震源地…最近増設されたシミュレータームへ走つていった。

S i d e レイ&エミリア

揺れが起こる1時間前

クラッド6 武器シヨップ

エミリア

「ねえレイ。これから盾持シールドとうと思ってるんだけどどうかな？」

レイ

「ふむ…確かにエミリアの防御力は低いからな盾を持つ事は正解だと思つぞ」

現在レイとエミリアはエミリアの新しい装備の購入をしていた。

エミリアは以前セイバー+ハンドガン、ロッド、ウォンド+マドウ

ーグの組み合わせだった。

しかし、それでは火力面も防御面にも不安が残るためならばいっそのこと装備を変えてみたらどうかとシン達に提案され、レイはエミリアの助言役として行動していた。

レイ

「あとお前はどうかやら剣の使い方が苦手だからな。ナイフを使ってみたらどうだ？」

エミリア

「え？あたしナイフなんて使った事無いんですけど…」

レイ

「基本の動きは俺とシンが教えるから安心しろ」

エミリア

「うー…。ガンバリマス」

レイ

「あとはテクニクのディスクの設定だな」

エミリア

「え？」

レイ

「ロッドで行うテクニクをフォーバスとレスタにしてウォンドで行うテクニクをザルアとジェルンにするぞ」

エミリア

「え〜…ウォンドでレスタをした方が早いじゃん！」

レイ

「どうかやらのロッドには癒しの力を強くする能力があるらしいからな」

結果レイとエミリアが購入した物は

ナイフ×2（炎属性・氷属性をひとつずつ）

シールド×1

フォーバス（レベル15）×1

ジェルン（レベル15）×1

ザルア（レベル15）×1

を購入した。

エミリア

「あたし…使いこなせるかな？」

レイ

「自信を持って、体力以外は高水準に動けていたからな。あとは体力の強化だ」

エミリアは今までの戦い方からがりと変わることには不安を持ち、レイは弱気になったエミリアを激励していると大きな揺れが2人を襲った。

エミリア

「ちよっ！？クラッド6で地震なんて起きないんですけど！」

レイ

「位置は最近増設されたシミュレータールームからか…行くぞ！」

エミリア

「あ！置いてかないでよー！！！」

レイはこの揺れの震源地がシミュレータールームと推測すると走り出し、エミリアも慌ててレイを追うのだった。

S i d e  
リオン&早苗

揺れが起きる10分前

クラッド6 シミュレータールーム

リオン

「いいか？まずソーディアンを扱っのなら晶術を扱えるようになることだ」

早苗

「晶術というとりオンさんがよく使っているグレイブとかエアプレッシャーのようなものですか？」

リオン

「ああ。ただしその晶術はシャルのみが使える晶術だ」

早苗

「ふえ？どういうことですか？」

シャルティエ

『僕が使える晶術は土と闇の2種類の属性だけなんだよ』

デймロス

『我の場合は炎の属性の晶術が使えるがシャルティエの晶術を使う事はできないのだ』

ハロルド

『要するに専門とする属性が違うという事よ』

早苗

「えーと…つまり土と闇の晶術はシャルにしか使えないけどデймロスはシャルが使えない炎の晶術を使う事が出来る………であっていますか？」

シャル

『大体その解釈であってるよ』

ここはクラッド6にあるシミュレータールーム。依頼無しに原生生物を狩る事を禁じられている現在のグラールで用いられている訓練方法はいくつが存在する。

その中で最も安全である訓練としてシミュレーターを使って投影された敵を倒すという方法である。

この訓練方法は文字通りシミュレーターを使用することで仮想現実の世界で戦闘訓練などを行うものである。

非常に実戦に近い形で訓練できるためリオンはこの訓練方法を採用し、現在早苗の前で晶術の手本を見せていた。

早苗

「いつ見てもリオンさんの晶術は凄いですね……………」

ディムロス

『次は我らの番だ。いくぞ』

早苗

「は、はい！ファイアーボール！！」

早苗は炎の晶術の基本であるファイアーボールを唱えたが何も起こらなかった。

早苗

「あ、あれ？失敗しちゃいました？」

シャルティエ

『し、失敗しても気にすることはないですよ！！』

ディムロス

『む？確かにファイアーボールが発動した筈だが…』

早苗は失敗したと思って落ち込み、シャルティエは早苗を励まし、ディムロスが考え込み、リオンは何気なしに上を見て顔を青くして早苗に叫んだ。

リオン

「！早苗！伏せろ！！」

早苗

「え？」

早苗はリオンの言葉に呆気にとられていると前方10mに巨大な炎

の塊が落ちて大爆発を起こし、爆発によって起きた爆風は早苗を吹き飛ばした。

早苗

「きゃあああああ！！」

爆風によって吹き飛ばされた早苗はVR空間の地面に叩きつけられ、気を失った。

リオンは早苗に駆け寄り外傷が無いか確認した時目の前の惨状を見て息を呑んだ。

リオンの見た光景は炎の晶術の中でも最強レベルの威力を持つ晶術『エクスプロード』の落ちた後と酷似していたのである。

リオンは目の前の惨状を引き起こした原因である早苗を見た。

早苗はリオンの腕の中で気を失っている。この時リオンは早苗の持つ力を再確認し、晶術の訓練は大型のモンスターの討伐依頼の時にしようと思ったのだった。

Side out

シン

「レイも来たのか？」

レイ

「ああ。このシミュレータールームではリオンと早苗が訓練に利用すると言っていたからな。もしかしたら彼らに何かあったのか不安になってな」

スバル

「だったら早く中に行かないと！」

リオン

「その必要はない」

突然の揺れを調査しに来た4人はシミュレータールームの前で偶然鉢合わせ、そのままシミュレータールームに入るうとしたがドアの奥から声が聞こえた。

リオン

「今回の揺れの原因は早苗だ。そして早苗は今気絶している」

エミリア

「リオン！早苗は大丈夫なの！？」

リオン

「問題はない。どうやら身体は頑丈らしいからな」

早苗が気絶したと聞いて心配するエミリアだがリオンは問題ないと答えた。

その後、医務班によって医務室に運ばれた早苗はすぐに検査され問題が無いと診断された。

しかし、早苗は起きた後クラウチに説教されたのは言うまでもない……。



第8話『それぞれの休日』（後書き）

どうも飛鳥です。

待ってください。の方は大変お待たせしました。

今回は休日編その2となっております。

次回からはフリーミッション編その2になります。

では（・）（ノシ）

第9話前編 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』受託編』

レイと一緒に揺れの原因を確認しにシミュレータールームに行ったらそこには服が少し焦げたりオンと気を失った早苗、そしてあちこち火花が起こっているシミュレーターがあたしの目に映った。

試しに頬を抓ったけど痛みがあった。

目の前に広がっている光景は夢じゃない。

ミカのことでも普通はありえないのに目の前の光景はとてもじゃないけど信じられなかった。

あたしは不安になった。

もしかしたらそう遠くない未来にレイ達が突然いなくなるのではないかと思ってしまう。

レイ

「どうやら早苗の身体には特に異常は見つからなかったらしい……」

エミリア

「ほんとに！？よかったあ……」

だからあたしは…もう逃げないって決めたんだ…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』受託編』

爆発事故から2日後

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

クラウチ

「ようシン。今依頼とか受けてないか？」

シン

「いえ、特には受けていないですけど……」

早苗の起こした爆発事故から2日経ち、クラッド6はいつもの日常に戻っている頃シンはクラウチに呼び出されていた。

クラウチ

「よっしゃ。実はローグスの首領からお前のチームを指名した依頼が来てな。できれば引き受けてもらえないか？」

シン

「依頼内容は？」

一応このリトルウイングは違法でなければローグスからの依頼も受けている。

最もローグスからくる依頼は危険であるケースが非常に多い（クラウチも出来る限り新人には回さないようにしている）。

しかも今回はローグスの首領『ドン・タイラー』からの依頼なのである。

特に有名というわけでもなく、戦闘に関してはまだまだ新米の早苗とエミリアがいる自分のチームを何故指名してきたのかシンには理解できなかったが依頼内容だけでも聞いておいた方がいいと思い、クラウチから依頼内容を聞くことにした。

クラウチ

「3年前にエンドラム機関が開発したマガス・マツガーナの破壊依頼だ」

シン

「確かその機体はあまり量産されていないと聞きましたが？」

クラウチ

「イルミナスの秘密基地を調査していたらまだ稼働可能な状態の機体が発見し、回収しようとしたらしいが所属不明の1人の女に奪われたらしい」

シン

「今のローグスなら解決できそうな気がしますけど…」

シンは不審に思った。

3年前のローグスならともかく、今のローグスは【SEED事変】を生き抜いた猛者達が『ドン・タイラー』による統制によってそんなにそこらではやられない連中である。

そのような猛者達がただが所属不明の僅か1人の女性相手に遅れをとることはない筈である。

クラウチ

「襲撃された連中も1人除いて行方不明になったらしい」

シン

「1人除いて？」

クラウチ

「おそらく残した1人はメッセンジャーなんだろうな。伝える事を伝えた後意識不明の重体になったらしい」

シン

「つまりその伝えられたメッセージの中に俺達のうちの誰かを指定した…。違いますか？」

クラウチ

「正解だ。襲撃犯に御指名されたのはお前を除く5人だ」

シン

「（あの時にスバル達が遭遇したっていう奴らの内の1人が…）」  
クラウチ

「その顔だと何か心当たりがあるようだな。それで…引き受けてくれるか？」

シンはスバルから聞いた奴ら時空管理局の精鋭部隊である起動6課のメンバーがローグスを襲撃したのだろうと判断した。どうやってかは知らないが彼女達には催眠術で人を使役できる方法がある。恐らくローグスの面々が負けたのもこの方法のせいだろう。このまま彼女達を放置しておいたら更に被害が拡大するだろう。だからこそシンは

シン

「わかりました。その依頼、引き受けさせていただきます」

クラウチ

「わりいな…。エミリアの事、よろしく頼む」

ドン・タイラーからの依頼：試作型巨大SUVウェポン…マガス・マッガーナの破壊依頼を引き受けた。

クラウチから依頼を受託してから30分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 ブリーフィングルーム

シン

「…これが今回俺達に依頼された内容だ」

リオン

「フン…。どうやら奴らは本気で僕達を敵視しているらしいな」

スバル

「まさか他の人を巻き込んでいるなんて…」

レイ

「ワレリーから借金を回収する依頼の時に奴らがやっていた事は何だ？」

エミリア

「そういえば現地の人を操って犯罪に加担させてたね…」

早苗

「そして私達を誘き出す為に関係のない人を襲撃するなんて…許せません!!」

シンから依頼内容を聞いた5人の反応はそれぞれ違ったが、ひとつだけ共通点があった。

それは関係のない人を巻き込んでいるという事に対する憤りである。

シン

「今回は危険な依頼になりそうだから準備は念頭にしておいてくれ」  
スバル

「うん!」

リオン・レイ

「「わかった」」

早苗

「わかりました!」

エミリア

「おっけー」

シン

「それじゃあ2日後の8時半にマイシップに集合してくれ。では、解散!!」

シンの号令の後シン達は2日後の出発に備えて準備を始めるのであった……。

第9話前編 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』受託編』 (後書き)

どうも飛鳥です。

今回はクラウチから依頼を紹介される所です。

次は準備、そして道中編を同時に投下する予定です。

では(・・・)ノシ

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』準備+EXside編』

最初にクラウチさんから依頼の内容を聞いた時は思わず耳を疑った。奴ら…時空管理局の動きが俺の予想よりも遥かに早く行動を始めていたからだ。

時空管理局に狙われた世界は良くて植民地化、最悪大量破壊兵器を使用した殲滅戦を仕掛けてくる筈だ。

時空管理局にとってこのグラールはただロストギアのある世界程度の認識しかないのだろう。

だからこそ…これ以上奴らが我が物顔で世界を蹂躪するのを止めなくてはならない…。

それが…俺が弱かったせいで時空管理局に殺されていた人達に対する償いだから…。

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』準備+EXside編』

Sideリオン&スバル&レイ

ブリーフィングから1日後の夜8時

クラッド6 リトルウイング管轄区 ショッピングモール

リオンとスバルとレイは明日に控えている出発までに買い出しを済ませていた。

レイ

「これであとは明日を待つのみだな」



リオン

「そういえばエミリアはどうした？いつも一緒に行動しているだろう？」

レイ

「ああ。明日に備えて休ませている。そういう早苗もどうした？」

リオン

「早苗をもエミリアと同じで休ませている。寝不足で足手まといになられてはかなわんからな…」

スバル

「そういやシンは何しているんだろ？」

S i d e シン

同刻

クラッド6リトルウイング管轄区 シンの部屋

シン

「（奴らのことだ…絶対に罠を仕掛けてくる筈だ…）」

シンは今回の依頼で自分達が向かうエリアの地形の調査をしていた。

シン

「（恐らく設置型のバインドで俺達の動きを止めて一気に止めを刺すという戦法を取ってくる筈だ…）」

そうシンが調べているエリアはトラップを仕掛けるには恰好の地形なのである。

レイとリオンも警戒はするだろうがもしもの時があると考えたシンは買い出しをスバルに任せ、彼女達…起動六課が罠を仕掛けていそうな場所を入念に探っていた。

シン

「（奴らは自分達の所属している組織の正義が一番だと思っている…その組織に影があったとしてもな…）」

シンはかつて…キラを目の前で殺されたあの事件の事を思い出していた。

あの時シンとキラ…そしてサクヤを逮捕しに来たのは他でもないあの2人だった。

「（どんなことがあっても自分達の正義を変えない…聞こえはいいが俺からすればタダの狂信者だな…）」

シンは過去の旅で管理局の闇をいやという程見てきた。

従わない管理世界は大量破壊兵器で脅し、それでも従わない者は管理局の敵として『逮捕』し、人体実験の実験台にする。

そのうちの1つが新型デバイス『ディパイダー』の実験台にされた物も数多くいた。

それだけでなく、最近の事件の中でも有名なPT事件・闇の書事件・JS事件は全て管理局の闇によって起きた事件である。

シン

「（奴らの手口を知っているのは俺だけだ。だからあの時のような悲劇を繰り返させるわけにはいかない！！）」

シンは目の前で死んでいく父を見たサクヤが絶望していく光景は今でも鮮明に思い出せる。

それだけではない。今まで自分が立ち会った管理局絡みの事件ではサクヤのような子供達が多数出た。

だからこそシンは万全の状態で彼女達と戦うべく入念に準備をしたのだった。

S i d e 早苗&エミリア

同刻

クラッド6 リトルウイング管轄区 早苗とエミリアの部屋

早苗

「いよいよ明日ですね…」

エミリア

「うー…まさかローグスのトップから指名されるなんて…」

早苗とエミリアは明日に控えている依頼に緊張していた。

まだ戦闘に関しては新米である2人にとって今回の依頼は今までの依頼の中で最も責任のある依頼であるので当然である。

早苗

「緊張しますよね…」

エミリア

「うん…。でも頑張らないとね…」

最初は緊張していた2人だったがここで緊張して皆の足手まといになるのは良くないと思い、そのまま眠りに就いたのだった。

S i d e o u t

翌日

クラッド6 リトルウイング管轄区 マイシップ

シン

「みんな、準備は出来たか？」

指定したよりも少し早い時間に集まったシンは全員に準備は出来たかと尋ねた。

リオン・レイ

「問題無い」

スバル

「準備オツケーだよ!!」

エミリア

「少し緊張してるけど大丈夫!」

早苗

「私も準備万端です!!」

デイルロス

「我も問題ない」

シャルティエ

「僕も大丈夫です」

ハロルド

「ぐふふ どんな場所か楽しみだわ」

シンの呼びかけに対し、全員問題ないと告げた。

シン

「よし!それじゃあ出発するぞ。目標はググ砂漠だ」

そしてシン達を乗せたマイシップは依頼された場所であるモトウブのググ砂漠へと飛び立った。

そこにはもう彼女達の罠が仕掛けられていると感じながら……。

Side EX シズル&カムハーン

パルム 首都 タルカス・シテイ

ここはパルムの首都であるタルカス・シテイ。  
シズルとカムハーンは時空管理局の情報を収集するために来ていた  
が思うように情報が集まらず落胆していた。

シズル

「やはり奴らを知っている者はいないか…」

カムハーン

「(奴らは秘密裏に動く事に慣れているからな…。もしかしたら接  
触できた者も奴らの手駒にされている可能性が高い)」

シズル

「(今日の情報収集はこれまでにするけどいいかい？カムハーン)」  
カムハーン

「(うむ…。根を詰め過ぎていざという時に動けなければ本末転倒  
であるからな…)」

シズル

「(カムハーン…。ちょっといいかい?)」

カムハーン

「(手短にな)」

シズルは話を変えようと思ひ。今まで疑問に思っていた事をカムハ  
ーンに尋ねた。

シズル

「(何故カムハーンはそこまでして僕達を守ろうとしてくれるんだ  
い?)」

それはカムハーンがシズルに守ろうとする理由だった。

シズル

「(僕はカムハーンからこの世界が異世界の者に狙われていると知

つて父さんや会社にいる皆を守りたくて君に手を貸している。じゃあカムハーンは僕達を守ろうとしてくれるんだい？」

カムハーンは数分考えた後、口を開いた。

カムハーン

「（それはお前達が私の息子であり娘でもあり孫でもあるからだ）」  
シズル

「（え…？）」

シズルは一瞬カムハーンが何を言ったのか理解できなかったがカムハーンは続けた。

カムハーン

「（何も無からお前達の先祖が産まれたのではない。我と私の妃であるミカの身体を元にお前達の先祖が産まれたのだ…）」  
シズル

「（なるほど。だから僕達はカムハーンにとって自分の子供と思っているから守ろうとしてくれるのか。…ん？）」  
カムハーン

「（そういうことだが…どうした？）」  
シズル

「（女の子が倒れている…。）」

カムハーンの答えに納得したシズルだが目の前に倒れている少女を発見し、カムハーンはその少女を見て反応を変えた。

カムハーン

「（む！？奴は管理局の服を着ている。確保するぞ！）」  
シズル

「（何だって！？わかった！彼女は家まで連れて帰ろう！）」

1時間後

????

「う、うっん…」

シズル

「目を覚ましましたか？」

????

「あれ？確か私はなのはちゃん達と戦って…」

カムハーン

「…貴様…八神 はやてだな？」

はやて

「なんで私の名前を？」

カムハーン

「時空管理局の精鋭中の精鋭部隊の隊長の名を知らぬわけがなからう？」

一瞬場の空気が悪くなったがはやての返答によって空気が変わった。

はやて

「そやな…でも今は違っんや」

シズル

「今は？」

はやて

「今の私は元起動6課隊長にして次元犯罪者八神 はやてや…」

カムハーン

「なに？」

元隊長という事にも驚きが隠せなかったが次元犯罪者という単語に

引つ掛かりをおぼえる2人だがはやてそんな2人に構わず話を続けた。

はやて

「もし貴方達がこの世界の住民やったら伝えなあかんことがある」  
シズル

「『この世界が管理局によって狙われている』ではありませんか？」  
はやて

「それなら…」

シズル

「ええ。そして貴女も僕が守ります」

はやて

「え…？」

シズル

「貴女は命を掛けて…犯罪者の汚名を着てまでもこの世界の危機を僕達に知らせてくれました。だから今度は僕が貴女を守る番です」

シズルの答えにはやては主思わず顔を赤くし、そして涙も溢れた。

自分がグラールに危機を伝える為に次元を越えることの出来る次元航行艦を奪取し、グラールに着くまでなのは新隊長とする起動6課の面々に様々な非難の言葉を浴びせられ、更に自分の家族であるヴォルケンリッターの面々も爆発する次元航行艦から脱出する際に散り散りになり、1人で心細い状態でタルカス・シティに辿り着き、力尽きた。

自分の為に迷惑を掛けたヴォルケンリッターの事を考えると今にも壊れそうな状態だった。

そこにシズルの言葉を受けて自分の心に限界が来たのである。

はやて

「ありがとうございます…」



シズル

「大丈夫です。貴女の…貴女方の思いは絶対に無駄にはさせません！」

泣き出しそうになっていたはやてにシズルが抱きしめながら自分の思いを伝えた。

はやて

「（あかん…これは…惚れてしまった…）」

はやてはシズルに惚れた事を理解しながらシズルの胸の中で泣き続けるのであった…。

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』準備+EX side編』

(後

どうも飛鳥です。

今回は準備パートとなっております。

何故はやてがシズルのもとに流れ着いたのか？h s y sての流れ着いた理由はキャラ設定3のはやての項目を読めばわかりますが詳しい経緯は9話の機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼編が終わった後に補足設定を投稿する予定です。

では(・・・)ノシ

第9話中編1 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』道中編』

クラウチから依頼を受けた時からシンは複雑そうな顔をしていた  
あいつは何か俺達に危険が及ぶ可能性がある任務の時はいつも表情  
をするからな

今回の依頼はかなり危険な依頼になるだろう

敵が彼女達だとすると恐らく罠を張ってくるだろう

だがどんな罠だとしても俺達はそれを目の前から破っていくしか方  
法はない

どれだけの時間が経とうとシンはシンだ

俺達に何かあれば恐らく自分を責めるだろう

だからこそ俺はあいつをサポートせねばならいな…

エミリア

「レイ！目標の地点まで到着したよ！！」

レイ

「わかった。今行く」

それが俺に出来るあいつへと償いなのだからな…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』道中編』

出発から2時間後

モトウブ ググ砂漠 ブロック1

目的地についたシン達の目に広がったのは天然の壁によってできた

エリアであった。

エミリア

「ここにあいつらが…」

レイ

「罾を仕掛けるにはもってこいの地形だな」

早苗

「注意しながら進みましょう…」

モトウブ　ググ砂漠　ブロック2

罾が張つてあると思つたスバル達は注意深く先へ進むが、シンは違和感を持っていた。

シン

「（おかしい…奴らのことだからもう罾を仕掛けてきてもおかしくない…。とすると…）」

シンが思考の海に沈んでいる間にスバルは奥に人がいる事に気がついていた。

スバル

「あれ？こんな所に人がいるよ？ちよつと声を掛けてみよ！」

レイ

「スバル！迂闊だぞ！！」

スバル

「あの！ここで何をしていますか？」

スバルはレイの制止を聞かずに目の前にいた男達に声を掛けた。

が、彼女の問いに対する答えは男が手に持っていた斧による攻撃で返ってきた。

スバル

「うわわわ！！危ないじゃないですか！！！」

男性ローグス

「SEED野郎が！！来るな！！来るなああ！！！！！」

振り降ろされる斧の軌道を見切ったスバルはすんでのところで斧を回避し、抗議の声を上げるが錯乱状態の男はそんなスバルに構わず斧による攻撃を続けてきた。

シン

「黙ってる！！！」

男性ローグス

「ぐはあ…！」

シンは一度自分の考えを中止して男の鳩尾に強烈な蹴りを喰らわせた。

流石にビーストである男性ローグスもこれには堪らず一撃でノックアウトした。

シン

「スバルここはもう敵地なんだぞ！」

スバル

「ご、ごめん…！」

リオン

「お前は本当に馬鹿だな…！」

何も考えずに先に進んだスバルにシンが注意し、リオンが小言を言っている。早苗はある異常に気がついた。

早苗

「……………あれ？奥の方から何か聞こえませんか？」

エミリア

「え……………？そんな音なんて聞こえないけど…………？」

エミリアは早苗に言われて音がするという方向に目を向けるとそのまま凍りついた。

シン達もその方向に目を向けるとそこには行方不明になっていたローグス達が編隊を組んでこちらに近付いてきた。

スバル

「なあにこれえ…………」

レイ

「ローグスの大軍か…………恐らく行方不明になったローグス全員がこのエリアにいるのだろう」

リオン

「恐らく先程の男の悲鳴に気づいてこちらに来たか…………30人だな」

スバルは思わず情けない声を上げ、レイとリオンは冷静に戦力を分析した。

エミリア

「そんな暢気なこと言ってる場合じゃないでしょ…………？」

早苗

「あ、あんな大軍でしかも行方不明の人達ですから下手に手を出せませんよ…………？」

エミリアは冷静に戦力分析をしているレイとリオンに突っ込みを入れ早苗はパニック状態になってしまった。

シン

「(成程な…俺達は迂闊にローグスに手を上げられない。向こうは俺達をSEEDフォームと勘違いしているのか問答無用で攻撃を仕掛けてくる。そして奴らは戦力を消費させずに俺達を疲弊させられる。まったくもって薄汚い連中が考える罠だな…。本当に反吐が出る)」

彼女達が用意した罠とは連れ去ったローグスの構成員を敵として出すという事だった。

確かにこうすれば自分の戦力を消耗せずに相手を捕える事が出来る。しかし、彼女達はひとつのミスを犯した。

それは…

シン

「スバル、リオンこいつらは気絶させる。レイ達は援護を頼む！」

スバル

「う、うん！」

リオン

「わかった」

シャルティエ

『まかせて下さい!!』

レイ

「援護は任せる」

エミリア

「うー…。人相手に撃つのは罪悪感があるけど…こつなりややけだ!!!」

早苗

「デймロス。晶術の出力を最弱に設定してください!!」  
デймロス

「わかった。もうあの時のような失敗はこりごりだからな」  
ハロルド

「私は何でこいつらが幻覚を見ているのか探らせてもらっつわよ」  
シン

「よし!行くぞ!!」

全員

「『『『『『『了解!』』』』』』」

相手が普通の相手ではなく戦闘に慣れたプロフェッショナル達のチームだったからである(早苗とエミリアは除く)。

シン

「遅い!!」

戦いはシンに飛びかかった男性ローグスがシンのライトニングエスパイダーの刃が男性ローグスの身体に食い込み、そのままシンに吹き飛ばされたことよって始まりの火ぶたが切って落とされた。

早苗

「これでどうです!!ファイアーボール!!」

男性ローグス×5

「『『『『『ウボアー!!!!!!!!!!』』』』』」

早苗

「ああ!!大丈夫ですか!?!」

デймロス@ドン引き

「出力10%でこの威力か...」

あるローグスは早苗のファイアーボール(威力はイラプション並)



によって吹き飛ばされ

レイ

「そこだな…」

女性ローグス×5

「……ちんちん……」

レイ

「雑魚だな」

またあるローグスはレイの狙撃でヘッドショットされ

エミリア

「えーと確かEXスタントラップの使い方は…ポチっとな」

女性ローグス×4

「……シビビビビ……」

エミリア

「うわー。1つ500メセタするだけあって強いわ」

またあるローグスはエミリアの仕掛けたEXスタントラップによって行動不能にされ

スバル

「一撃!!!必殺!!!」

男性ローグス×5

「……アイエ、アアアアア!!!」

スバル

「すつきり爽快!!!」

またあるローグスはスバルの鉄拳によって宙を舞い

リオン

「グレイブ！」

女性ローグス×5

「『『『『『あべし！』『』『』『』』」

またあるローグスはリオンのグレイブによって下から上に打ち上げられ、落ちた衝撃で気を失い

シン

「これで！ラスト！！」

男性ローグス×5

「『『『『『ひでぶ！！』『』『』『』』」

またあるローグスはシンのライトニングエスパードによる薙ぎ払いで吹き飛ばされ、気を失い  
ものの10分でローグスは全滅した。

気絶したローグスの一団をそれぞれ暴れないようにロープで縛り、シンはハロルドに結果を尋ねた。

シン

「ハロルド。何かわかったか？」

ハロルド

『え〜と。こいつらの脳波なんだけどここの奴ら全員一定の周波になっっていたわ』

早苗

「という事は？」

ハロルド

『みんな何かしらの方法で私達が敵に見せられていたわけ』

エミリア

「【SEED事変】…だね…」

この時エミリアは皆3年前に起こった事件が頭に浮かんだ。  
エミリア以外は当時グールにいなかった為にどのような状況か知らなかったがかなり悲惨な事件であったことは知っていた。

シン

「恐らく彼らのトラウマを使って操っていた…。であってるか？」

ハロルド

『そういうこと』

この時シン達は人のトラウマを使って彼らを操っていた事に強い怒りを覚えた。

レイ

「先に進むぞ。この先に奴らがいる」

早苗

「人の心の傷を使って操るなんて…許しません！絶対に！！」

エミリア

「こんな最低な事をする奴らなんてぶっ潰す！！」

リオン

「だが奴らは強力な機動兵器を所有している。気を抜くな」

スバル

「どんな相手だって私たちみんなで掛ければ勝てる！！」

シン

「よし！！行くぞ！！」

シン達は思い思いの言葉を言った後恐らく彼女達のいるエリアに突入した。

モトウブ　ググ砂漠　最終ブロック

突入したシン達の前に居たのは間違いなく起動6課の面々がいた。そして、彼女達の後ろには奪われた試作巨大SUVウェポンマガス・マツガーナの姿があった。

フェイト

「よくここまでくれましたね？でも貴方達はここで『保護』させてもらいます」

シン

「いいや。ここで捕まえられるのはお前らだ!!」

ググ砂漠にて2回目となる管理局との戦いが切って落とされたのだ  
った……………。

第9話中編1 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』道中編』 (後書き)

どうも飛鳥です。

今回は道中編になります。

次回は決着編になる予定です。

では(・・)ノシ

第9話中編2 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』対管理局戦』

目の前にあの時レイさんとリオンが戦っていた人達と巨大なマシンリーがいた

あの時は必死で気がつかなかったけど小さな子供もいる

なんでこんな事にあんな子供を平然と巻き込むのだろう？

なぜあの子達は自分のしている事に疑問を持たないのだろう？

私にはわからない…

なんでこんな事がおかしいと思わないのかと…

レイ

「スバル！呆けている暇はない！くるぞ！！」

スバル

「う、うん！」

子供が先陣を切って戦うなんておかしい

だけど私はあの子達を止める言葉は持っていなかった…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』対管理局戦』

Sideスバル

戦闘開始から1時間後

モトウブ ググ砂漠 最終ブロック

戦いは激戦となっていた。

レイとエミリアはマガス・マツガーナにかかっている頃スバルは2

丁拳銃タイプのデバイスを使うティアナと戦闘を繰り広げていた。

ティアナ

「喰らいなさい!!!」

スバル

「うわわわ!!!」

ティアナの光弾がスバルを捕え、スバルはぎりぎりで光弾を叩き落とす。

スバル

「やったなあ!!!」

ティアナ

「チイツ!!!」

スバルもお返しとばかりにオブシディアンを展開して反撃するがティアナはその弾全てを回避した。

スバル

「（遠距離だと射撃に誘導性があるあの子の方が有利だけどあの弾幕じゃ私の十八番の接近戦を仕掛けられないよぉ〜）」

ティアナ

「（私の攻撃は威力が低いけど向こうの銃は誘導性が無い代わりに威力が高い！今は私の方が有利だけど長期戦では私の方が不利だわ!!!）」

スバルとティアナはお互い決定打となるものを持っていなかった。スバルの使うオブシディアンはGRM社の最新鋭武器だけあって威力はティアナのクロスミラージュの弾と比べると圧倒的な破壊力を持っている。が、ティアナはスバルの腕の拳動で射線を見切り、全て回避していた。

スバルの十八番である接近戦も遠距離から常に移動しながら攻撃でき、弾幕も厚いティアナの攻撃の前では接近戦を仕掛ける事ができずにいた。

それに対しティアナの使うクロスミラージユはある程度誘導性を持つ弾を放つ事ができ、スバルはぎりぎりまで撃ち落とすしか回避方法は無い。が、クロスミラージユで放つ弾はスバルの使うオブシディアンに比べ威力が圧倒的に劣る。

なのは直伝のデイバインバスターを撃つことも可能だが、撃つ際に大きな隙ができる為使う事ができなかった。

スバル・ティアナ

「（この戦い。かなり長くなるか…）」

スバルとティアナはお互い決定打の無いまま戦いが続いていた。

Sideレイ&エミリア

一方レイとエミリアはマガス・マツガーナに対してワンサイドゲーム状態となっていた。

エミリア

「レイ！ミサイルが来るから迎撃して！！」

レイ

「わかった」

何故なら元々人が乗って操作するマガス・マツガーナをAIで動かしている為最初は驚いたエミリアだがすぐに攻撃パターンを把握、レイがマガス・マツガーナの攻撃を迎撃または妨害し、エミリアはレイが見抜いた弱点をハンドガンで着実にダメージを与えていた。

AI





「うわー!!」

リオン

「隙だらけだ！幻影刃!!」

キャラ

「エリオ君！？フリード！お願い!!」

フリード

「ギャオオオン!!」

早苗のファイアーボール（威力は出力1%でようやくファイアーボールになった）でエリオを牽制し、それで怯んだエリオは体勢を立て直そうとする所にリオンは幻影刃でダメージを与えようとするがフリードの放つ炎によって妨害された。

リオン

「チイツ！」

早苗

「リオンさん！大丈夫ですか!？」

リオン

「大した事は無い。それよりも早苗僕が許す。出力15%のファイアーボールで奴らの動きを封じる」

早苗

「は、はい!!」

炎に焼かれかけたリオンに早苗が心配になって駆け寄るとリオンは早苗に指示を飛ばした。

それはディムロスの出力を1%から15%にまで引き上げたファイアーボール（威力はフレアトルネード並）でエリオとキョロの動きを封じるというものだった。

キャラ

「エリオ君！大丈夫！？」

エリオ

「うん。僕は大丈夫今のうちに追撃すれば……」

早苗

「子供相手に使うのは気が引けますが…ファイアーボール！」

エリオ

「うわあああああ！！」

キャラ

「きゃあああああ！！」

フリード

「ギャオオオオン！！」

リオン

「これでトドメだ！！デモンズランス・ゼロ！！！！」

エリオとキャラは早苗のファイアーボールの荒れ狂う炎によってダメージを負い、トドメとばかりにリオンのデモンズランス・ゼロの紫色に輝く槍と魔力の塊が彼らを襲った。

これにはフリードも堪えたようで普段の小竜の姿で気絶し、エリオとキャラも気を失った。

リオン

「結果は変わらん。そう何度やってもだ」

早苗

「やりました！」

リオン

「スバルの奴が苦戦しているらしいな……」

早苗

「すぐに援護に回りましょう！！」

リオン

「そうだがディムロスの出力を1%に戻しておけよ」

早苗

「は、はい…」

デймロス

「魔力が高いというのも考え物だな…こういう時クレメンテ老が居れば…」

ハロルド

「無い物ねだりしていてもしょうがないでしょ？そんなじゃ今から出力を落とすから早苗はそこで少し待っててね」

エリオとキャロとの戦いに勝利したりオンと早苗はスバルの援護に回ろうとするがリオンから出力を1%に戻しておくように言われた為ハロルドにデймロスを任せて今の自分でも何かできる事は無いかと周りを見回すと自分と同じくらいの長さの剣を見つけた。

早苗

「これなんでしょう？綺麗な剣ですけど…。軽い…まるでデймロス達を持っているみたい…」

早苗は自分が拾った剣を見てデймロス、ハロルド、シャルティエを持った時と似たような感覚がして剣を見ていると早苗の頭に老人の声が響いた。

??????

『お主は僕の声が聞こえるようじゃな?』

早苗

「(貴方は誰ですか?デймロスでもハロルドでもましてはシャルでも無いですけど…)」

早苗は頭に響く声にデймロスと交信した時と同じ要領で声の主に尋ねると声の主は驚きを含んだ声を上げた。

??????

『ほう。どうやらディムロス達を知っているようじゃな。どれ、僕も新たなソーディアンマスターの手助けをしようとするかの』

早苗

「（わかりました。クレメンテ：貴方の力を貸して下さい！）」

クレメンテ

『フオツフオツフオ……。それでは行くとするかの。早苗よ』

早苗

「はい！行きましょう！クレメンテ！！」

早苗は声の正体：ソーディアン・クレメンテを両手で持ち、ディムロスとハロルドを腰に差してスバルの許へ駆けていった。

Side スバル・レイ・エミリア・リオン

戦闘開始から3時間後

ティアナ

「もらった！これで終わりよ！！」

スバル

「！ヤバツ！！」

ティアナの放った弾に反応が遅れたスバルはやってくるだろう痛み思わず目を瞑るがスバルを狙った弾は突如として飛んできた青い光弾によって撃ち落とされた。

レイ

「スバル援護する」

スバル

「レイさん！それにエミリアにリオンまで」

エミリア

「思ったより早く片付いたからね！ぱぱとやっつけてシンと合流しよ！」

リオン

「とういうわけだ。お前に勝ち目はないぞ」

ティアナ

「っ！馬鹿にして！！」

スバルを狙った弾を撃ち落としたのはレイの持つオブシディアンの弾であった。

そして、リオンの挑発に激昂したティアナはスバル達にディバインバスターを放とうとするがそれが彼女の失敗だった。

後方に大きく下がったティアナの足元には何かの機械が設置されていた。

エミリア

「ポチっとな」

ティアナ

「！きゃあああああ！！」

そう。ティアナの足元にあった機械とはブレイバー御用達のトラップ【EXスタントラップ】だったのである。

エミリア

「みんな！今だよ！！」

レイ

「これで終わらせる。全弾持っていけ！！」

リオン

「覚悟はできたか？デモンズランス・ゼロ！！！！」

ティアナ

「うっ…」

レイのオブシディアン全弾発射とリオンのデモンズランス・ゼロを  
まともに受け大ダメージを負ったティアナはそれでも意識を保つて  
いたがそこにスバルのトドメが入った。

スバル

「一撃必殺！パルマ！！フィオキーナ！！！」

ティアナ

「うわあああああ！！！！！」

スバルがシンと共に旅をしている時、シンから初めて教わった最強  
の奥義【パルマ・フィオキーナ】。青く輝く拳はティアナを吹き飛  
ばし、ティアナは壁に叩きつけられ気を失った。

スバル

「はあっはあっ…勝った！！！」

レイ

「よくやったなスバル」

スバル

「うっん、みんなが助けてくれたおかげだよ」

エミリア

「あたしは置いて起動させただけだから！」

リオン

「ふん…。これで例を言うのならもっと腕を磨くんだな」

スバル

「っと！こうしてる場合じゃない！！シンの援護に行かないと！！！」

スバル達は少しの間勝利の余韻に浸ったが、まだ戦闘を続けている  
であろうシンを援護するためにシンの許へ急ぐのであった。

S i d e シン

スバル達の勝利から1時間30分前

ググ砂漠 最深エリア

一方シンはというとフェイトと高速戦闘を繰り広げてていた。

フェイト

「貴方にこれが見切れますか!？」

シン

「当たるか!！」

フェイトはバルディッシュをスピードを上乗せしながらシンに振り降ろすがシンは紙一重でこの斬撃を避けた。

フェイト

「どうしたんですか?ただ避けてばかりでは私に勝てませんよ?」

シン

「言ってる!」

フェイトはバルディッシュによる斬撃とプラズマランサーを混ぜた攻撃でシンを攻撃するがそのどれもシンは避けていた。

客観的にみれば地面を走るシンに対し空を自由自在に飛ぶフェイトの方が圧倒的に有利である。

なぜならシンの動きは2Dであるのに対しフェイトは3Dな動きができるのである。

だからシンの放つ攻撃はことごとく外れている。

しかしフェイトは気が付いていない。

シンはフェイトに対して手加減をしながら戦っているだけではなく、着実に追い詰められている事に。



フェイト

「追い詰めましたよ！！プラズマザンバー！！！」

シン

「(来たか!)」

フェイトは壁を背にしている状態を追い込んだと勘違いしていた。だがフェイトはそれに気がつく事も無く、シンに突撃した。

フェイト

「電光一閃…えーーーーい!!!」

シン

「今だ!!!」

シンは突撃してきたフェイトに対し最小限の動きでプラズマランサーを回避し、スピードが乗っていたフェイトはブレーキできず、シンの後ろにあった壁に激突した。

フェイト

「ッ~~~~~!!!!!!」

声にもならない悲鳴を上げるフェイトに対しシンは一気に止めにかかった。

シン

「(トキさん…貴方の技を使わせてもらいます!!!)」

シンは過去に訪れた世紀末の世界で世話になった人物の1人にして今から使う技の持ち主に宣言した。

シン

「北斗！！有情断迅拳！！！」

シンは動きを止めていたフェイトに一気に接近するとそのままフェイトの横を駆け抜けた。

フェイト

「ッ！…あれ？痛くない…？」

フェイトは痛みを覚悟していたがいつになっても痛みが来ないのでシンが攻撃を外したと思ってシンに攻撃をしようとしたが身体を動かそうとした瞬間、身体の異常を感じた。

フェイト

「あれ？動けない！！なんで！？」

フェイトがシンを攻撃しようと思っても身体がフェイトの意思とは裏腹にまったく動かなかった。

未知の状態に陥ったことでパニックになるフェイトにシンは静かに答えた。

シン

「秘孔・新？中を突いた。あんたは俺がいいと言っまで身体を動かす事ができない」

秘孔・新？中とはシンが説明したとおり相手の動きを封じる秘孔である。

フェイトは意識があるのに身体が動かない状態に恐怖した。

過去にJS事件の時でも身体を縛られたことがあった。しかし、今は縄もバンドもされていない状態にも関わらず身体が動かないのである。

フェイト

「そ、そんな！助けて！！」

フェイトはシンに対して助けを求めるような声を上げた。

しかし、シンはそんなフェイトに対してワルサーP99を向けた。

シン

「いやだね。アンタは自覚していないだけで多くの人々から大切なもの…大切な人を奪ったんだ。むしろこれくらいで済んでいるだけありがたいと思うんだな」

フェイト

「そ、そんな！私がいつ貴方から大切なものを奪ったと言ってます！？」

シンはそんなフェイトに対して憎しみをこめた目でフェイトを睨みながらフェイトに答えた。

シン

「C・E80 10月15日、プラント、アプリリウス1、キラ・ヤマト、サクヤ・ヤマト、……」

シン・アスカ…ここまで言えば分かるな？」  
フェイト

「！？そんな！貴方がSSS級次元犯罪者【紅き翼をもつ男】！？それにアプリリウス1って私が17歳の時に担当した…あの事件の！？」

シン

「ああ、そつだ」

シンはそう言うとフェイトの左腕を掠めるように撃った

フェイト

「い、痛い！！なんで！？なんでこんなに痛い！？」

想像以上の痛みに悲鳴を上げるフェイトにシンは冷ややかに答えた。

シン

「痛いのは当たり前だ。秘孔・龍領を突いたからな」

秘孔・龍領…痛覚神経を剥き出しにし、相手への痛みを倍増させる秘孔である。

フェイト

「痛い！痛い！！！！誰か！！誰か助けて！！！！」

シン

「アンタ達は俺達を捕えようとした結果、キラさんは死んだ」

シンは無表情でされど憎しみのこもった目でフェイトの右足を撃つた。

痛覚神経がむき出しの状態にされているため普通に銃で撃たれた時の何倍もの痛みがフェイトを襲った。

フェイト

「ひぐう！！！！！！」

シン

「痛いだろ？これはキラさんの痛みだ」

痛みで苦しむフェイトをシンは表情を変えずに左足へ銃弾を叩きこんだ。

フェイト

「いぎっ！！！！」

シン

「そしてこれはまだ5歳のサクヤが父であるキラさんを目の前で殺された事によって生まれた痛みだ」

シンの脳裏にはC・Eで自分を捕えようとした2人の顔を覚えている。

シンの目の前でキラを殺したのは彼女ではない。しかし、彼女達が自分の存在をラクス・クラインに告げた為にキラは死に、サクヤは行方不明となった。

無論、彼女も上司からの命令で来たのだろう。ここで自分が彼女を憎むのも筋違いではないかと何度も思った。

だが、シンは彼女達を許す事ができなかった。

そして、涙を浮かべ助けを求めるフェイトに対し、シンは左肩に銃弾を叩きこんだ。

シン

「痛いだろ？怖いだろ？だけどな。これよりももっと強い痛みを与えたのはお前ら時空管理局だ」

フェイト

「誰か…助けて…」

シン

「ついでに面白い事を教えてやるよ。一度俺はお前達に捕えられた。その時管理局は俺の身体を何度も何度も八つ裂きにした」

フェイト

「ひい！！」

フェイトはシンが八つ裂きにされた光景を想像して悲鳴を上げた。

シンはそんなフェイトを無視して話を進めた。

シン

「俺はC・Eに居た時の人体実験で不老不死になっていたからな。

当時のトップが俺の身体の秘密を暴こうとして体の隅々を調べられたさ……」

フェイト

「う……あ……」

シン

「だが別に俺は自分の体を痛めつけられたから管理局を恨んじやいないさ……。だが、それを俺以外の人にも行つたことが許せないんだよ……！」

遂にはまともにも返答できなくなったフェイトに対し、シンは最後の弾を放ち、フェイトは操り糸が無くなった操り人形のように崩れ落ちた。

シン

「（……俺も甘いな……。本当ならこのまま殺すつもりだったのに結局奴を殺せなかった……）」

シンはトドメを刺せたのにトドメを刺さなかった自身の甘さに呆れていた。

スバル

「シーン……大丈夫？」

シンは自嘲気に笑っていると戦いを終えたスバル達がシンの許に駆けつけてきた。

シンはワルサーP99をナノトランサーにしまつと普段と変わらない表情でスバルに答えた。

シン

「俺は大丈夫だ。それよりも行方不明だったローグスの人を連れてここから出るぞ」

レイ

「どういつことだ？こいつらも連れていけばこいつらの狙いを知る事ができるのだぞ？」

シンがここから離脱すると伝えるとレイは意義を唱えた。

確かに彼女達を捕虜にすれば情報を得られるだろう。が、シンの答えはそのような状況ではない事をスバル達に思い知らされた。

シン

「ここにこいつらの仲間が大量に來ている。接敵まであと30分くらいだ」

エミリア

「ええ！？こいつらの仲間が來てるの！？」

そう。彼女達の残した最後の罠…それは物量による力押しだった。

リオン

「シャル。分かるか？」

シャルティエ

『80…90…100…駄目です！数が多すぎます！！』

リオンはシャルティエに敵の数を聞くとシャルティエはあまりにも数の混乱しながらもリオンに報告した。

レイ

「シャルティエ。敵の位置は分かるか？」

シャルティエ

『どつやらここを包囲しているようです。何とかして切りぬけないと...』

敵は自分達を包囲している。

幸いマイシップまでには来ていないがこのままでは包囲殲滅されるのも時間の問題である。

エミリア

「ど、どうするの？」

シン

「とりあえず奴らはここにいる奴らの反応を追ってここに来ているだからこいつらは放置して行方不明になっていたローグスをマイシップに詰め込んで逃げるぞ」

パニック状態になっているエミリアにシンは冷静に答えたが、シャルティエがその方法も無くなったと伝える内容がシャルティエの方から出された。

シャルティエ

『駄目です!! どうやら先行部隊がもうここに着いています! 数は60人です!!』

この時スバル達はここまでかと思いい、シンはデステイニーを起動させようとしたがそこにシン達に光明をもたらす少女がやってきた。

早苗

「大丈夫です!! 私に任せて下さい!!!」

リオン

「早苗!?! デイムロスの出力調整でこの危機を乗り越えられるよう



な威力は無いぞ？」

やってきた少女…早苗はリオンの問いに対して両手で持っている剣をリオン達に見せた。

クレメンテ

『ひさしぶりじゃのう。シャルティエ』

リオン

「クレメンテだと!？」

シャルティエ

『クレメンテ老!?!もしかして…!』

リオンは早苗の持ってきたソーディアンに動揺を隠せず、代わりにシャルティエが早苗の考えている事を言おうとしたら早苗が先に答えた。

早苗

「クレメンテの出力100%で晶術を使います!！」

リオン

「やめる馬鹿者!!あの時はディムロスの出力が30%だから被害は少なく済んだがそんな出力で晶術を使ってみろ!?!ここに半径150kmのクレーターができるぞ!！」

これを聞いたリオンは早苗を止めようとした。

しかし、早苗は笑顔でリオンに答えた。

早苗

「大丈夫です。リオンさんもシンさんもスバルさんもエミリアさんもレイさんもそして私も死にません。だから…任せて下さい」

リオン

「チツ！勝手にしろー！！」

早苗

「じゃあ勝手にします。クレメンテ！お願いします！！」  
クレメンテ

『まかせておけ。全力でいくぞ！！』

早苗はクレメンテを空に掲げるとある術を詠唱した。

早苗・クレメンテ

「『【来たれ生誕の雷！怒れ、創生の大地！】』」

早苗が詠唱を始めると早苗の周りに異常な量の魔力が集まっていく。それはかつてクレメンテのマスターであった者が使ったクレメンテの最強の晶術その名は…

早苗・クレメンテ

「『【リバーズ！クルセイダー！！！！】』」

リバーズクルセイダー

早苗の前のマスターである者が第2次天地戦争の時に使用した晶術早苗を中心に巨大な雷が落ちた瞬間シン達に迫り来ていた時空管理局の者のみをこの場所から吹き飛ばした。

シャルティエ

『敵の反応…距離にして150kmまで遠ざかりました』

早苗

「はあっはあっ！やった！！」

クレメンテ

『お主はフィリア以上のマスターになりそっじゃなあ…』  
リオン

「早苗。動けるか？」

シャルティエは茫然とした状態で起こった事を報告し、早苗はそれで成功を確信して荒い息をしながら喜び、クレメンテはこの状況を打開させた早苗を称賛し、リオンは早苗に動けるかと尋ねた。

早苗

「ちょっと疲れましたが…大丈夫です」

スバル

「すっご…」

エミリア

「早苗って本当に凄いね…」

シン

「よし。この隙にここから離脱するぞ」

レイ

「ああ。それが最善だな」

シン達は早苗が作ったチャンスを生かして行方不明になっていたロークスをマイシップに乗せてクラッド6へ帰還するのであった…。

第9話中編2 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』対管理局戦』

(後書き

どうも飛鳥です。

今回は管理局との第2回戦です。

この話でフェイトはこの戦いの時シンへの恐怖で心が折れ、以降の戦いからは退場することになります。フェイトファンのみなさんゴメンナサイ。

次回は報告編となります。

では(・・・)ノシ

第9話後篇 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』報告編＋』

デймロス、ハロルドに続いてまさかクレメンテ老に再会できるとは思っていなかった

あの娘は確かに強い力を持っているけどそれだけじゃない気がする  
あの娘は自分の背中に坊ちゃんと変わらないくらい思いものを背負っている

16歳の女の子が背負うにはあまりにも重いものをあの子は背負っている

もう坊ちゃんみたいな悲劇はもう見たくない  
たぶん坊ちゃんもそう思っている  
だから…

デймロス

『シャルティエ！聞いているのか！？』

シャルティエ

『あ、すみません。それでデймロスの出力を戻している時には…』

だから僕は坊ちゃんと一緒にあの娘を支えてあげたい  
ソーディアンとしてそして、1人の人間として…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

『世界を駆け巡る者達』

第9話 『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』報告編＋』

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

ググ砂漠から撤退して3時間後

激戦を終えたシン達はクラッド6に帰還したシン達はググ砂漠で救

出したローグスの集団を医務室に預け、クラウチのところへ報告をしていた。

クラウチ

「むこうさんから連絡が取れた。意識不明になっていた男が意識を取り戻したらしい」

早苗

「そうなんですか！？よかったあ…」

早苗は出発する前に事の顛末を伝えた者が意識不明だとシンから聞かされていたため、回復の報を聞き安堵の息を吐いた。

クラウチは早苗が安堵の息を吐いたのを確認すると話を続けた。

クラウチ

「今回の依頼の達成でウチも他の企業から注目されるようになった。しかも行方不明になっていたローグスの連中も保護したっていうんだから俺から言う事は唯一つだ」

クラウチの様子を見て依頼の管轄外の事をした為に怒られると思っただエミリアは息を呑むが次のクラウチの言葉でそのエミリアの表情は明るくなった。

クラウチ

「よくやったな、お前ら」

クラウチはシン達1人1人に30万メセタの入った袋を渡した。

エミリア

「おっさん！これって…」

エミリアは袋に入っていた30万メセタを見てクラウチに問いかけるとクラウチはこう答えた。

クラウチ

「これは俺からのボーナスだ。エミリアもいい働きをしていたと報告されているしな。これは俺からのご褒美だ」

エミリアは嬉しかった。自分を認めてほしかった人に認めてもらえたからである。

クラウチ

「次もしっかりやってくれよ？んじゃお疲れさん！」

クラッド6 リトルウィング管轄区 ブリーフィングルーム

クラウチへの報告から10分後

ブリーフィングルームは和やかな雰囲気にもまれていた。

その要因はクラウチに認められて上機嫌になっているエミリアと新たな仲間が加わったからであろう。

エミリア

「」

レイ

「上機嫌だなエミリア。まあそれも仕方ないか…」

クレメンテ

『僕はソーディアン・クレメンテじゃ。これからよろしく頼むの』  
スバル

「うん！これからよろしくね！クレメンテおじいちゃん！」

ディムロス

『スバル！クレメンテ老になんて言い草を…』

クレメンテ

『ほっほっほ。構う事は無い。それにしても元氣のいい孫ができた気分じゃのっ』

ハロルド

『早苗つてばもしかしたらソーディアンに好かれているんじゃないかしら？』

早苗

「え？そうですか？」

しかしこの状況に表情をひきつらせている者もいたが

リオン

「なんだ…このカオスな空間は…」

シン

「まあみんな無事に生還できただからああいう雰囲気になるのは仕方ないだろ？」

リオン

「だがこれでは連絡事項を伝える事はできんぞ？」

シン

「それもそうだな。というわけで…」

シンも最初はこの雰囲気を感じていたがこのままだと連絡事項を伝えられないとリオンから苦情が入ったのでシンは雑談を楽しんでいるスバル達に声を掛けた。

シン

「みんな！これから連絡事項を伝えるから聞いててくれ！」

シンがそう叫ぶと皆一様にして沈黙した。

シンはその様子を確認すると連絡事項を伝え始めた。



傭兵連絡中…

シン

「というわけで次に依頼が来るまでは各自自由行動をしてくれ。それじゃ、解散！！」

シンから連絡事項を聞いたスバル達は各々が思う場所へ移動したのであった。

S i d e E X なのは

シン達が撤退してから1時間後

ググ砂漠 最深エリア

フェイトの救難信号をキャッチしたなのははググ砂漠の最深エリアに来ていた。

他の3人はこの手前にあるエリアで気を失っていたが大事に至るような怪我は無かった。

しかし、フェイトはそのエリアにはおらずこのエリアに救難信号が出されていた。

なのは

「フェイトちゃん！何処なの！？返事をして！」

なのはは必死になってフェイトを捜すと微かにフェイトの音がしたためその方向へ向かうとなのはは悲惨な状態になっているフェイトを発見した。

なのは

「フェイトちゃん？」

フェイト

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ





「なんで私は生きているんだろ…」

フェイトは自分を攫ったモンスターをバルディッシュを使って撃退するも大きな虚無感に囚われていた。

シン

【痛いだろ？これはキラさんの痛みだ】

シン

【そしてこれはまだ5歳のサクヤが父であるキラさんを殺された事によって生まれた痛みだ】

シン

【痛いだろ？怖いだろ？だけどな。これよりももっと強い痛みを与えたのはお前ら時空管理局だ】

あの戦いの時にシンに言われた言葉がフェイトの心に深々と突き刺さっているのである。

フェイトも誰かから大切なものを奪っている自覚があった。

が、フェイトは見て見ぬふりをしてきた。

そうしなければ管理局の執政官をしていないし、エリオとキャロの見本にならなくてはいけないと思いつけていた。

しかし、シンはそんなフェイトに嫌でも現実を突き付けた。

フェイト

「私にはもう生きる意味なんてない…」

フェイトは罪悪感に押しつぶされそうになっていた。

皮肉にもキラが殺されて自分のせいで罪悪感に押しつぶされそうになっていた状態となったシンと同じ状態になっていた。

フェイトは死にたいと思った。

そして、そんなフェイトの思いに呼応するかのようによこ・ヴァーラ

の大軍がフェイトを取り囲んでいた。

フェイト

「（私…死ぬんだ…）」

フェイトは自分にふりかかる死をまるで他人事のように見ていたが、自分の頬に炎がかすった瞬間フェイトの思いは変わった。

フェイト

「イヤだ…。死にたくない！このまま何も出来ずに死にたくない！」

この時のフェイトは何かの偶然か、かつてシンが生への執着で叫んだ言葉と一語一句違わず同じ内容を叫んだ。

そして、ゴ・ヴァーラの爪がフェイトを引き裂こうとした瞬間、フェイトを襲っていたゴ・ヴァーラ全てが氷漬けになって絶命していた。

???

「お姉さん大丈夫？」

フェイトを救ったのはまだ幼さを残した水色の髪の少女だった。

そこに赤と黒のツートンの配色のキャストが水色の髪の少女を叱った。

???

「チルノ！勝手に行動するでない！！」

チルノと呼ばれた少女

「だってこいつらがこのお姉さんを殺そうとしてたんだよ？」  
???

「ぬう。だからといって1人で突っ込むでない！いくらお前が強い力を持っていたとしてもお前より強い奴はゴマンといるのだぞ」  
チルノ

「ちえっ。おっちゃんのケチ」  
????

「私はおっちゃんではない！私はマガシだ！！」

フェイト

「あ、あの…」

目の前で繰り広げられる漫才にフェイトはやや引き気味にも漫才をしている2人に話しかけた。

チルノ

「あ、お姉さん。怪我は無い？」

フェイト

「え、ええ。ありがとう」

マガシ

「気にするでない。…が見た所わけありのようだな」

フェイト

「え？は、はい…ちょっとトラブルがあつて…」

チルノ

「ふーん…」

フェイト

「え、えーと…」

フェイトは礼を言った後マガシと名乗ったキャストにいきなり核心を突かれ、しどろもどろになりながら言い訳するとチルノはフェイトの眼をじつと見つめ、何か思いついた表情をした後フェイトにある提案をした。

チルノ

「そうだ！お姉さんもあたいたい達と一緒にきなよー！」

フェイト

「え…？」

マガシ

「待ていー！」

いきなりとんでもない提案をされたフェイトは目を白黒させ、キヤストはチルノに対して突っ込みを入れた。

しかし、チルノはそんな2人を無視して話を進めた。

チルノ

「？ここで戦力が増えるのはいいことじゃん」

マガシ

「ぬう…。確かにこの戦力だと不安が残るな…」

フェイト

「えっと…」

チルノがマガシにそう説くと彼も思案顔になり、フェイトはただ状況についていけないでいると彼は答えを出した。

マガシ

「貴様…。名をなんという？」

いきなり名前を聞かれて驚きながらフェイトは自分の名前を答えた。

フェイト

「フェイト…フェイト・テストロツサ・ハオラウンです…」

マガシ

「そうか私の名はレンヴォルト・マガシだ。これからお前は私とこ

の娘…チルノと共にチームを組んでもらうぞ？」

フェイト

「え…？ええええええええええええ！？」

フェイトはあっさり自分をチームに入れるマガシの発言に驚き、自分のしてきた事を考えて一瞬断ろうとしたが

チルノ

「あたい達と一緒に行動するのがイヤなの？」

フェイト

「う…」

チルノの今にも泣きそうな目を見て断ろうにも断れず。

マガシ

「ちなみにお前に拒否権は無い」

マガシの言葉によって逃げ場を無くされた。

フェイト

「不束者ですがこれからよろしくお願いします…」

チルノ

「うん！よろしく！！」

そして、フェイトは遂に観念してマガシのチームに入る事になった。チルノは満面の笑みを浮かべてフェイトに抱きつき、フェイトは自分の持っている母性本能に強い刺激を与えた。

こうしてフェイトの新たな人生が始まったのであった…。



第9話後篇『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼』報告編 + 』 (後書き)

どうも飛鳥です。

これにて第9話『機動兵器マガス・マツガーナ破壊依頼編』は終了となります。

今回はクラウチへの報告と憎悪を抱いたなのはと原因となったフェイトの人生の新たな出発となっております。

チルノの登場に驚く方もいらっしゃると思いますが何故彼女がこのグラールにいる理由を設定紹介にて書く予定です。

さて次回はスクリーンチャット集3と外伝を投下する予定です。

では(・・・)ノシ

### スクリーンチャット集3

Chat12 「妙な意気投合」 パーティ解散後の自由時間時

レイ

「まさかあの時の奴らが再び俺達の前に現れるとはな…」

リオン

「フン…。ああいうタイプはしつこいのが相場だろう?」

スバル

「(なんだか空気が重い…)」

レイ

「確かにな…。次に会った時は2度と立ち向かいたくないようにしてやるか…」

リオン

「奇遇だな。僕も同じことを考えていた」

リオン・レイ

「(……………(。|。)b)」

スバル

「(なんかお互いグッジョブしてる!?)」

レイ

「どうやら俺達は気が合うようだな」

リオン

「どうやらそのようだな」

スバル@1人だけおいてけぼり

「(あれ?私だけおいてけぼり?)」

Chat13 「気になった事」 はやてがシズルにグラールの危機を知らせた後

シズル

「そういえばはやてさんは何故次元犯罪者に？」

はやて

「ええっと…管理局を脱走する際に少しでも強力な武器が欲しくてな…」

はやて、少し遠い目をしながら答える

シズル

「それで向こうのロストギアの武器を奪って逃げたと？」

はやて

「そうや…」

シズル

「それってこの杖ですか？」

シズル、部屋に立てかけてある杖を見せる

はやて

「確かにそれなんやけど起動方法が分からなかったんや…」

はやて、恥ずかしそうに後ろの髪をバリバリとかく

シズル

「（ねえカムハーン。これってサイコウオンドだよな？）」

カムハーン

『（うむ…全部で7本あったうち1つが管理局に奪われていたのだから…こんな形で再会するとはな…）』

カムハーン、感慨深げに頷く

シズル

「（でも起動方法が分からなかったって…）」

カムハーン

『（サイコウオンドもそうだがグラールの法撃武器はテクニツクのディスクをあらかじめセットしておかねばまったく効果が出ん。正直宝の持ち腐れだ…）』

シズル、はやてを可哀想な人を見る目で見る

はやて

「え！？私なんか恥ずかしい事言った？」

シズル

「えーと…」

シズル、理由を教えるのをためらう

カムハーン

『お前の持ってきた武器はお前達の世界では宝の持ち腐れだぞ？』

はやて

「え…？」

カムハーン

『テクニツクのディスクを持っていないお前ではタダのガラクタだ』

カムハーン、あっさりはやてがサイコウオンドを使えなかった理由を教える

はやて

「うわーん！！！！」

はやて、シズルに泣きつく

シズル

「よしよし…（まるで子供みたいだ…）」

Chat14 「味を覚えたエミリア」 ローグスの集団との戦闘終了後

エミリア@意地の悪い笑み

「ぬっふっふ…」

リオン

「なんだその気持ち悪い笑みは…」

リオン、エミリアにドン引きする

エミリア

「だってこれ滅茶苦茶強いんだもん」

エミリア、EXスタントラップを見せる

早苗

「確かEXスタントラップっていう名前でしたね」

エミリア

「これがあればどんな敵だってイチコロだよ！」

エミリア、得意気な笑みを浮かべる

シン

「麻痺が利く奴限定だけだな…」

シン、ぱっさりと切り捨てる

エミリア

「~~何~~…?」

エミリア、表情が凍る

レイ

「もっともそれは1つ500メセタもするつえに最大4つしか持てないからな」

エミリア

「うげ…そうだった…」

エミリア、顔が青くなる

スバル

「やっぱり便利な物には裏があるんだね」

Chat15「久しぶりの再会」  
ググ砂漠から撤退している時マ  
イシップ内

chat10「1000年ぶりの

再会」を見ている

ハロルド

『これで出力は1%〜100%まですぐに変更できるようになったわよ』

デймロス

『よしそれでは早苗の援護に』

クレメンテ

『その必要はいらんよ』

デймロス

『クレメンテ老!?!』

ディムロス、クレメンテの声に驚く

ハロルド

『あつクレメンテ老じゃん。久しぶり〜』

ハロルド、特に驚く事もなく会話に参加

クレメンテ

『ハロルドも久しぶりじゃのう。どうやら元に戻ったようで何よりじゃわい』

ディムロス

『クレメンテ老がいると我々の戦力も大きく増したな』  
クレメンテ

『というわけでこれからよろしく頼むわい』

Chat16 「慣れてる?」 パーティ解散後

シャルティエ

『そついえば早苗ってさ...』

シャルティエ、何か思い出したかのように早苗に話しかける

早苗

「何ですかシャル?」

シャルティエ

『早苗って僕達ソーディアンみたいに喋る剣を見てもあまり驚かなかったよね?』

リオン

「確かにそうだな」

デймロス

『我の時も特に驚いた様子は無かったしな…』

リオン、思案にふける

シャルティエ

『僕の場合は坊ちゃんが物心つくが前から一緒でしたから違和感がありませんでしたし…』

早苗、少し考えた後口を開く

早苗

「実は私の居た神社にも喋る剣があつたんです…」

シャルティエ

『へえ。僕体以外にも喋る剣は作られていたんだね…』

早苗

「名前は確か…イクティノスだった筈です…」

リオン・シャルティエ・デймロス・クレメンテ

「……!?」「……」

リオンとソーディアン3振り、表情が凍りつく

早苗

「それで私が仕えていた神の神奈子様がマスターだとイクティノスは言っていましたよ。あと自分の仲間があと5振りあると…」

ハロルド

『イクティノスそんな所に居るんだ』

シャルティエ

『それで僕と初めて会った時も特に驚かなかつたんだね……』



早苗

「私としてはイクティノスの仲間がシャル達だったのにびっくりです……」

クレメンテ

『世の中狭いものじゃのう……』

Chat17「前途多難」 フェイトがチルノのチームに参入した  
直後

チルノ

「とゆるーわけでよろしくね!!」

フェイト

「うん。よろしくね」

マガシ

「足手纏いにはなるなよ?」

チルノ

「何よー!!フェイトお姉ちゃんは絶対強い筈だよ!!」

フェイト

「!?!」

フェイトに電流が走る

マガシ

「フン。ゴ・ヴァーラの大軍に取り囲まれていたではないか」

チルノ

「むー!!でももう一度戦闘になればフェイトお姉ちゃんの強さが分かる筈だよ!!ねえ?フェイトお姉ちゃん!!」

フェイト

「(フェイトお姉ちゃん……フェイトお姉ちゃん……)……………」  
チルノ

「フェイトお姉ちゃん？」

心配そうな表情でフェイトを見つめる

フェイト

「最高に…満足…し…ゲフウ」

フェイト、大量の鼻血を出しながら満面の笑みを浮かべながら気絶する。

チルノ

「わー！？フェイトお姉ちゃんすっかりしてー！！」

チルノ、フェイトの身体を揺すりながら声を掛ける

マガシ

「はあ…。前途多難だな…」

### スクリーンチャット集3（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はスクリーンチャット集となりました。

本編は鬱になりやすいのでスクリーンチャットでは和やかな雰囲気が多いです。

次は設定集と外伝の予定です。

では（．．．）ノシ

## キャラ設定4（前書き）

第9話で所属が変わったり、新たに加わったキャラクターの設定などが書かれています。

特に最後の項目は今後のネタバレになるためそうつたのを嫌う方は閲覧しないことを推奨します。

## キャラ設定 4

### 設定紹介

新キャラ及び所属が変わったキャラ

フェイト・テストロッサ・ハオラウン（19）

チルノのチームに所属する少女。

シンとの戦闘によって心神喪失状態と診断され、執政官生命はおろか管理局員生命も無くなり、フェイトの引き取り手であるハオラウン家で療養することが決まってミッドチルダに戻る為に管理局の人員輸送ヘリでミッドチルダ行きの輸送艦へ護送されている時に現地の大型モンスターに襲撃を受け、ヘリは撃墜、フェイト自身も攫われた。

フェイトは何とか大型モンスターを使つて撃退するも今まで自分がしてきた事の罪悪感に押しつぶされそうになっていた。

その後自身の死を祈りながらあてもなく彷徨っているうちにゴ・ヴァーラの大軍に取り囲まれ、その時に生じた痛みで生への執着が復活する。

そして、フェイトにゴ・ヴァーラの大軍が襲いかかるうとした瞬間、偶然居合わせたチルノに助けられ強制的にチルノと彼女の保護者であるマガシとチームを組むことになる。

尚、チルノの姿を見て母性本能の塊（という名のロリコン）に覚醒してしまっている。

八神 はやて（19）

シズルに拾われた少女。

元はなのが隊長を務めていた機動六課の前隊長。

元々管理局の闇に触れる事が多かったため管理局の正義に疑問を感じ

じていたところに時空管理局の全戦力を上げてのある作戦の内容に触れ、管理局からの脱走を決意、グラールに危機を伝える為にヴォルケンリッターの面々と共に時空管理局を脱走した。

しかし、次元航行艦でグラールまで辿り着いたのまでは良かったが、なのは達の追撃によってはやてたちが乗っていた次元航行艦は轟沈、各々1人用の脱出ポッドで脱出するも散り散りになってしまった。

その後、無一文の状態でタルカス・シティに行き倒れ、シズルに保護される。

そしてグラールの危機を伝えると自分を守ると言ってくれたシズルに心身ともにボロボロだったはやては惚れてしまった。

尚、彼女が次元犯罪者とされた理由は脱走する際に少しでも戦力を欲したはやてがロストギア保管室にあったグラールで作られたロストギア【サイコウオンド】を奪ったため、この【サイコウオンド】もはやてと共にシズルに確保された。

チルノ（4歳@外見年齢13歳）

フェイトをチームに助けた少女。

服装はアドベントチルノの服（マガシ謹製）。

相方であるマガシと共に行動していた所にゴ・ヴァーラの大軍に襲われているフェイトを助け、フェイトを（無理矢理）引き入れ、チームを結成し、チルノはチームのリーダーとなる。

そこそこの体型と子供の眼でフェイトを母性本能の塊（という名のロリコン）に覚醒させてしまった張本人。

見た目とは裏腹に年齢が4歳には理由があるのだが…。

以下ネタバレの為別項目参照。

レンヴォルト・マガシ（70歳）

チルノのチームに所属する男性キャスト。

その正体はエンドラム機関の元隊長にしてかつてグラールを恐怖のどん底にまで陥れた組織【イルミナス】によって生み出されたコピ

ーキャスト。

人格元はイルミナスの長、カール・フリードリヒ・ハウザー。  
暗黒衛星【HIVE】での決戦の後からチルノと共に行動している。  
戦闘狂だがいつも突っ走っているチルノに頭を悩まされている。

ソーディアン・ベルセリオス（ハロルド）

ディムロスと同時期に早苗が拾ってきた剣。

人格元はハロルド・ベルセリオス。

かつては兄が殺された事によって生じた心の傷をミクトランに付け込まれ、リオンから父親を奪い最終的にはリオンの命を間接的に奪ってしまった。

リオンとは色々あったが和解している。

ドがつく程のマッドサイエンティストでグラールに来てからは色々な事象を調べている。

戦闘には参加しないがソーディアンの改造や相手の分析としてサポートする。

ソーディアン・クレメンテ

早苗がマガス・マツガーナの破壊依頼で管理局の面々と戦っている時に発見した剣。

ベルクランとの戦いで消滅した筈だったがググ砂漠に転移していた所を早苗が発見される。

晶術の威力は他のソーディアンの追従を許さない高さである。

晶術の調整はディムロスより上の為、常に最大出力で晶術を行使できるように早苗を戦闘面でサポートしている。

クラッド6で起きた爆発事故の真相

ある程度ソーディアンの晶術の威力を知っていたリオンはディムロスに出力を30%にするようにディムロスと話をつけていた。

当時リオンは早苗の魔力をディムロスの先代マスタースタン・エル

ロンと同レベルと見て訓練を開始した。

しかし、早苗の魔力はリオンの想定以上に高く、スタンはおろかか  
つて戦った幸福を司る神【フォルトウナ】をもはるかに上回る魔力  
を持ち、スタン以上の同調レベル、そして、彼女の使えている2柱  
の神の神力の付加が加わった結果、大爆発が起きた。

9話の終盤で早苗のリバースクルセイダーが管理局員のみを吹き飛  
ばせたのはクレメンテが早苗のサポートをしていた為である。

他のソーディアンの行方

イクテイノス

守矢神社にあり、早苗の仕えている神の片割れである八坂 神奈子  
がマスターをしている。

神奈子との付き合いは神奈子と諏訪子が出会う前からの付き合いで、  
神奈子が守矢神社に居を構えても神奈子の右腕としてすごしている。  
早苗が物心が着く前から面倒を見ていた為早苗はソーディアンのよ  
うな“喋る剣”に慣れている。

アトワイト

現在行方不明。

グラールのどこかにある。

誰かがアトワイトのマスターになった為か現在は常にマスターと共  
に移動している。

現在のマスターは強い魔力を持っており、水、氷の晶術が得意な者  
が持っているらしいが…。



## チルノの正体

チルノの正体は【SEED事変】の時にモトウブの雪山地帯に落下した巨大なSEEDによって産まれたSEEDフォームの亜種。たまたま到着地点に訪れていたマガシ（イーサン戦後）がチルノが中に入ったSEEDを発見、通行の邪魔なので破壊すると中に入っていたチルノはそのまま産まれた姿でマガシの前に排出され、興味を持ったマガシに回収される。

元々の自然の強い場所にSEEDによる侵食で力が強化された結果、チルノが産まれた。

そして、チルノがSEEDフォームの亜種たる所以は

- ・他のSEEDフォームと違い自我がある
  - ・SEEDフォーム特有の破壊衝動が無い
  - ・物質に対して侵食能力を持っていない
  - ・ダークファルスの統制を受けない
  - ・限りなく人間に近い姿をしている
  - ・他のSEEDフォームと違い、コミュニケーション能力を持つ
  - ・ミラージュブラストが使用可能
  - ・SUVウェポンが使用可能
  - ・インフィニティブラストが使用可能
- の9点である。

これは後に現れるダークファルスとシンが深い関わりを持っているからである。



## キャラ設定4（後書き）

どうも飛鳥です。

今回はキャラ設定4となっております。

今回チルノの設定はチルノの設定に自然をつかさどる妖精にしては強すぎるという設定をこの話ではSEEDから産まれた者として解釈させました。

ちなみにこの話での幻想郷にはチルノはいません。

次は外伝となります。

では（・・・）ノシ

サクヤがこうまかんに来て1年のときがすぎました。

このこうまかんにすんでいる人たちはみんないい人です。

とくにレミリアさまにはたくさんのおんががあります。

かじ、りょうり、せんたく、そうじ、もじのよみかき、さんすうどれもレミリアさまがおしえてくださいました。

きょうはレミリアさまがいままでサクヤがはいることをきんしされていたへやにあんないしてくださるそうです。

いろいろなことがあったけれどサクヤは元気にくらしています。

だから早くシンおにーさまに会いたいです。

サクヤの日記366ページ目より

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイド奮闘日記

2ページ目 ～十六夜 咲夜、ガンダムに乗る～

咲夜が紅魔館に来てから1年後 AM・05:50

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア入口前

レミリアに呼ばれた咲夜はレミリアに指定されていた長袖長ズボンの青ジャージ（レミリア謹製）、鉛筆等の筆記用具を持って指定された場所に待機していた。

咲夜@目を輝かせている

「ここから先はいつたい何があるんだろう?」

咲夜が目を輝かせながら入口の周りをウロウロしているとレミリアがやってきた。

レミリア

「む。咲夜か。指定した時間の10分前に来たのだな」

咲夜

「レミリアさま！おはようございます！」

レミリア

「ああ、おはよう。朝から元気なようで何よりだ」

レミリアは集合時間の10分前から咲夜が着ていた事に感心しながら挨拶を返した。

咲夜

「それで、レミリアさま！この先には何があるのですか？」

咲夜は目を輝かせながらレミリアにドアの先にあるものを尋ねるとレミリアは楽しそうな表情をしながら答えた。

レミリア

「今は言えないがお前が見たらきつと驚くものがある場所だ」

レミリアはそう言った後ドアに設置されている機械に懐から取り出したカードを通すと金属で出来た小さな部屋が咲夜の目に映った。

咲夜

「これだけですか？」

レミリア

「まあ待て。この部屋は今から行く場所へ行く為の移動手段だ。さあこの部屋に入るぞ」

咲夜

「はい……」

咲夜は自分が思っていた光景とは別の光景に落胆しながらレミリアに連れられて部屋に入ると先程まで開いていたドアが突然閉まった。

咲夜

「！レミリアさま！！ドアが閉じちゃいましたよ！？」

レミリア

「そう慌てるな。もう少ししたらお前が驚く場所に着くからな」

ドアが閉まったことによつて混乱する咲夜だったがレミリアは部屋に備え付けられている端末を操作すると、ガタンという音がした後、部屋は下のエリアに進んでいった。

3分後 AM・05:53

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリアMS工廠 連絡通路

レミリア

「着いたぞ。ここが今日お前を案内するエリアだ」

体験した事のない経験の連続で頭が混乱していた咲夜はレミリアのいる方向を見るとそこには咲夜にとって初めてみる景色が広がっていた。

咲夜

「うわあ！！すっごい！！！」

咲夜の目に映った景色とは鋼鉄の巨人が並び、たくさんの人（どれも咲夜を娘や妹のように可愛がっている）が所狭しと走り回りたくさんさんの声が聞こえる景色だった。

レミリア

「驚いただろう？あの鋼鉄の巨人が我が紅魔館の最大戦力、MSだ」  
モビルスーツ

MS…それは咲夜のいた世界でも多数製造されていたものである（咲夜は知らないが）。

そして、この紅魔館にあるMSはこの紅魔館が幻想郷の勢力の中でも圧倒的な強さの要因であり、紅魔館の象徴であった。

咲夜

「すごいです！！あのMSはなんと名前なのですか？」

咲夜は鋼鉄の巨人達が並ぶ光景に感動しながら巨人たちの中央にあるMSを指さしてレミリアに尋ねた。

レミリア

「ほう。咲夜はいい目を持っているようだな。あれは私が駆るMS『ガンダム』だ」

咲夜

「『ガンダム』…。かつこいい…」

咲夜は神々しさを放つ白亜の巨人に圧倒されながらも素直な感想を述べた。

レミリア

「咲夜。ガンダムの方は後で案内するから待て。今回の目的はこのエリア全体を案内することだ」

咲夜

「あつ。そうだった…」

咲夜はレミリアが咲夜をこのエリアに連れてきた理由を思い出した。そう。これは社会見学なのである。



一ヶ所ばかりに居てはレミリアは勿論このエリアで働いている人達にも迷惑が掛かるのである。

咲夜は名残惜しそうな目でガンダムを一瞥した後レミリアの後を追った。

その後、咲夜はこのエリアで働いている人々が昼食を食べる食堂などを案内され、最後に咲夜が気になっていたガンダムがあるエリアへ案内された。

約2時間後 AM・08:00

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア MS整備エリア

レミリア

「アストナージ居るか？」

アストナージと呼ばれた男

「はいよ！今行きますぜ！」

レミリアは緑色の作業服を着た男に声を掛けると呼ばれた男は作業を一旦中止してレミリアの許にやってきた。

レミリア

「作業中に済まんな」

アストナージ

「丁度キリが見ついた所なんで問題ありませんぜ。こんなところに油臭いところに何の用ですかい？」

レミリア

「なに、紅魔館の未来のメイドにこのエリアの地理を知ってもらいたくて案内をしていたのだ」

レミリアは一旦言葉を区切るとレミリアの後ろから咲夜がアストナージに挨拶をした。

咲夜

「こんにちは！アストナージおじさん！」

アストナージ

「おお咲夜ちゃんかい。となると咲夜ちゃんが未来のメイドですか  
い？」

レミリア

「ああ。そして咲夜がガンダムに目が行ったらしくてな。最後にこ  
こで働いているお前達に改めて顔見せをしに来たというわけだ」  
アストナージ

「つまりお嬢がなさっている仕事を咲夜ちゃんもするわけですね？」  
レミリア

「その通りだ。もう顔見知りかもしれんが仲良くしてやってくれ」  
アストナージは咲夜が未来のメイドという事に驚きながらも咲夜が  
レミリアの仕事をするという事を確認し、レミリアもそうだと答え  
た。

一方咲夜はというとアストナージが整備をしていたガンダムを見上  
げていた。

レミリアはガンダムを見上げている咲夜が考えている事を見抜くと  
咲夜にある提案を持ちかけた。

レミリア

「咲夜よ。よかったらガンダムに乗って見ないか？」

咲夜

「え…？」

それはガンダムに乗ってみると言う事だった。

これに対して咲夜は呆気にとられるがレミリアは話を続けた。

レミリア

「あのような目でガンダムを見ていたら大体何がしたいか想像がつく。アストナージ、構わないな？」

アストナージ

「はい。お嬢も一緒に搭乗するのですしたら構いませんぜ」

レミリア

「だそうだが咲夜よ、乗ってみるか？」

咲夜

「はい！」

それは咲夜にとって魅力的な内容だった。

そして、咲夜は考える間もなく返事をした。

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア MS工廠 ガンダムコックピット内

レミリアはシートに座ると咲夜を自身の膝の上に座らせ、ガンダムを起動させた。

咲夜

「うわあ……」

咲夜はガンダムのコックピットにある計器に火が入り、見たことない文字が多数浮かび上がる情景に見とれていた。

レミリア

「各部チェック：右マニピュレーター問題なし、左マニピュレーター問題なし、右脚部問題なし、左脚部問題なし、縮退炉問題なし、ミノフスキークラフト問題なし、グラビティコントロールシステム問題なし、各武装問題なし、各センサー問題なし、コンディション

オールグリーン。さすがアストナージだわ。いつもいい仕事をしている」

咲夜@レミリアが口に出していた単語が分からない

「（レミリアさまは何を言っているんだろ？）」

アストナージ

『そう言われると調整した甲斐があったってもんです。丁度第3エレベーターが開いてますんでそいつを使ってくださいえ』

レミリアは自分の機体の専属整備士であるアストナージの仕事に感服しながらMS運搬用エレベーターまでガンダムを移動させた。

レミリア

「レミリア・スカーレット。ガンダム、発進する！」

レミリアがそう宣言するとフットペダルを踏み込み、ガンダムは空へ飛び出した。

10分後

幻想郷第3大陸 紅魔館 上空800m ガンダムコックピット内

レミリア

「咲夜。これが私達の住む紅魔館だ」

咲夜@レミリアの膝の上

「うわ〜！こつまかんがあんなに小さく見える！！」

レミリアはガンダムのメインカメラを操作して咲夜に紅魔館を見せると咲夜は目を輝かせながらディスプレイに映る紅魔館を見た。

レミリア

「咲夜。私はこのまま視察に出るが一緒に来るか？」

咲夜

「はい！レミリアさまにおとしますす！！」

レミリア

「いい返事だ。では、行くぞ！」

レミリアは咲夜にしさつについて来るかと尋ね、咲夜は元気よくついて行くと言った。

それを聞いたレミリアは満足げな笑みを浮かべてフットペダルを軽く踏み込み、ガンダムを飛ばした。

その後、咲夜とレミリアはガンダムで紅魔館が統治しているエリアを見て回った。

13時間後 PM09:00

幻想郷第3大陸 紅魔館 咲夜の部屋

咲夜@疲れて眠った

「スー…スー…」

レミリア@咲夜をベッドに寝かせる

「やれやれ、どうやら自分でも気がつかないうちに疲れていたのか」

レミリアはベッドで気持ちよさそうに寝ている咲夜を慈しむ目で見ていた。

自分が産まれた時、吸血鬼だったがために住む場所を追われ、この幻想郷に辿り着いた。

その後、幻想郷に住む技術者や実力者に頭を下げた弟子入りし、様々な技術を死に物狂いで身に付けた。

そして身に付けた技術でレミリアは現在の紅魔館を作り上げた。

レミリア

「本当にあの時が懐かしいな…」

レミリアが自分の過去に物思いにふけっているとドアをノックする音が聞こえた。

レミリア

「入っていいわよ。フラン」

レミリアはノックをしたと思われる人物に普段のレミリアからは想像できないような口調で語りかけるとレミリアより少し幼い姿の寶石のような翼を持った金髪の少女が入ってきた。

フランと呼ばれた少女

「久しぶりだね。お姉ちゃん。その子が手紙に書いてあった娘なの？」

レミリア

「ええ。名前は十六夜 咲夜。紅魔館の未来のメイドよ」

フランと呼ばれた少女はベッドで寝ている咲夜を見てレミリアに尋ねた。

少女の名はフランドール・スカーレット。

レミリアの妹であり、今から5年前に幻想郷の勢力の1つである永遠亭に留学していた吸血鬼である。

レミリア

「その表情でここに帰ってきたということはフランの望んだ成果が出たみたいね」

フラン

「うん。だから紅魔館に帰って来たの」

レミリア

「そう。貴方の部屋はそのままにしてあるわ」

レミリアはフランに成果を聞くと彼女は満足げな笑みを浮かべて答え、レミリアはフランの部屋はそのままにしてあることを話した。

フラン

「ありがとう。それじゃあ私は部屋に荷物を降ろしてくるね」

レミリア

「ええ。ただし静かに行動しなさいね？」

フラン@咲夜の部屋から出ていく

「わかってるよ。それじゃ、また明日ね」

レミリア

「明日か…。今では明日があると思えるようになったのだな…。さて、私も明日に備えて寝るか」

咲夜@寝言

「おやすみなさいませ…レミリアしゃまあ…むにゃむにゃ」  
レミリア

「ふふつ。おやすみ、咲夜」

フランが咲夜の部屋から出ていくとレミリアもまた咲夜の部屋から出ていった。

翌日 AM・07:45

幻想郷第3大陸 紅魔館

咲夜@寝坊

『ねすごしてしまいました〜!!』

紅魔館全体に咲夜の声が響き渡った。

レミリア@咲夜の朝食を作っている

「まあ、あれだけ疲れていたら寝坊をするのは当然だな」

フラン@<sup>ダイジリン</sup>紅茶を淹れて飲んでいる

「でも、元気のいい娘だね。少しこの紅魔館の空気も良くなったね」

レミリア

「ああ。この紅魔館が明るくなったのはあの娘のおかげよ」

今日も紅魔館の騒がしくも平和な1日が始まるのであった……………。



外伝 サクヤのメイド奮闘日記 2 ページ目 十六夜 咲夜、ガンダムに乗る

どうも飛鳥です。

今回は外伝の第2話となります。

この話で出てきたガンダムや幻想郷の勢力、そして幻想郷については

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2+ で紹介します。

次回の第3話は本編の休息編の終了後に外伝を投稿します。

では(・・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2 + (前書き)

外伝2話に出た人物などの設定があります。

ネタバレを含むのでそういったことを嫌われる方は閲覧されないことを推奨します。

## 外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2+

### 【キャラ設定@登場順】

アストナージ・メツソ（享年39：亡霊歴20年@外伝2話現在）  
紅魔館のMS整備士の男性の亡霊。

シャアの反乱の際に流れ弾で戦死した際のショックで咲夜が紅魔館に流れ着く20年前に同じくシャアの反乱で戦死した恋人のケーラ共々レミアアの統治する幻想郷第3大陸に流れ着く。

流れ着いた後は無名の自動車（技術レベルは第二次世界大戦後の日本レベル）整備士をしていた。

そしてレミアアの領土に流れ着いてから3年後、腕のいい整備士が居るといふ噂を聞いたレミアアにMSの整備士としてスカウトされ、ケーラと共に紅魔館に住む事になった（ケーラはMSパイロットとしてスカウトされる）。

生前からMSの整備士として優秀だったアストナージは僅か1年でレミアアに認められ、彼女の専用MS『ガンダム』の専属整備士となった（アストナージが来るまではレミアアが自分で整備していた）。

咲夜が紅魔館に住むようになってからは彼女を自分の娘みたいに可愛がっている。

性格は普段は温厚で咲夜もすぐ懐いた。

MSの整備技術はまさに職人である（その点がレミアアに認められる一因となった）。

悩みは亡霊となったので自分とケーラの子供を産めない事。

フランドール・スカーレット（485歳@外伝2話現在）

紅魔館の主であるレミアアの妹。

レミアアと同じく吸血鬼である。

幻想郷最新の医療技術を持つ永遠亭に留学していた。能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。

かつては気が触れていると言われるくらいに情緒が不安定だったが、咲夜が紅魔館に流れ着く50年前に起こったある事件によって自分の力のせいでレミリアを殺しかけた事を後悔し、とある仙人の下での精神修行の末に落ち着いた性格になり、またこの事件を契機に医学を志すようになった。

咲夜が紅魔館に来る4年前に丁度留学生を募集していた永遠亭に留学し、幻想郷最新の医療技術を学び、首席で卒業し、紅魔館に帰ってきた。

紅魔館に帰ってきてからは学んできた医学を生かす為に紅魔館専属の医者となる。

家事レベルは並みより上。

咲夜の事は時折届いていたレミリアの手紙である程度は知っていた。スタイルはそこそいい（本編に登場するスバル並み）のだが、姉であるレミリアがスタイル抜群のためコンプレックスになっている。

#### 【兵器】

ガンダム（RX78）

レミリア専用のMS。

異世界（の世界）の遺跡にあったデータを基にレミリアが製作したMS。

姿と名前、型式番号こそはU・Cの一年戦争で伝説的な戦果を上げたMS『ガンダム』であるが中身はまったく別物である。

しかし、ガンダムの名に恥じない高性能なMSとなっている。

装甲素材 ルナ・チタニウム（ガンダムXの世界のもの）

MSの骨格 ムーバブルフレーム採用

コックピット形式 コアブロックシステムを採用

エンジン 縮退炉

備考 ミノフスキークラフト搭載

サイコフレーム搭載

レミリア謹製学習型コンピューター搭載

グラビティコントロールシステム（パイロットへのGを軽減するシステム）

### 【世界観】

幻想郷

咲夜やレミリア達が住む多種多様な種族が共存する世界。

元は日本の一部だったが、ある事件で独立した世界となり、その際に広大な世界となった（大きさは地球と同じ）。

全部で8つの大陸に別れており、8つの勢力がそれぞれの大陸を統治している。

時空管理局に察知されていない珍しい世界でもある。

代表責任者は八雲 紫。

### 【勢力】

幻想郷第3大陸

拡大した幻想郷で3番目に見つかった大陸。

咲夜達が住む大陸。故郷を追われたレミリアとフラン（咲夜が紅魔館に流れ着く471年前）や住む世界で死亡したアストナージとケーラが流れ着いた（咲夜が紅魔館に流れ着く20年前）大陸である。大きさとしては最も面積が狭い（地球のオーストラリア大陸位）が四季と自然に恵まれており鉱物資源も豊富、ここでしか手に入らない鉱物も多数存在し、異世界（の世界）の遺跡があり、ここにあったデータでガンダムが作られた。

また、技術者が最も集まる大陸である。

そのためかつてはここに住む技術者や土の下に眠る鉱物資源を狙って永遠亭をはじめとする巨大勢力が侵攻をされたが、レミリアが結成した当時の義勇団の者達が駆るMS隊の活躍によって侵略者を撃

退した（咲夜が紅魔館に流れ着く45年前）。その後、当時義勇団の隊長であったレミリアがこの大陸にすむ住人の願いで第3大陸の統治者となった（咲夜が紅魔館に流れ着く40年前）。

現在は幻想郷で最も平和な大陸である（ただし軍事力も最強）。統治者はレミリア・スカーレット。

## 紅魔館

幻想郷第3大陸を統治しているレミリアが住む屋敷。

幼稚園〜大学までの教育機関も兼ねている（学費は全額紅魔館負担）。

学生、技術者、武芸者が集まる場所。

咲夜や美鈴、フラン等がここで生活している。

保有戦力は幻想郷最強と言われており、保有MSは60機（専用機は除く）。

全部で8つのブロックがあり、全部を見て回るには最低1週間はかかる。

また、耐神構造を採用しており、フランが中でいくら大暴れしても絶対に崩れることのない程頑丈にできている。

ブロックは以下の通り。

3階中央エリア：主に作戦会議などを行うエリア

3階東エリア：主に幻想郷中の情報を収集しているエリア

3階西エリア：講義に使われる部屋が集中しているエリア

2階中央エリア：レミリアのプライベートスペース

ここで咲夜に色々な事を教えている。

2階東エリア：紅魔館に仕える者が寝泊まりする部屋が集中しているエリア

咲夜、美鈴、フランの部屋はこのエリアにある。

2階西エリア：学生達の寮の役割を持つエリア（宿泊費は0）

1階中央エリア：フードコート

様々な料理店が立ち並んでいる。

1階東エリア：主に紅魔館に仕える者が訓練を行うエリア

咲夜や美鈴もここで戦闘訓練をしている。

1階西エリア：主に学生達の運動場の役割を持つエリア

B1東エリア：特定の人物しか入る事が許されないエリア

MSの生産工場と整備ベッドがある。

ここに紅魔館の平和を支えるMSが生産、整備されている。

B1西エリア：大図書館があり、ここに資料を借りに来る学生達で賑わっているエリア

幻想郷第2大陸

拡大した幻想郷で2番目に見つかった大陸。

気候は穏やかだが鉱物資源に恵まれていない。

幻想郷で最も医療技術が高い大陸である。

統治者は八意 永琳。

永遠亭

幻想郷第2大陸にある屋敷。

保有MSは30機

医学を志す者が集まる場所であり、フランもここに留学し、首席で卒業した。

最高責任者は鈴仙・優曇華院・イナバ。

#### 【その他】

レミリアとフランの間に起こった事件

咲夜が紅魔館に流れ着く50年前に起こった。

当時戦争ムードが高まりつつあった幻想郷第3大陸で当時の人々は心が荒んでいた。

フランもその例外にもれず、侵攻してきた永遠亭の兵士にレミリア

を傷つけたことによって暴走、レミリアはフランの暴走を止める為にフランと戦った結果レミリアは瀕死の重傷を負い、さらにフランの能力で吸血鬼としての力を破壊されつくしてしまう。

レミリア自身は学んでいた魔術で肉体を再生させるが再生できたのは肉体のみでフランの能力で破壊された吸血鬼としての力は再生できなかつた。

そのためレミリアは吸血鬼の高い身体能力が無くなり、空も飛べなくなつた。

最も悪いことばかりではなく吸血鬼としての能力が破壊されたことにより吸血鬼の弱点である太陽光・流水・銀器・ニンニク等が克服された。

しかし、フランはこの時の自分を恥じてとある仙人のもとで精神修行をし、安定した精神を持てるようになった。

また、フランはこの事件を契機に医者になる事を志望し、紅魔館にある資料である程度医学を学んだあと、留学生を募集していた永遠亭に留学した（咲夜が紅魔館に流れ着く5年前）。

種族”亡霊”について

主に紅魔館の整備士のアストナージ・メッソがこれにあたる。

体温は常人よりも多少低いが肉体を持ち姿は死ぬ直前の姿になる。

食事は可能。

亡霊なので寿命は無い。

ただし痛覚はあるので痛みはある。

また、子供を産む事ができない。

耐神構造について

その名の通り神が建物の中で戦闘が行われることを想定して設計された構造。

魔術と建築技術の応用で神々が戦闘を行っても耐えられる構造になっている



この構造を採用しているのは紅魔館のみである。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介2 + (後書き)

どうも飛鳥です。

今回は外伝2話に登場したキャラの設定とでてきた単語の説明となつていきます。

では(・・・)ノシ

## 第10話「宴会」酒は飲んでも呑まれるな」

最初に早苗の精神を感応した時儂は儂のマスターであったフィリアを思い出した

気弱そうな外見じゃが、芯はしっかりしておる

本当にフィリアに似ておった…

もう一つ驚いた事じゃが、この娘は自分が好いておる者がなんとリオンであったことじゃ

シャルティエから話を聞いておったが儂もこの娘の恋が成就してほしいと願っておる

早苗

「クレメンテ。この晶術はどのように使えばよいのですか？」

クレメンテ

『この晶術は…そうじゃのう…』

さて、儂も今一度老骨に鞭を撃つてこの若きマスターの手助けをす  
るとしようかのう…

交錯戦記 C R O S O F D E S T I N Y

「世界を駆け巡る者達」

第10話「宴会」酒は飲んでも呑まれるな」

S i d e シン

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

パーティ解散から3日後

ドン・タイラーの依頼を完了し、パーティを解散してからシンは次の依頼に備えて新たな武器を製作していた所にチェルシーから連絡

事項があるから来てほしいと通信があったので来ていた。

シン

「宴会…ですか？」

シンは面食らった顔で復唱するとチエルシーは笑顔で理由を答えた。

チエルシー

「そうヨー。今回は大きな依頼だつタシ、カーシユ族の子も目を覚ましたカラ宴会を開こうつテ、シャツチヨサンが言つてタヨ！」

シン

「それで俺からスバル達に『宴会があるから参加しろ』って連絡しろと言つ事ですか？」

シンは少し不機嫌になりながら頼まれた事を復唱した。

シンが不機嫌なのにも理由がある。

前回の依頼で早苗の使っているセイバー（ディムロスが炎属性の為、炎に対して耐性がある敵には氷属性のセイバーをしようとしており、壊れたのがそのセイバー）やエミリアが使っているダガーがググ砂漠の環境に耐えられずに故障したのである。

本来なら劣悪な環境に強いテノラ・ワークス社の武器を購入すれば済むのだがテノラ製は使い手を選ぶ武器が多く、接近戦では初心者  
の早苗やエミリアでは戦闘にも影響されるためシンは2人の武器を製作していたのである。

そして、その武器がやっと完了となる直前で呼び出され、しかも呼び出された理由が伝書鳩がわりなのである、シンでなくても機嫌が悪くなるのは当然である。

チエルシー

「よろしくネー」

シン

「わかりましたよ…ったく…」

シンは不機嫌ながらもスバル達に連絡事項を伝える為にスバル達を招集した。

Side out

チエルシーからの伝言依頼から5分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

レイ

「宴会だと？」

シン

「そういうことだ」

リオン

「まったくそんな事を伝える為に僕達を呼んだのか？」

シャルティエ

『坊ちゃん…』

シン

「俺だって好きでやってるわけじゃないさ…」

レイ

「いつもお前ばかりにまかせてすまないな…」

シンに呼ばれた理由が宴会に参加しろということに不満を漏らすリオンと伝書鳩代わりにされたシンをいたわるレイに対し女子組はというと

エミリア

「宴会キタ（・）（・）！！！！」

ミカ

『ふふ。楽しそうですねエミリアは』

早苗

「私、宴会なんて初めてですから楽しみです！」

デイルロス

『ハメを外し過ぎるなよ？』

クレメンテ

『ホツホツホ。なに、宴会くらいそれくらい騒がねば損じゃよ』

ハロルド

『まて。あたしにはあんまり関係ないんだけどね。ソーディアンだし』

スバル

「よーし！一杯食べるぞおー！！」

大盛り上がりだった。

そしてカーシュ族の少年が目を覚ましたという朗報にまったく気が付いていない女子組だった。

伝言完了から3時間後

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

クラウチ

「というわけでウチの新人チームの功績を称えて…乾杯だぜ！！」  
女子陣

「乾杯！！」

宴会の始まったリトルウイング事務所の状況は

エミリア@酔っ払い

「もう1本持ってこーい！！」

早苗@爆睡

「むにゃむにゃ…神奈子様あ私はあ元気に生きてますう…むにゃむにゃ…」

スバル@素

「ガツガツ…こりゃウマイこりゃウマイ…おかわり！」  
カーシュ族の少年@同上

「うん！これは美味しいぞ！」

リトルウイング社員A@酔っ払い

「二日酔いが怖くて酒が飲めるか…！」

リトルウイング社員B@出来あがつてる

「酒が飲める飲める飲めるぞ〜酒が飲めるぞ〜」

リトルウイング社員C@絡み酒

「ああん！？私の酒が飲めないのか！？」

リトルウイング社員D@酔っ払い

「WRYYYYYYYYYYYYY！！！」

シン・リオン・レイ

「…どうしてこうなった…」「」

カオスになっていた。

そして、カオスなこの状況に耐えきれなくなったシン達は

リオン@早苗を御姫様だっこしている

「冗談じゃない！さっさと帰るぞ！」

レイ@飲み物と食糧を確保した

「飲み物と食糧は確保したぞ」

シン

「よし。逃げるぞ！」

このカオスな事務所から逃げ出した。

宴会開始から10分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋  
カオスな宴会場から逃げ出したシン達は一番広い部屋を持っている  
シンの部屋で同じく逃げ出してきたバスク達と改めて飲み会をして  
いた。

バスク@シンが持っているコップに酒を注ぐ

「こうして酒を酌み交わすのは初めてだな」

シン@スバルは放置

「そういえばそうですね。っと、ありがとございます」

クノー@レイのコップに緑茶を注ぐ

「こうして酒を酌み交わす事ができたのも何かの縁だ。共に楽しもう」

レイ@エミリアは見捨てた

「ええ。こうやって楽しむのもありですね」

リオン@早苗をベッドに寝かしてきた。

「まったくあいつらは静かに酒も飲めんのか？」

トニオ@逃げ出してきた

「おう。御苦労さん。俺達は俺達で楽しもうぜ？」

リイナ@同上

「そうそう。酒の楽しみ方は人それぞれってね！」

その後、シン達はリトルウイング事務所とシンの部屋でそれぞれの  
宴会を楽しむのであった。

翌日

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

クラウチ@酒を飲む量を調整していたので平気

「よう。お前ら。昨日は楽しめたか？」



クラウチに呼び出されたシン達はクラウチに宴会は楽しめたかと尋ねた。

実は大きな依頼を成功させたから宴会をしたのではなく、ここ数日激務続きだったシン達に息抜きも兼ねて行ったものである。それに気がついたシン達は思い思いの言葉を口にした。

スバル@料理ばかり食べていたので平気

「楽しかったです！」

早苗@すぐに酔いつぶれたので平気

「途中から記憶は無かったですけど楽しかったです」

シン@退避していたので平気

「ええ。俺達の為に態々ありがとうございます」

レイ@同上

「俺達は俺達で楽しめました」

リオン@同上

「普段はああいう馬鹿騒ぎは好きじゃないが…悪くなかった」

クラウチ

「そうかそうか！なら宴会を企画した甲斐があったってもんだぜ」

シン達の感想にクラウチは上機嫌で頷いた。

シン達はしばらく和やかな雰囲気だったがリオンの言葉である問題に直面することになった。

リオン

「が、この惨状をどう処理するかが問題だな…」

シン達が周りを見回すと

エミリア@二日酔い

「うげー…気持ちわるー…」

リトルウイング社員A@同上

「頭があ……」

リトルウイング社員B@同上

「ぎもぢわる〜」

リトルウイング社員C@同上

「世界がメリーゴーランドのように回ってる〜」

リトルウイング社員D@同上

「あ、頭がこ、この私が……」

シン

「……………」

レイ

「……………」

早苗

「……………」

スバル

「……………」

クラウチ

「……………」

シン達の周りの状況…それは二日酔いになったリトルウイング社員（エミリアも含む）が床で倒れている惨状であった。

シン

「とりあえず…今日の活動は休止ですね」

クラウチ

「だな……」

結局リトルウイングが再び活動を始めたのは宴会から3日後だった。

教訓

レイ  
「『酒は飲んでも呑まれるな』だな……」

第10話「宴会ゝ酒は飲んで呑まれるな」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は休日編その1です。

この話は基本的にシリアスな最後ばかりだったので今回はギャグ的な才手になりました。

次回は休日編その2となります。

では(・・・)ノシ

## 第11話「早苗とエミリアの新たな武器と新たな依頼」

僕は騒がしいのが嫌いだ

宴会と言ってもただ騒がしいだけだと僕は思っていた

シンから宴会に参加しろと言われた時は嫌がったが早苗の後押しで僕も参加した

しかし、この前行われた宴会は僕の思っていた宴会とは違った

あのような雰囲気は今まで体験した事がない

もしかしたら僕もあいつらと共に戦っていたらあのような宴会を体験したのだろう

あの時の宴会は僕にとって忘れられない思い出になった  
だから…

早苗

「リオンさん？どこか具合が悪いのですか？」

リオン

「いや、なんでもない」

早苗

「それならいいですけど…」

またあのような宴会をまた楽しむ為にも今を生きなければならんな…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

〈世界を駆け巡る者達〉

第11話「早苗とエミリアの新たな武器と新たな依頼」

S i d e シ ン

宴会から4日後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋  
あの宴会から4日経ち、リトルウイングも営業再開していた。  
スバル達は新たな依頼に備えて休暇を楽しんでいた。  
そんな中シンはリオンとレイ、デймロスから依頼されていたある  
物を作っていた。

シン

「ふう…とりあえずはこんな感じか…」

シンは呟きながら眼下にある1振り金色の剣と2丁の銃、そしてセイバーらしき武器の柄を見ていた。

シンが作っていた物…それは早苗とエミリアの新しい武器であった。  
元々はもっと早く完成する予定だったのだが4日前の宴会で完成が  
間延びしていたのである。

シン

「久しぶりに武器製作をしたけどうまくいったな」

シンは自分の仕事に満足しながらシンに武器の製作を依頼した3人  
を呼びだすのであった。

S i d e o u t

10分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 ブリーフィングルーム  
シンに依頼していた武器ができたという連絡が入り、シンに武器製  
作を依頼したりオンとレイとデймロス（リオンが晶術の修行はク  
レメンテに任せてある）が来ていた。

シン

「3人共、待たせたな。一応これがあいつらの新しい武器だ」

リオン達が来る前からブリーフィングルームに来ていたシンは先程完成させた1振りの剣と2丁の銃を見せた。

レイ

「?シン。俺はあいつのダガーを作ってほしいと頼んだんだが?」

レイは手に取った2丁の銃を訝しげに見ながらシンに言うとシンは少し笑いながらレイに答えた。

シン

「とりあえずダガーを使っているとイメージしてみてください」

レイ

「?こっか?」

レイはシンに言われたとおりにダガーを使っているイメージを頭に思い描くとカートリッジの部分からビームでできた刃が生えていた。

レイ

「成程。銃としての機能とダガーとしての機能を両立させたのか」

シン

「エミリアはまだ戦況に応じて武器を変えるのができないからな。

だったら両方の機能を持たせてみたら?と思っただけけど...どうだ

?」

レイ

「想像以上にいい仕上がりだ。感謝する」

シンは自信満々にレイに尋ねるとレイもシンの製作した武器を満足気に頷いた。

レイが武器の確認を終えた事を確認するとリオンもまたシンが製作した剣について尋ねた。

リオン

「見た目はタダの金色の剣だがこれにも何かあるのだろうか？」

シン

「ああ。これは…」

デймロス

『な！？何故この金属がこんな所に！？』

リオンに疑問にシンが答えようとするとデймロスが途中で遮った。

リオン

「どうしたデймロス。騒がしいぞ」

デймロスが突然話を遮った事にリオンは咎めるが次のシャルティエの言葉でリオンもまた動揺した。

シャルティエ

『いえ。デймロスが驚くのも無理はありません。この剣…ベルセリウムで出来ています』

リオン

「なんだと！？あの金属は僕達の世界にしか無い筈だ！」

そう。リオンが持っている剣はソーディアンの構成している金属であるベルセリウムで出来ているのである。

デймロス

『更にコアクリスタルも付けられている。シン、お前はどうかやってこの2つを手に入れた？』



デймロスはシンに対して警戒の色を強めながら問うと、返答はあっさり返ってきた。

シン

「ハロルドに作ってもらった」

デймロス

『なにい！？あいつはソーディアンだぞ！？動けるわけが…』

シン

「詳しく言うとベルセリウムはハロルドがどつからともなく召喚して、コアクリスタルはハロルドに教えてもらいながら作った」

デймロス

『……………』

シャルティエ

『ハロルド…何やってるんだよ…』

リオン

「素材に関しては大体わかったが機能はどうなんだ？」

シンの返答にデймロスとシャルティエはハロルドのフリーダムさに呆れながら溜息をついた。

リオンはこのままでは話が進まないと判断して話題をこの剣の機能に変えた。

シン

「一応普通のセイバーと同じように使える」

リオン

「それは普通だな」

シン

「だけど今の俺達には水・氷の属性攻撃ができるものが無いから水と氷の晶術が使えるようになってる」

リオン

「成程。いい出来だ。これで当面の問題は解決できたな」

リオンはシンの製作した武器の能力に満足するとひとつ気になったことがあった。

リオン

「この武器の名をなんというんだ？」

レイ

「それは俺も気になっていたところだ」

そう。2人が気になっていた事はシンの製作した武器の名前だった。シンもその事を思い出して2人に武器の名前を教えた。

シン

「ああ。例の方は右手に持っているのがアル・クアーレで左手に持っているのがエル・クアーレ、リオンの持っている剣はエルシデイオン・レプカだ」

シンがリオンとレイに武器を渡してから2日後

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

新たな依頼が来るまでそれぞれ休暇を楽しんでいたシン達だったがクラウチから緊急の連絡があると呼び出されていた。

クラウチ

「おう。来たか」

シン

「なんでも急を要する依頼と聞きましたけど…また俺達を指定した依頼が来たんですか？」

シンはクラウドに自分達を指定した理由を見抜き、クラウドに依頼内容を尋ねるとクラウドは少し考え込んだ後、口を開いた。

クラウド

「察しがいいな。今回呼んだのは他でもねえお前ら指定で依頼をしたいっていうある有名企業からだ」

エミリア

「有名企業？」

クラウド

「ああ。お嬢さん、入ってきてもいいぜ」

シン

「！」

クラウドは社長室にコールすると社長室から1人の少女が1人の男を伴ってシン達の前に歩いてきた。

そして、シンはその少女と彼女の供をしている男を見て警戒心を露わにした。

スバル

「シン？」

クラウド

「ん？何だ知り合いか？」

シンの様子がおかしい事に気がついたスバルとクラウドはシンに問いかけるがシンは一気に少女との間合いを詰めると少女の服の胸倉を掴んだ。

レイ

「シン！？」

???????

「主！貴様！！」

スバル

「ちよっ！？シン！？」

リオン

「おい！何をしている！？」

早苗

「あわわわわわ……」

エミリア

「えっ？ちよっ！？何！？どうなってんの！？」

クラウチ

「お、おい！どうしたってんだ！？そのお嬢ちゃんは今回の依頼のメッセンジャーなんだぞ！？」

シンのいきなりの行動にシンとシンに胸倉を掴まれた少女以外の者が全員シンを咎めたがシンは周りに構わず叫んだ。

シン

「八神 はやて！ヴォルケンリッターの守護獣！こんな所に何しに来た！？」

シンに胸倉を掴まれた少女：はやてはさして動揺せず自分がここにいる理由を話した。

はやて

「私はインヘルト社のメッセンジャーとしてここに来ました。今回私が派遣されたのはインヘルト社からの依頼とシン・アスカ。貴方に『ある人』からのメッセージを伝えに来たのです」

シン

「……………」

シンははやてが真剣な表情をしている事に気がつく胸倉を掴んでいた手を離した。

そして、シンから解放されたはやてはインヘルト社の依頼内容の説明を始めた。

それは新たな異変の幕開けを意味していたのだった…。

第11話「早苗とエミリアの新たな武器と新たな依頼」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は休息編その2となっております。

今回シンが作った武器は次回から早苗とエミリアが使うこととなります。

次回からはインヘルト社からの依頼とシンの旧友との再会編となります。

では(・・)ノシ

さくやがこうまかんに来てあれから2年がたちました。  
あれから色んなことをすることができました。

最近はレミリア様の妹様であり、こうまかんでお医者さんをしてい  
るフラン様からかんたんなものですけど医じゅつをおそわりました。  
このこうまかんにきてから楽しい日が続いています。

シンおにーさまがこのこうまかんに来てくれればもつと楽しくなる  
と思います。

だから早くシンおにーさまに早く会いたいです。

サクヤの日記731ページ目より。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイ  
ド奮闘日記

3ページ目前編 十六夜 咲夜、アーリア村で御使いをする

咲夜が紅魔館に来てから2年後 AM・7:20

幻想郷第3大陸 紅魔館 レミリアの私室前

咲夜はレミリアに呼ばれてレミリアの私室に来ていた。

咲夜@メイド服(レミリア謹製)

「レミリア様によばれてきたけど…今日は何があるのかな?」

咲夜は今日何が起こるのだろうとドキドキしながら待機していると  
レミリアの私室のドアが開いた。

レミリア

「む、咲夜か。指定した時間よりも10分早いな。感心したぞ」

咲夜

「おはようございます！レミリア様！今日は何のごようですか？」  
レミリア

「ああ、おはよう。そうだな…詳しい話は部屋の中である」

咲夜は自分がレミリアの部屋に呼ばれて来たのかと尋ねるとレミリアは自分の部屋に咲夜を入れた。

5分後 AM・07:25

幻想郷第3大陸 紅魔館 レミリアの私室

レミリアに部屋の中へ通された咲夜は部屋にあった椅子に座って待っている。レミリアに用があつてきていたフランが咲夜に話しかけてきた。

フラン@今日は休み

「あ、咲夜だ。おはよう」

咲夜

「おはようございます！フラン様！」

フラン

「うん。子供は元気なのが一番だよ」

レミリア

「あらフラン。来ていたのね」

咲夜

「あ、レミリア様」

フランは咲夜が元気に挨拶するのを感じしていると3人分の紅茶を淹れたティーポットとティーカップ、カスタードプリンの入ったカップに乗せたトレイを持ったレミリアがやってきた。

フラン

「この香りはキャラメルフレーバーね」



咲夜

「キャラメルフレーバー？」

レミリア

「フレーバーティーの一種だ」

フラン@もう食べている

「タハニルナのティーバッグを使うと楽に淹れられるよ」

レミリア

「プリンの甘さとキャラメルの甘く香ばしいフレーバーは相性抜群だ」

咲夜@メモ帳を取り出してメモを取っている

「（プリンに会う紅茶はキャラメルフレーバー。シンおにーさまに淹れてあげたら喜んでくれるかな？）」

レミリアは咲夜がメモを取り終え、プリンを食べ終えたのを確認すると本題に入った。

レミリア@洗い物はもう洗った

「咲夜。今日お前を呼んだのはメイドの見習いとしての初仕事を用意した」

咲夜

「さくやの初仕事ですか？」

レミリア

「ああ。その初仕事だが…」

咲夜は緊張しながら自分のメイドとしての初の仕事を唾を飲みながらレミリアが口を開くのを待った。

そして、レミリアが言った咲夜の初仕事は

レミリア

「咲夜。お前には私が渡すメモに書かれた物の買い出しをしてもら

う

咲夜の初仕事…それはお使いであった。

レミリア

「現地までは私と美鈴も同行するが現地に着いたら私は仕事に回る。咲夜はそれまでの間にこれに書かれた物を買ってきてもらう」

咲夜

「はい！頑張ります！！」

レミリア

「うむ。いい返事だ。では現地まではガンダムで向かう。もう準備ができているならすぐに出発するぞ」

フラン

「頑張つてね咲夜」

咲夜

「はい！」

元々外に出る為の準備を済ませてレミリアの私室まで来ていた咲夜はガンダムの置いてあるMS工廠に向かうレミリアの後について行った。

35分後 AM・08:00

幻想郷第3大陸 紅魔館地下東エリア ガンダムのコックピット内

レミリア

「各部チェック…コンディションオールグリーン」

咲夜@レミリアの膝の上

「あのレミリア様」

咲夜はここに来るまでに見かけたあるものが気になったのでガンダ

ムを起動させたレミリアに咲夜が尋ねた。

レミリア

「どうした咲夜？」

咲夜

「レミリア様のガンダムと同じような顔のMSがあったのですがあれはだれのMSですか？」

咲夜はそう言いながらガンダムのディスプレイに映っている1機のMSを指さした。

レミリア

「ああ。あれは美鈴のMFだ」  
モビルファイター

咲夜

「MF？」

咲夜はレミリアの言った単語が出てレミリアに問うとレミリアが答える前に通信回線から咲夜にとって馴染み深い声が聴こえた。

美鈴@noteファイティングスーツ

『これは私のMFであるシャイニングガンダムだよ。咲夜ちゃん』  
咲夜

「美鈴お姉ちゃん！？なんでそこに？」

美鈴@レミリアが外に出る時はたまに護衛としてついていく

『私はお嬢様の護衛としてついて行く時があるの。そしてこの機体はつい先日アストナージさんが仕上げてくれたの』

咲夜

「つまり美鈴お姉ちゃん専用の機体なんだね」

美鈴

『そういうこと。そういえば咲夜ちゃんと一緒に紅魔館の外に出る

のは初めてだったね』

咲夜

「はい！よろしく願いします！」

レミリア@暇になったので計器を調整していた

「美鈴も準備できたようだな。では出発するぞ」

咲夜と美鈴の会話がひと段落したのを確認するとレミリアが話の中に割って入り、咲夜と美鈴は話を一旦中断した。

美鈴

『紅美鈴。シャイニング！行きますよ！！』

レミリア

「レミリア・スカーレット。ガンダム。発進する！」

美鈴とレミリアはそれぞれのフットペダルを踏み込み、機体を発進させるのであった。

1時間後 AM・09:00

幻想郷第3大陸 アーリア村

ここはアーリア村。

幻想郷第3大陸にある小さな村であり、故郷を追われたレミリアとフランが流れ着いた村である。

レミリア

「着いたぞ。ここがアーリア村だ」

咲夜@目を輝かせている

「うわ〜！」

レミリア

「では咲夜。私と美鈴はこの先にある村長の家に行くが買い物の方は任せたぞ？」

咲夜

「はい！まかせてください！！」

アーリア村の入り口に辿り着いた咲夜はここでレミリア達で別れて行動することになり、店のある場所に走っていった。

S i d eレミリア

咲夜と別れてから10分後 AM・09:10

幻想郷第3大陸 アーリア村 村長宅前

レミリア

「半年ぶりに来たがやはりここは紅魔館とは違った安らぎがあるな」

美鈴

「そういえばお嬢様にとってここが始まりの地でしたね」

レミリア

「ああ。今でもこうしてちよくちよく顔を出している」

レミリアは過去の思い出に浸っていると咲夜と同じくらいの少女が走ってきた。

少女

「あっ！レミリアのお姉ちゃんだ！」

レミリア

「む、魔理沙か。ひさしぶりだな。元気になっていたか？」

魔理沙と呼ばれた少女

「うん！みんな元気だよ！」

レミリア

「そうか。なら私も用事が終わったら顔を出すとしよう」

魔理沙

「本当！？じゃあみんなにも言ってくる！」

レミリアに魔理沙と呼ばれた少女はレミリアが顔を出すとつと目を輝かせながら目の前にある建物の中へ入っていった。

美鈴

「お嬢様。今の娘は？」

レミリア

「ああ。この先にある孤児院の子供だ。私とフランも一時期その孤児院で世話になっていた」

レミリアはこの村を出て以降も度々この村に顔を出し、この村の住人はやってくるレミリアを温かく迎え入れていた。

そして、今回レミリアがアーリア村にやってきたのは今から1年後に行われる大収穫祭にレミリア達も参加する事を伝える為に来たのである。

レミリア

「さあ。私達も私達の仕事をすぞ。美鈴」

美鈴

「はい。お供します」

レミリアと美鈴はまずは己の仕事を終わらせる為にアーリア村の村長の自宅前に立つのであった。

美鈴

「お嬢様」

レミリア@呼び鈴を鳴らす

「どうした美鈴？」

美鈴

「咲夜ちゃんにどのような物を買に行かせたのですか？」

レミリア

「セージとよく熟れたトマトと卵だ」

美鈴@滝汗

「何気に難易度が高いですね……」

レミリア

「あいつなら問題ないだろう。さ、中に入るぞ」

美鈴

「（咲夜ちゃん。大丈夫かなあ？）分かりました」

Side out

Side 咲夜

同刻 AM・09:10

幻想郷第3大陸 アーリア村 八百屋

一方美鈴が心配していた咲夜はというと…

店主

「おや？お嬢ちゃん御使いかい？」

咲夜

「はい！しんせんタマゴとれたてセージとよくうれたトマトをください！」

店主@売れているトマトと勘違い

「おう！俺の店で一番売れているトマトだ！安くてウマイ！って人気なんだぜ！」

咲夜@熟れているトマトが欲しい

「あの…えと…（どうしよう…。レミリア様のメモに書いてある”うれてる”とは違う気がする…。でもサクヤはその字がわかりません…）」

絶賛ピンチになっていた。

そう。レミリアのメモに書いてある”うれている”という意味は”売”ではなく”熟”という意味である。

咲夜もその意味は知っていたがいざ字に書こうとしてもどんな字かは知らないのである。

咲夜はレミリアの期待に添えなくなると思って涙目になっているとそこに1人の男性がやってきた。

白のTシャツに黒いジーンズを穿いた茶髪の男性

「ちよつと失礼するよ」

店主

「おや。ステッペンの旦那！今日は何を御所望で？」

ステッペンと呼ばれた男@この店の常連

「そうだね…。今日の朝採れたよく熟れた完熟トマトを100個と新鮮なセージを100枚。あと朝採れタマゴを100個頼むよ」

店主

「あいよ！全部で30・000フォルになりますぜ！いつも御買い上げありがとうございます！」

咲夜

「あ、あの！」

咲夜はたくさん買っただなあと思っていたが彼が注文していたものは全てレミリアのメモに書かれていたものと同じだったため自分も同じ物を買ってもらおうと思っただけで店の店主に声を掛けた。

店主

「ん？どうしたんだい嬢ちゃん？」

咲夜

「サクヤにもあの人と同じものを3つずつください！」

店主@咲夜の表情に合点がついた

「おうよ！全部で150フォルだ！」



咲夜

「あれ？あの人と同じものだから300フォルになるんじゃない？」

店主

「お嬢ちゃんが頑張って御使いしてるから俺からのオマケだ！」

咲夜

「ありがとうございます！」

咲夜は店主に頭を下げたあと集合場所であるアーリア村の入り口へ向かおうとすると先程自分に助け船を出してくれた男を見つけ、お礼を言おうと思ひ、軽トラに荷物を載せている彼に話しかけた。

咲夜

「あ、あの！」

ステッペン@荷物を積み終える

「うん？君はあの店に居た子だね？」

咲夜

「はい！こつまかんのメイドみならいのいざよいさくやです！」

ステッペン

「さくや？…ああ！君が彼女の言っていた咲夜か！」

咲夜

「かのじょ…？あのなんでサクヤのことをしっているのですか？」

咲夜は何故彼が自分の事を知っているのか疑問に思っで尋ねると彼はすぐに答えた。

ステッペン

「ああ。ごめんごめん！僕はステッペン・ウルフ。このアーリア村にある孤児院を院長している。そして、何故君を知っている理由はね。ここを出たある娘が僕に教えてくれたんだよ」

咲夜は今一理解できなかった。

何故辺境であるこの村の孤児院の院長が自分を言っているのか？  
少なくとも咲夜の知っている人物で孤児院の出の者は聞いたことが  
無い。

咲夜が未だに理由が分からないでいるとステッペンに更に詳しく話  
した。

ステッペン

「ああ。君なら…というよりこの大陸に住んでいる者は誰でも知っ  
ている人さ」

咲夜

「誰にでも…？もしかしてレミリア様とフラン様はこの村の出身な  
のですか！？」

ステッペン

「正解！正確に言うとあの娘達はこの村に流れ着いてきたんだよ」  
咲夜

「そんなことまったく知りませんでした…」

ステッペン

「まあ事実は小説よりも奇なりって言うしね。僕は孤児院に帰るけ  
ど君も来るかい？」

咲夜

「え…？」

ステッペンの誘いは咲夜にとって魅力的なものだった。

彼は自分の知らないレミリアの事を知っている。

そしてなによりも時間が想像以上に余っているのである。

しかし、いくらレミリアの知り合いとはいえ無断で寄り道したら  
レミリアに心配を掛けるかもしれない。

咲夜はどうしようか悩んでいると彼の一言によって行くこうと決心し  
た。

ステツペン

「君がここに来ているのならレミアも来ているんだろ？だったら孤児院で待っていたほうが合流しやすいと思うよ」

咲夜

「行きます！」

ステツペン

「うん。いい返事だ。それじゃあ動かすから助手席に座ってね」

咲夜

「はい！」

ステツペンが軽トラの運転席に座ると咲夜も軽トラの助手席に座った。

ステツペン

「それじゃあ行くよ」

咲夜

「はい！」

咲夜達はアリア村の村長宅の近くにある孤児院に向けて出発したのだった…。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 3ページ目前編 十六夜 咲夜、アリア

ども飛鳥です。

今回は話が長くなったので前後篇にしました。

今回の咲夜のお使い時の会話の一部はある4コマ漫画の者をベースにしています。

次は後篇とキャラ設定を投稿します。

では(・・・)ノシ

サクヤが会ったステッペン・ウルフという人はとてもあたたかくてやさしい人でした。

あの人とはなしているとまるでおとーさまやシンおにーさま、レミア様とはなしている感じでした。

レミア様もあたたかくてやさしい人ですけどあの人のおたたかさはまるでおとーさまやおにーさまみたいなおたたかさでした。

はやくシンおにーさまにも会いたいです。

サクヤの日記732ページ目より。

交錯戦記 CROSS OF DESTINY外伝 サクヤのメイ

ド奮闘日記

2ページ目後編 十六夜 咲夜、新しい友達ができる

Side 咲夜

咲夜がステッペンと孤児院に向かい始めて1時間20分後 AM・10:30

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

ステッペンについて行った咲夜は紅魔館ほどではないが大きな建物の前に立っていた。

ステッペン@荷物を運び終えた

「さあ。ここが僕が院長をしている博麗孤児院だよ」

咲夜

「大きい…」

ステッペン

「ははっ。そりゃこの中には96人の子供達が居るからね」

咲夜

「もしかしてステツペンさんが1人できりもりしているのですか？」  
ステツペン

「御名答。まあ色々大変だけど慣れれば楽しいものだよ」

咲夜

「すごいです…」

ステツペン@咲夜の頭を撫でる

「ありがとう。それじゃあ中に入ろうか？」

咲夜@父キヲと義兄シンの事を思い出した

「（なんだろう？まるでおとーさまやシンおにーさまに褒めてもらった時みたい…）」

咲夜はたった1人で96人の子供達の面倒を見ている彼に驚きながら彼に案内されて孤児院の中に入っていった。

Side out

Sideレミア

同刻

幻想郷第3大陸 アーリア村 村長宅前

一方アーリア村の村長との会談を終えたレミアは思ったよりも早く終わった暇を持て余していた。

レミア

「思ったより早く終わったな…」

美鈴

「村長さんもすぐに了承してくれましたね」

レミア

「ああ。それは助かるが…」

美鈴

「暇ですねえ」

レミリア

「そうだな…。む？」

美鈴

「うわ。ここでは珍しい軽トラですか！」

レミリア

「美鈴。予定を少し繰り上げてあれを運ぶぞ」

美鈴

「あれって…。もしかして出発する前にガンダムのバックパックにつけてあるあのコンテナですか？」

レミリアは少し早いが孤児院に向かおうとしたらアリア村に1つだけある軽トラに見覚えのある人物がいたので予定を少し切りあげてガンダムへ向かっていった。

その時、その軽トラに咲夜が乗っていたのだが丁度ドアが影になっていたので気付かなかったのであった。

Side out

咲夜が博麗孤児院に来てから10分後 AM・10:40

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院 客室

咲夜@ステッペンに淹れてもらった緑茶を飲んでいる

「？なんか外がにぎやかですね？」

ステッペン

「この賑わいようだ…。あの娘が来てくれたようだね。それもお土産を持って」

咲夜

「この声もしかして…」

ステッペン

「丁度緑茶も飲み終えたみたいだし行ってみるか？」

咲夜

「はい！」

咲夜は外が賑やかになったことに気がついてステッペンに何があるのかと尋ねるとステッペンは誰がやって来たのか見当が付き、咲夜もステッペンから聞いていた話で誰が来るのか悟り、咲夜達は孤児院の玄関に向かった。

5分前 AM・10:35

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

咲夜達が玄関に向かっていている頃レミリアと美鈴はガンダムに搭載してあったコンテナを博麗孤児院前にまで運んできていた。

レミリア@コンテナ(中身30kg)1つを片手で持っている

「む。どうやら子供達はまだ集まっていないようだな」

美鈴@同上

「お嬢様は半年に1回はこのようなことをなさっているのですか？」  
レミリア@コンテナを置く

「ああ。少しノリで作りすぎた服をここの孤児院に提供している」

美鈴@同上

「そうなんですか…(30kgになるまでの量の服を少しノリで作りましたって…:;(」

美鈴はノリで服を200着作るレミリアに呆れながらコンテナを降ろすと先程会った少女がいた。

魔理沙

「レミリアお姉ちゃん！」

レミリア



「む。魔理沙か。すまないが皆を呼んできてくれないか？」  
魔理沙

「うん！」

レミリアは魔理沙に子供達を集めてくるようにと頼むものの5分で玄関の前が子供達で埋まった。

5分後 AM・10:40

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院前

レミリアは子供達が集まったことを確認すると孤児院全体に聞こえるように叫んだ。

レミリア@大声

「よく集まってくれた！今回は皆の服を土産として持ちかえってきた！取り合いにならないように順番に呼ぶから呼ばれたらここにいる者に服を受け取ってくれ！」

孤児院女子組

「「「「わーい！お洋服だ　！！」「」「」

美鈴@同上

「お洋服は逃げませんから順番に来てくださいなー！！」

孤児院の子供達はレミリアの指示通りにレミリアに呼ばれた者から服（レミリア謹製）を受け取っていると客室にいた咲夜達がレミリアに声を掛けた。

咲夜@レミリアに抱きつく

「レミリア様！」

レミリア@子供達への服の分配が終わった

「む。咲夜か。その様子だと買い物もうまくいったようだな」

咲夜

「はい！ここの院長さんのステッペン・ウルフと言う方に助けてもらいました！」

レミリアは咲夜が何気なしに言った言葉で驚いたがそこに咲夜が言っていた彼：ステッペンがレミリアに声を掛けた。

ステッペン

「ひさしぶりだね。レミリア」

レミリア@深々と頭を下げる

「おひさしぶりです院長。お元気そうだなによりです」

咲夜

「（！レミリア様が頭を下げてる！？この人ってレミリア様とどういふかんけいなんだろ？）」

美鈴

「（どうやらお嬢様とフラン様がお世話になった人ってこの人なんですね…）」

ステッペン

「そこまで頭を下げなくてもいいよ。さ、ここは冷えるから部屋の中に入るうか？」

レミリアがステッペンにした行動に咲夜は驚き、美鈴は彼がどのような人物か察しがついた。

ステッペンはそんなレミリアに頭を上げさせ、話をする為に孤児院の建物の中に入ろうとすると魔理沙と彼女の友達と思わしき子供達が話しかけてきた。

魔理沙

「せんせー！わたしも一緒について行ってもいい？」

頭に赤いリボンをつけた少女

「わたしもー！」

頭に黒いリボンをつけた少女

「わたしもレミリア様とお話したいです！」  
人形を持つている少女

「わ、わたしも…」

紫髪の少女

「わたしもお話したい」

ステツペン

「慌てない、慌てない。まずは部屋まで行こうか？」

空色の髪の少女@まとめ役

「レミリアさんは逃げないから部屋に戻りましょう？」

子供達

「……はい！」「」「」

物凄い勢いでレミリア達に話しかけてきた子供達をステツペンが興奮状態の子供達を空色の髪の少女と共に鮮やかに受け流して咲夜達は客室に向かった。

15分後 AM・10:55

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院 客室

ステツペンに客室に案内された咲夜達は彼が淹れた紅茶を飲んできた。  
た。

ステツペン

「お味はどうかかな？」

美鈴@非番の時は1階中央エリアで喫茶店を経営している

「凄いですね…。私も色んな紅茶を飲んできましたけどここまでおいしい紅茶は飲んだことないです」

レミリア

「流石のお手前です」

レミリアと美鈴は思い思いの感想を言い紅茶を楽しんでいたが咲夜はある引つ掛かりを覚え、声に出した。

咲夜

「あれ…？」

ステツペン

「どうしたんだい咲夜ちゃん？」

咲夜

「えーと…そのしつれいかもしれませんがなんかレミリア様が淹れてくれたお茶に似ている気がして…」

咲夜の感想にステツペンは数瞬沈黙した後声を上げて笑い始めた。

ステツペン

「ははは！君の味覚は凄いね！そのとおり！レミリアに紅茶の淹れ方を教えたのは僕だからね！」

咲夜

「え！？そうなんですか！？」

レミリア

「ついでに言うとお前に教えている裁縫・料理・掃除・給仕は全て彼から学んだ」

咲夜

「ええ！？」

咲夜はまさか目の前にいる彼がレミリアの師だったと事は勿論、今のレミリアから教えてもらっている事全てが彼に教わったものだとは思ってもよらなかったらしい。

魔理沙

「せんせーおなかすいたー」

ステッペン

「おつと楽しい会話をしていると時間が早く過ぎていくものだね。それじゃあお昼ご飯にしようか。」

子供達

「わーい！」「」「」

ステッペン

「というわけで今からお昼ご飯を作るけど君達も食べていくといいよ」

レミリア@エプロン装備

「ならば私も昼食づくりをお手伝いします」

ステッペン

「お、そうかい？なら手伝ってもらおうかな？」

レミリア

「喜んで」

咲夜達はそうやって雑談をしている内にもう昼になっていた。

その事に気がついたステッペンは厨房に昼食を作りに行き、咲夜もそれについて行こうとしたが美鈴に止められた。

咲夜

「美鈴お姉ちゃん！？何で止めるの！？」

咲夜は何故自分を止めたのかと尋ねたら美鈴はいつも咲夜に向けている笑顔で答えた。

美鈴

「いい咲夜ちゃん？お嬢様にとってあの人は咲夜ちゃんというお嬢様みたいな人なんだよ？それにお嬢様のあの表情を見てみて？」

咲夜は美鈴に言われたとおりに厨房に居るレミリアの表情を見てみ

るとまるで父と一緒に遊んでいる表情であり、ステッペンの表情もまた娘と共に遊ぶ父の表情であった。

美鈴

「楽しそうな表情かおをしているでしょう？だから私達があの場合に行くのは無料だから私達はお嬢様達を待ちましよう。ね？」

咲夜@父キヲと義兄シンと一緒に遊んでいた時のことを思い出した

「うん。そっだよね…」

美鈴は咲夜が納得した事にホツとしつつ、昼食が出来た時にすぐ昼食が食べられるように子供達を呼びに行くのだった。

AM・11:20

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院

あの雑談のあとステッペンとレミリアは昼食の準備をしていた。

レミリア@咲夜と美鈴の会話が聞こえていた

「まったく。私もいい従者を持ったものです」

ステッペン@同上

「そのようだね。ああいう娘はなかなかいないからね」  
レミリア

「では私達は作る料理であの娘達に答えましようか」

ステッペン

「そっだね。じゃあ腕によりを掛けて作りますか」

レミリアはここで空気を読んでくれた咲夜と美鈴に感謝していた。今の自分は過去に戦争が始まる前にこうして彼と共に厨房に立つ機会は今中々得られないものである。

だからこそレミリアは空気を読んで身を引いてくれた2人にそしていつも自分が訪れるのを待っていてくれる孤児院の子供達の為に腕

を振るうのであった。

PM・00:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院食堂

レミリアとステッペンが厨房で昼食を作っている頃、食堂ではレミリアとステッペンが作っている料理を知った魔理沙が子供達を集めていた。

魔理沙@匂いでレミリアとステッペンが何を作っているのかわかった

「みんなー！今日のお昼ご飯はレミリアお姉ちゃんが作ってくれた

オムライスが出るよー！！」

子供達

「「「「わーい！！」「」「」」」

一方、レミリアとステッペンは魔理沙が子供達を集めている間に最後の仕上げにかかっていた。

レミリア

「あとはソースを卵の上にかけて…」

ステッペン

「完成！それじゃあみんな所に持っていこうか？」

レミリア

「わかりました」

その後、咲夜と孤児院の子供達は腹一杯になるまでレミリアとステッペンが作った昼食を食べたのであった。

2時間後 PM・02:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 博麗孤児院

今孤児院の中は静かだった。

昼食を腹一杯食べた咲夜と魔理沙、魔理沙と一緒に居た5人の子供達は美鈴の引率付きでアーリア村にある公園に遊びに行き、それ以外の子供達も昼寝をしたり外で遊んだりと部屋の中で起きているのはレミリアとステッペンだけであった。

ステッペン

「こうして2人きりで話をするのは何年ぶりかな？」

レミリア

「私がこのアーリア村から義勇兵として旅立つ前日ですから大体47年ぶりですね」

ステッペン

「もうそんなに時が経っていたんだ…」

ステッペンは感慨深げにレミリアを見た。

ステッペン

「君とフランがこのアーリア村に来た時の君は目に見える人全てが敵だと思っていたからね…。あの時君を止めるのは大変だったよ…」  
レミリア@黒歴史

「う…。あの時は本当に申し訳ありませんでした…」

ステッペンはこのアーリア村にやってきたばかりのレミリアを思い出し、レミリアは恥ずかしさのあまり顔を赤くした。

ステッペン

「まあ過去の事はもういいとして…」

ステッペンが過去の話をやめた所でレミリアは博麗孤児院に引き取られ、出稼ぎをするようになって彼の過去を知ってから疑問に思っていたことを話した。



レミリア

「ステツペン院長…いや、カービィ義父さん」

カービィ@ステツペン・ウルフは偽名

「なんだい？レミリア」

レミリア@カービィの過去を知っている

「今更ですが何故この孤児院始めたのですか？貴方程の方なら他の大陸の者が貴方を高い位の役職につけたでしょうに…」

レミリアの疑問。

それは彼がこの小さな村で孤児院の院長をしていることである。

彼は過去に幻想郷が一気に巨大化する前にあつたある問題を自身と彼の仲間で作った発明品でその問題を解決した事があり、その時から幻想郷の力を持つ勢力の長があの手この手で彼を自らの参加に引き入れようとした。

その待遇は今の時代でも破格の待遇である。

だからこそレミリアは自分をこの大陸の統治者に推薦した彼が名前を変えてまで未だにこの孤児院の院長をしている理由が分からなかった。

カービィは数瞬目を閉じた後レミリアに語りかけた。

カービィ

「レミリア、人にはね、必ず役割というものがあるんだ」

レミリア

「役割？」

カービィ

「そう。君は人を率いる特別な才能を持っている」

レミリア@自覚が無い

「そうですか？」

カービィ

「そうだよ。…確かにこの大陸以外の権力者が出した待遇はとても破格だ。だけど」

レミリア

「だけど？」

カービィ @外で遊んでいる子供達を見る

「僕の役割はね。誰かの上に立って統治することじゃなくてここに  
いる子供達の笑顔を守る事なんだと思っっているんだ」

レミリア

「あ…」

カービィの言っていた事はこの幻想郷の中でも最も問題となっている  
ものであった。

過去の戦争幻想郷大陸争奪戦争はどの大陸にも例外なく多数の死者・  
難民・孤児が発生した。

そして、その戦争はレミリア達の手によって終結した。

しかし、それは一時的なものであり、他の大陸の勢力がこの大陸を  
一時的に諦めただけで他の大陸間での戦争は47年前に各勢力の痛  
み分けとしてようやく終結した。

カービィ

「統治する者が優秀な指導者だとしても必ず綻びが出る。ここに  
いる子供達はその綻びによって出た犠牲者だ」

レミリア

「確かにあの戦争から47年の月日がたっても未だに孤児が続出し  
ています。一番平和だと言われているこの大陸にでさえ…」

そして、この大陸でも未だにこの大陸を狙う勢力のテロによって孤  
児が出てしまっている。

カービィ

「だから僕はそんな子供達を笑顔にしてあげたい。そして、その笑顔を守ってあげたい。それがここで孤児院を続ける理由だよ」

レミリア

「つまり貴方にはここに居る子供達の笑顔を守る事が貴方の役割なのだと言いたいんですね？」

ステツペン

「うん。大体その解釈で合っているよ」

ステツペンの言う理由を聞き終えたレミリアは目を閉じて答えを考えていた。

現在幻想郷の状況は安定しているとはいえそれは水面下の話であって実際はいつ戦争が起こってもおかしくはないのである。

それだけこの大陸は他の大陸には魅力的なのである。

レミリアも本当ならカービィの力が欲しいのである。

だがここに居る子供達は…アリア村は彼に守られている。

ここで彼を自分に引き入れてしまったらこの村を守る力を孤児院の子供達から彼という父を奪ってしまう。

だからこそレミリアは統治者としては甘いと思いつつながら結論を出した。

レミリア

「わかりました。なら貴方に関しては何も言いません」

カービィ@懐からカードを取り出しレミリアに渡す

「そうかい。そうだな…君ならアレを託せるかな」

レミリア@カードを渡される

「アレ？」

カービィ

「このアリア村の近くにあるGシステムの起動及び認証キーだよ」  
レミリア

「なっ!?!?Gシステム!?!?」

カービィ

「うん。ここの近くにGシステム1番機がある」

レミリア

「何故私に？」

カービィ

「君ならあの装置を正しく使えると思ったからね。それと君に頼みたい事があってね」

レミリア

「頼み？」

カービィ

「今年で7歳になる魔理沙、霊夢、パチュリー、アリス、妖夢、そして今年で15歳になる天子を君の本拠地にある紅魔館の学校に入学させたいんだ」

レミリア

「わかりました。ですがそれだけの条件でいいのですか？」

カービィ

「うん。できれば咲夜ちゃんとも仲良くなっしてほしいけど、これに関してはあの子達次第だからね」

咲夜

「ただいま帰りました！」

カービィ

「どうやらあの子達も返ってきたようだね」

レミリア

「そのようですね」

レミリアとカービィの頼みを聞き入れた直後に公園に遊びに行っていた咲夜達が帰ってきた。

美鈴

「お嬢様。ただいま戻りました」

レミリア

「そうか。咲夜達の引率、御苦労であった」

美鈴

「ハッ！」

カービィ

「そうそう。魔理沙、霊夢、パチュリー、アリス、妖夢、天子、君達が行きたがっていた学校の件なんだけど何とかかなりそうだよ」

子供達

「……………ほんと!?!」「……………」

カービィ

「ああ。ここにいるレミリアが何とかしてくれる」

レミリア

「もし魔理沙達がいいのなら今日からでもいけるぞ」

子供達

「……………やったー!?!」「……………」

その後咲夜達が部屋の中に入ってきて、魔理沙達も一緒に紅魔館に行く聞いて大喜びした咲夜達がいたのだった。

3時間後 PM05:00

幻想郷第3大陸 アーリア村 入り口前

帰る準備を終えた咲夜達と紅魔館に行く準備を終えた魔理沙達はカービィと孤児院の子供達に入り口の前まで送ってもらい、それぞれ別れの挨拶をしていた。

カービィ

「それじゃあレミリア。魔理沙達を頼んだよ?」

レミリア

「はい。まかされました」

子供A



レミリア

「それでは…帰るか咲夜」

咲夜

「はい！（レミリア様すぐくうれしそうだったけど何を言われたのかな？）」

その後咲夜はレミリアの表情に疑問に思っただけで何をしていながら紅魔館に帰っていくのであった。

4時間後 PM・09:00

幻想郷第3大陸 紅魔館 咲夜の部屋

アーリア村から返ってきた咲夜は現在部屋のない魔理沙達の寝る部屋として咲夜の部屋で寝ることになり、新たな部屋の仲間と仲良く会話をしていた。

魔理沙

「とうわけで今日からよろしくね！咲夜！」

咲夜

「うん！よろしく！」

霊夢@紅いリボンをつけている少女

「それにしてもこのへやは広いね」

アリス@人形を持った少女

「まるでわたしたちがみんなでねてるへやみたいね」

パチュリー@紫髪の少女

「むきゅー…うらやましい…」

天子@空色の髪の少女

「私達が住むことになる部屋もこと同じくらいの広さらしいわよ」

妖夢@黒いリボンをつけている少女

「ほんと！？それはたのしみだね！…」

咲夜

「ふつうのがくせいりょうは使えないからわたしの部屋があるエリアにある部屋を使うんだって」

霊夢

「そうなるわわたしたちはサクヤのおとなりさんになるってこと？」

咲夜

「そつだと思つ」

天子@布団をかぶつて寝る

「明日になったら準備が分かるでしょ？ホラ！サツサと寝る！」

咲夜達

「「「「「はい」「」「」」」」」

その後天子が寝たのを見計らつて咲夜達は夜遅くまで仲良くトランプをしたりウノをしたりして遊んでいたのだった。

翌日 AM・08:30

幻想郷第3大陸 紅魔館

咲夜@夜更かして寝坊

「寝坊しましたー！！」

魔理沙@同上

「ヤバイ！もうレミリアお姉ちゃんに言われてる時間すぎちゃってるよー！！」

霊夢@同上

「こんなことならもっと早くねればよかつたー！！」

妖夢@同上

「と、とにかくいそぎましよう！」

アリス@同上

「うー！なんでこんなめにー！！」

パチュリー@同上



「みんな、おいてかないで〜!!」

案の定寝坊した咲夜達はレミリアに指定されている時間を軽く超えていることに悲鳴を上げながら紅魔館の廊下を走っていた。

レミリア@実は咲夜の部屋の隣の部屋にいる

「どうやら寝坊したようだな」

天子@今いる部屋が天子の部屋

「あんの馬鹿あ…orz」

今日も紅魔館は平和であった…。

どうも飛鳥です。

今回は外伝後篇になります。

今回のお話は咲夜主役なのにレミリアに出番食われてしまいました  
(量も前編の2倍...)。

今回登場した彼が何故幻想郷にいるのか？何故人の姿をしているの  
か？

その点に関しては次の人物設定3+ で記述しておきます。

では(・・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介3 + (前書き)

外伝2話に出た人物などの設定があります。

ネタバレを含むのでそういったことを嫌われる方は閲覧されな  
いとを推奨します。

【キャラ】

カービー（特定不能）

アーリア村にある孤児院『博麗孤児院』の院長。

普段は偽名のステッペン・ウルフと名乗っている。

レミアアやフラン、魔理沙達をはじめとする孤児院の子供達の父親的な存在。

かつて幻想郷が日本の一部程度の大きさだった時、当時問題とされていた食糧問題を万能創造システム『Gシステム』を開発させたことよって解決に導いた人物でもある。

しかし、永遠亭の工作によってGシステムが暴走、博麗大結界は崩壊し、幻想郷が1つの独立した世界となってしまう（幻想郷巨大化事件）。

その後、設計図を持って開発者と共に隠匿生活をしていたが永遠亭に所属している兔のテロによって設計図を奪われ、永遠亭の勢力によるテロで仲間であるリバジを失ってしまうが、彼の約束に従い、量産された『Gシステム』を封印、その後はアーリア村で孤児院を建てる。

孤児院を建ててしばらくしたある日、故郷を追われたレミアアとフランを保護しようとするが当時周りの者全てが敵だと思っていたレミアアと戦闘になり、辛くも勝利、『博麗孤児院』の一員としてレミアアとフランを迎え入れた。

尚、彼の技術力ほどの大陸の勢力も喉から手が出るほど欲しい程であり、現在でも彼の許に勧誘の手紙が度々来ている。

現在のレミアアの基礎を鍛えた人物であり、彼女が咲夜に教えている裁縫・料理・掃除・給仕は勿論、採掘・コンピューター関連の作業・魔法・錬金術・古文書解読・遺跡発掘・鍛冶・MSの操縦及び

MSを使った戦闘もカービィが鍛え上げた。

戦闘技術は超一流であり、レミリアは未だにカービィに勝てないでいる。

MSの操縦技術もレミリアに全てを教え込んだだけあり、超一流である（レベルはシン@本編クラス）。

性格は温厚そのもので子供達は勿論レミリアとフランも彼に懐き、アリア村の住人にも慕われている。

顔のモデルは『ガンダムアサルトサヴァイブ』のカスタムパイロットのデフォルト。

イメージCVは上記ゲームのカスタムパイロットのボイスナンバー9の及川 光博氏。

何故カービィが人の姿をしている理由は最後の記述参照。

博麗 魔理沙（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

元々は幻想郷第4大陸の出身だったが大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた霊夢、妖夢、アリス、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた霊夢達は無事だったが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となつた（咲夜が紅魔館に流れ着く1年前）。

見た物の動きをそのままラーニングするという特技を持っている。性格はまさに活発の一言で、普段から霊夢達を連れまわしていることが多い。

元々学校に興味を持っていたが近くに学校が無かつた為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって霊夢達と共に入学することになる。

憧れの人物は幻想郷第3大陸統治者レミリア・スカーレット。

博麗 霊夢（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、妖夢、アリス、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だつたが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となつた。

特にこれといった特技は無いが自身が持つ霊力は並みの妖怪を軽く吹き飛ばせるほどの霊力の持ち主。

性格はめんどくさがり屋だがノリはいいため魔理沙とよく行動している。一見強気に見えがちだが孤独になる事をひどく恐れている。

魔理沙と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かつた為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによつて魔理沙達と共に入学することになる。

憧れの人物は博麗孤児院院長ステッペン・ウルフ（この名前自体は偽名だが）。

博麗 妖夢（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、妖夢、アリス、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だつたが食糧等の

生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となった。

刀剣問屋の一人娘だったため刀剣の選別が得意。性格は温厚なのだが周囲に流されてしまいがち。

魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かった為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって霊夢達と共に入学することになる。

憧れの人物は幻想郷の中でも剣聖と呼ばれているカービィ（自分を育ててくれた人物が本人だとは知らない）。

尚、原作と違って人間である。

博麗 アリス（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、霊夢、妖夢、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だったが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となった。手先が器用で人形サイズの服なら製作可能である。

魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かった為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによって魔理沙達と共に入学することになる。

性格は甘えん坊で寂しがり屋。

宝物はカービィに作ってもらった『上海人形』。

憧れの人物は紅魔館の整備士アストナージ・メッソ。

尚、原作とは違って人間である。

博麗 パチュリー（7歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、霊夢、妖夢、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だつたが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で天子を除く全員が力尽き、たまたま近くを散策していたレミリアとカービィに保護され、『博麗孤児院』の一員となつた。魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かつた為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミリアによつて魔理沙達と共に入学することになる。

運動は苦手だがその分学力と魔力は非常に高い。

性格は物静かで引っこみ思案だが言う時は言う。

憧れの人物はGシステム開発者リバジ・ザース。

尚、原作とは違って人間であり、喘息は患っていない。

博麗 天子（14歳@外伝3話登場時）

博麗孤児院に孤児として住んでいる少女。

魔理沙達と同じく幻想郷第4大陸の出身。

大陸間の戦争で家族を失い、同じ街に住んでいた魔理沙、霊夢、妖夢、パチュリー、天子と共に戦争の真只中であつた自分の故郷から天子の家の所有物であつた船に乗って逃走するが嵐に巻き込まれて船は転覆、幸い共に逃げてきた魔理沙達は無事だつたが食糧等の生活物資は全て流され、ついた陸地：幻想郷第3大陸にあるアーリア村付近の森で自分以外が力尽き、それでも人がいる場所を求めて彷徨っていた所にたまたま近くを散策していたレミリアとカービィに



保護され、『博麗孤児院』の一員となった。

魔理沙達と同様に学校に対して興味を持っていたが近くに学校が無かった為に諦めていた。しかし、カービィの頼みを聞き入れたレミアによって魔理沙達と共に入学することになる。

学力・戦闘能力・魔術は非常に高く、家事全般などは一通りできる。スタイルは本編に登場する早苗レベル。

性格は真面目そのものでよくトラブルを起こす魔理沙達に頭を悩ませている。

彼女がいないと魔理沙達のストッパー役が無くなる為割と重要な役割を持っている。

憧れの人物は博麗孤児院院長ステッペン・ウルフ（本名はもう知っている）。

原作と同じく天人ではあるが家族と一緒に天人になった直後、永遠亭の攻撃で天子を除く全員が死亡している。

リバジ・ザース（享年45歳）

カービィと共に万能創造システム『Gシステム』を作った人物。

永遠亭の勢力によるテロによって命を落とした

### 【兵器・施設】

シャイニングガンダム（GF13-017NJ）

美鈴が駆るMF。

紅魔館の近くにある湖付近に中破して放棄されていた本機をレミアアが回収、アストナージら紅魔館のMS整備士の手によって修復された。

大半の機能は修復できたが機体を動かす肝であるモビルトールシステムの損傷が酷く、代用としてレミアアのガンダムと同じ規格のコックピットに換装された。

その正体はGガンダムに登場したシャイニングガンダムそのもの。

放棄された際に幻想入りし、妖精達の悪戯でモビルトールシステムが破壊されてしまった。

装甲素材 ガンダリウム合金スーパーセラミック複合材

レアメタル・ハイブリッド多層材

MSの骨格 不明：恐らくはムーバブルフレームに準ずる物

コックピット形式 コアブロックシステムを採用

エンジン アーティフィシヤル・オーラ・ジェネレーター（人工気力発生装置）

備考 コックピットがレミリアのガンダムと同じ規格

Gシステム

万能創造システム。

カービィとリバジ・ザースが開発した万能創造システム。

エネルギーと設計図さえあればどのような物も創造可能だという夢のシステム。

開発されたきっかけはカービィの持っていたコピー能力とヘルパーを生み出す能力を見て科学的に再現をしようとしたのがきっかけとなっている。

このシステムによって当時の幻想郷で問題となっていた食糧問題を解決されたが永遠亭に所属している兔の工作によってシステムが暴走する。

結果、幻想郷の守りの要であった博麗大結界が崩壊し、それによって幻想郷は8つに分かれ、それぞれの大陸が形成された（幻想郷巨大化事件）。

その後、事件のきっかけになったGシステム1番機の機能は全て封印され、設計図もカービィとリバジの許で管理されていたが永遠亭に所属している兔のテロによって設計図を奪われ、全部で7機量産された。

そして、永遠亭をはじめとする勢力はこのGシステムを使用してM

Sを大量に量産、幻想郷第3大陸をめぐって大陸間で戦争を始める（幻想郷大陸争奪戦争）。  
が、Gシステムの場所を突き止めたカービィによって全機封印される。

一時的に封印を解いて機能を使用可能にするカードをカービィが所持していたがレミリアに譲渡される。

#### 【勢力】

幻想郷第4大陸

魔理沙達の故郷。

幻想郷第3大陸と同様に自然と鉱物資源に恵まれていたが幻想郷第3大陸程の戦力が無かった為一度占領されるが突如現れた白亜のMSによって永遠亭は敗走、その後は永遠亭のレジスタンスのリーダーであった上白沢 慧音によって統治される。

統治者は上白沢 慧音。

アーリア村

幻想郷第3大陸の南端にある小さな村。

レミリア、フラン、カービィ等の人物がこの村に流れ着いている。自然豊かな村で凶暴なモンスターも住んでおらず、人妖が共存している幻想郷では珍しい村。

レミリア達の育ち故郷『博麗孤児院』もこの村にある。

村長はレジス。

博麗孤児院

アーリア村にある孤児院。

レミリア、フラン、魔理沙、霊夢、妖夢、アリス、パチュリー、天子が住んでいた。

ここに住んでいる者・住んでいた者は”博麗”と名乗っているがレミリアとフランは自分の名前で博麗孤児院が襲撃されることを懸念

して、スカーレット姓を名乗っている。

戦争によって住む場所を追われた子供達がこの孤児院に住んでおり、レミリアもまたこの孤児院でカービィに育てられた。

カービィ1人でできりもりされているが孤児達の中でも天子をはじめとする子供達が率先して手伝うことも多い。

実はこの地下にMS一機分のハンガーがある。

名前の由来はここで初めての孤児となった者が博麗の巫女だったため。

院長はステッペン・ウルフ（カービィ）。

#### 博麗神社

幻想郷巨大化事件が起こる前に存在していた神社。

幻想郷巨大化事件によって消滅してしまった。

尚、当時の博麗の巫女はカービィの所に遊びに行っていた為無事であった。

#### 【事件・戦争】

幻想郷巨大化事件（幻想歴元年）

Gシステムの暴走によって起こった事件。

幻想郷が八雲亭周辺・霧の湖・人里周辺・妖怪の山・迷いの竹林・博麗神社周辺・魔法の森・地底が8つの島に別れ、その島をベースに各大陸が創造された。

それぞれの大陸を紫が訪れた順に第1大陸・第2大陸と名前を決められた。

皮肉なことにこの事件で幻想郷の抱えていた居住スペースの確保が解決された。

幻想郷大陸争奪戦争（幻想歴54年～幻想歴454年）

幻想郷第3大陸と幻想郷第4大陸を除くすべての大陸の勢力が、当

時統治者がいなかった幻想郷第3大陸をめぐって400年も行われた戦争。

戦況は終始MSを大量に量産していた永遠亭が優勢だったがレミリアの率いる義勇団のMS隊によって幻想郷第3大陸を制圧していたMS隊が全滅、これを契機に各地でも配送が続き、更にMS量産の要であったGシステムをカービィによって全て封印され、結果幻想郷第3大陸と戦争に参加していなかった幻想郷第4大陸を除く全ての勢力が痛み分けという形で終結した。

しかし、それは水面下のことで未だに小さな小競り合いが続いており、幻想郷第4大陸はその余波で一度永遠亭に占領されていた。

## 【その他】

### 幻想歴

幻想郷での暦。

元年はGシステムの暴走によって起こった幻想郷巨大化事件が起こった年になっている。

尚、咲夜が紅魔館に流れ着いた年は幻想歴489年である。

カービィが人の姿になった理由

ベースはアニメ後の設定。

ホップスターに起こっていたトラブルを解決していたが太陽と月の喧嘩を止める為に機械惑星ノヴァを起動させるがマルクの策略によって負傷する。

が、負傷を押してマルクと戦い、相打ちになりながらもマルクの野望を阻止した。

その時に幻想入りし、八雲 紫に発見されるがこの時にはすでに致命傷を負っており紫はカービィを助ける為に彼の種族の境界を操作結果カービィは九死に一生を得るが人の姿となってしまう、更には元の姿に戻れなくなった。

この件で紫はカービィに対して罪悪感を抱いていたがカービィ自身は紫を命の恩人として感謝している。

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 人物紹介3 + (後書き)

どうも飛鳥です。

今回は外伝3話に登場したキャラの設定とでてきた単語の説明となつていきます。

では(・・・)ノシ

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 スクリーンチャット集

1 ページ目

Chat 1「よろしくおねがいします」 咲夜がのぼせた翌日

紅魔館2階東エリアの廊下

咲夜@あたりを見回している

「ここはほんとうにひろいです」

???

「うん？お嬢ちゃん。こんな所で何をしているんだい？」

咲夜@声に気がつく

「誰ですか？」

???

「誰かに名前を聞く時には自分から名乗れって教わんなかったのかい？」

咲夜

「あつ。ごめんなさい！サクヤはいざよい さくやと申します！」

???

「おつ。やればできるじゃないかい。私はケーラ・スウ。この紅魔館で兵士をしている」

咲夜@深々と頭を下げる

「よろしくおねがいします！」

ケーラ

「ああ。よろしく！」

Chat 2「もんばんってもののまえでねるし」と？」 咲夜がのぼせてから10日後

上海アリス喫



茶店

咲夜@美鈴に声を掛ける

「ねえねえ、めいりんおねえちゃん」

美鈴@紅茶を飲んでいる

「どうしたの咲夜ちゃん？」

咲夜

「めいりんおねえちゃんっていつももんのまえでねているよね？」

美鈴@紅茶を吹きかける

「ブツ！？な、何を言っているのかな？」

咲夜

「だってめいりんおねえちゃんいつももんのまえでねてるんだもん」

美鈴@どう答えていいか迷っている

「え、ええつと…」

レミリア@何処からともなく現れる

「それはだな咲夜」

美鈴@驚く

「うわ！お嬢様！？何処から入って来たんですか！？」

レミリア@スル

「実は美鈴が寝ているように見えるのはそれだけ外敵が来ていないのだ」

咲夜

「そうなんですか？」

レミリア

「ああ。それに美鈴と会った時も起きていただろ？」

咲夜@美鈴に初めて会った時のことを思い出す

「あつ。そういえば…」

レミリア

「詳しく説明すると長くなるから簡単に言っとだな。美鈴は常にレダーであたりを監視しているという事だ」

咲夜

「めいりんおねえちゃん。いつもねてばかりと行ってごめんなさい」  
美鈴

「いえいえ。気にしなくてもいいですよ！」

## 2 ページ目

Chat 3 「ガンダムへの憧れ」 ガンダムに乗った後

西にある港町

咲夜

「レミリアさま」

レミリア@振り返る

「どうした咲夜？」

咲夜@目を輝かせている

「サクヤもガンダムがほしいです！」

レミリア

「ふむ…。考えておこう」

咲夜

「ホントですか!？」

レミリア

「ああ。私はお前には嘘をつかん」

咲夜@大喜び

「やったあ!!」

レミリア@真面目に考えている

「（咲夜の戦闘パターンはまだ分かっていないからな…」

ガンダムを建造するのは戦争訓練も入ってくる13歳あたりだな）  
」

Chat 4 「レミリアは人気者？」 ガンダムに乗った後

レミリア

「ふむ。この視察はここまでだな」

咲夜@あたり一面を見回している

「うわぁ……」

市民A

「む？あれは!？」

市民B

「レミリア様だ!」

市民C@高級な布をレミリアに渡す

「レミリア様!これは私の気持ちです!受け取って下さい!」

レミリア@人の厚意は基本的に受け取る

「む。すまん」

市民D@オリハルコンをレミリアに渡す

「レミリア様!これは私の気持ちです!受け取って下さい!」

1時間後

レミリア@貰った物をコンテナに入れている

「ふむ。この民は私を慕ってくれているようだなによりだ」

咲夜

「(レミリアさまって本当に色々な人にすかれているなあ……)」

Chat5 「はじめまして」 フランが帰ってきてから2日後

レミリアの私室

咲夜@アストナージから頼まれごとをされてきた

「レミリアさまはどこにいるんだろ?」

フラン@レミリアに用事があった

「うん？君は…」

咲夜@フランに気がつく

「サクヤはいざよい さくやです」

フラン

「私はフランドール・スカーレット。今日からここで医者をさせてもらうの」

咲夜@レミリアと同じスカーレット姓だということに気がつく

「スカーレット？となるとレミリアさまの？」

フラン

「うん。妹だよ。これからよろしくお願いね？」

咲夜

「はい！」

3 ページ目

Chat 6 「鬼ごっこ」 咲夜達が外に遊びに行った後

アーリア村公園

魔理沙

「それじゃあ何してあそぶ？」

霊夢

「オニゴッコ！」

霊夢と天子を除く子供達

「……さんせー！！」「……」

咲夜

「じゃあサクヤが鬼をするね！」

天子@引率

「あまり遠くに行くんじゃないわよー！」

子供達

「……」「……」「はい」「……」

5分後

妖夢@息絶え絶え

「うっ…」

アリス@同上

「ぜえぜえ…」

パチュリー@同上

「むきゅー…」

霊夢@同上

「はあはあ…」

咲夜@余裕

「やったあ！サクヤのかちだね！！」

魔理沙@余裕

「チクシヨー！負けたー！！」

咲夜と魔理沙を除く子供達

「『『『まりさはともかくさくやは何でへいきなの！？』』』」

Chat7 「夜更かし」 天子が寝た後

紅魔館2階東エリア 咲夜の部屋

魔理沙@天子の様子を見る

「よし。てんし姉ちゃんはねたな」

霊夢

「じゃあ何する？」

パチュリー

「トランプしたい…」

アリス

「わたしもー」

咲夜

「じゃあババぬきだね」

1時間後

アリス@ブービー

「ぜんぶそろったー！」

パチユリー@ビリ

「むきゅー……」

魔理沙@3位

「つぎは何する？」

霊夢@4位

「ウノってゲームしない？」

妖夢@1位

「それさんせー」

咲夜@2位

「じゃあ取ってくるね」

翌日

咲夜@起きる

「う、ううん……」

魔理沙@同上

「おはよー……」

霊夢@顔を青ざめる

「おは……ゲエッ!？」

咲夜

「どうしたのれいむ?」

霊夢@咲夜達に時計を見せる

「今8時20分!」

霊夢を除く子供達

「「「「「……「「「「「

子供達

「「「「「ちこくだ  
!!!!!!!!!!!!!!  
「「「「「

外伝 サクヤのメイド奮闘日記 スクリーンチャット集（後書き）

どうも飛鳥です。

今回は外伝のスクリーンチャット集です。

次からは本編になります。が、投下が遅くなるかもしれません。（ライ  
では（・・）ノシ



## 第12話「レオルバディア破壊依頼」受諾編」

私は目の前の光景が信じられなかった

普段のシンは冷静であんな事をする人じゃない

だけどさっきのシンは違った

まるで家族の仇を見るような目っていうのかな？

私にはよくわからないけどそんな目をしていた

私はシンが目の前の人の名前を叫ぶまで気がつかなかった

シンの家族同然の人を殺した組織

そしてギン姉とお父さんが所属している時空管理局の精鋭部隊

古代遺物管理部 機動六課隊長 八神 はやて

なぜこの人がこの場所にいるのか分からなかった

でも…

はやて

「それでは依頼の説明に入りますけど大丈夫ですか？」

スバル

「は、はい。大丈夫です」

例えどんな人が敵に回ったとしても

私はシンの隣にずっと居たいんだ…

例えその果てに私が死んだとしても…

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

「世界を駆け巡る者達」

第12話「レオルバディア破壊依頼」受諾編」

シンとはやてのトラブルから5分後

クラッド6 リトルウイング管轄区 リトルウイング事務所

はやてとシンを除く全員が再びシンが暴走することを恐れて冷や冷やした雰囲気から依頼内容の説明が始まった。

はやて

「それでは、依頼内容を説明します」

はやては事務所にある巨大ディスプレイを（チェルシーの座っている席の右隣にある画面）起動させる。

はやて

「依頼主はインヘルト社。皆さんは御存じだと思いますが亜空間航行のプロジェクトを進めている企業です」

はやてがそう言うとディスプレイに巨大な建造物が表示され、その建造物が亜空間航行実験で使用される物だと表示される。

はやて

「尚、このプロジェクトはガーディアンズ、同盟軍、グラール教団、各惑星の企業の出資を受けて実施されているこのグラールの未来が懸かった一大プロジェクトです」

クラウチ

「確かにウチの親会社のスカイクラッド社も出資しているからな」

はやての説明にクラウチも補足を入れるとディスプレイにどのような場所がスポンサーを務めているかが表示される。

はやて

「そこで今回の依頼ですが現在亜空間航行の実験を行っている施設に何者かが侵入し、侵入者自体は撃退できました」

シン

「（あいつは…！？）」

ディスプレイには何者かの人影が映し出され、その上にアンノウンと表示される。

その人影を見たシンは苦々しげな表情をしていることに気が付き、スバルが声を掛けようと思ったがシンは目で気にするなと伝え、はやては説明を続けた。

はやて

「しかし、侵入者が放ったウイルスによってガードマシナリーが暴走、現在は職員が鎮静化を図っていますがどの方法もうまくいかず、現在は様子見の状態です」

レイ

「ウイルスだと？」

はやて

「どうかしましたか？」

レイ

「いや。なんでもない。説明を続けてほしい」

はやて

「わかりました」

ディスプレイに現在暴走しているマシナリーの情報が表示され、はやての説明にあったウイルスにレイは疑問を抱くがはやてに説明を促した。

はやて

「この施設には亜空間航行の研究に欠かすことのできない資料や機材が多数あり、このままだと亜空間航行の完成までに致命的な遅延が発生してしまいます」

はやての言葉の後にこの施設にある資料や機材の情報がディスプレイに表示され、このうちのどれかが欠けてしまうだけで亜空間航行の研究に致命的な遅延が発生すると説明される。

はやて

「なので暴走しているマシナリーの鎮静または破壊が今回の依頼内容となっています」

はやてが説明居ている途中に施設内のマップと暴走しているマシナリーを意味する赤い三角が表示され、暴走しているマシナリーに新しく表示された青い三角が接触して赤い三角が消えていく動きが表示され、依頼内容が表示された。

エミリア

「うーん…」

はやて

「どうかしましたか？」

エミリア

「え、えーと…」

はやて

「はやてで構いませんよ」

エミリア

「じゃあはやてさん。その施設で稼働しているマシナリーの中にグリナビートタイプ以上の大きさマシナリーってありますか？」

エミリアの指摘にはやてはとあるマシナリーが試験的に稼働している話をシズルから聞いていた。

そのマシナリーの名は

はやて

「レオルバディア！確かにグリナビートタイプ以上の大きさを誇る巨大マシナリーが試験的に稼働していた筈です」

レイ

「やはりか。ただ下のマシナリーのウイルスを除去してもそのレオルバディアから送られてくる情報の中にウイルスが混じっているのだらう」

はやて

「成程！では改めて依頼内容を説明します」

暴走している巨大マシナリーの名はレオルバディア。

現在稼働しているマシナリーの中でも有数の巨体を持つマシナリーである。

それが原因であることに気がついたはやては改めて依頼内容の説明を始めた。

はやて

「改めて依頼内容を説明します」

はやての操作によってディスプレイに映されているマップの最深部に巨大な円盤に四肢を生やしたようなマシナリーが映し出される。

はやて

「先程エミリアさんの指摘にあった通り、この施設ではマシナリーの制御を担当する巨大マシナリーが現在試験稼働をしています」

スバル

「ちなみに大きさは？」

スバルははやてにレオルバディアの大きさを尋ねるとディスプレイにレオルバディアの詳細データが表示された。

リオン

「大きさは直径20m。高さは8mか」

早苗

「あの〜…」

はやて

「どうかしましたか？」

はやては早苗が何か言いたそうな表情をしていたので尋ねると早苗は

早苗

「300mm大口徑レーザーキャノンって…。このマシナリーはあくまでマシナリー制御の為のマシナリーですよね？」

エミリア

「それに機雷射出機能にナパーム弾搭載ってどう考えても過剰武装じゃん…」

はやて

「恐らくマシナリーを制御するマシナリーが弱かったら駄目だという理念で作られているのだと思います」

早苗とエミリアのツッコミにはやても冷や汗をかきながら自分の推測を述べているとそこにはやてにとっては意外な人物から助け船が出た。

シン

「指揮官機だから強力な武装をされているのは当たり前だろ？続きを」

はやて

「え？あつ、はい…」

シンからの助け船のおかげで助かったはやては依頼内容の説明を再開した。

はやて

「おそらく例の侵入者はこのレオルバディアにウイルスを仕込み、レオルバディアの命令の中にウイルスを混ぜさせることで今回のマシナリーの暴走が起きたのだと思います」

ディスプレイにアンノウンが映し出され、アンノウンとレオルバディアが接触した後他のマシナリーが暴走していく状態が映し出される。

はやて

「そこで今回はこの施設の中に入る許可を得たので施設の中に侵入今回の暴走事件の原因となっているレオルバディアを破壊して下さい」

はやての説明の後青い三角が再びマップの中に現れてレオルバディアに接触、接触した後レオルバディアを示している巨大な赤い三角が消えた。

はやて

「このレオルバディアは4本足で稼働していますが構造上の問題で弱くなっており、転倒した際、レオルバディアのコアが露出するという欠点があります」

はやてがレオルバディアの弱点をディスプレイに表示させるとレオルバディアの4本の足とレオルバディアの中央にコアが表示される。

リオン

「最早欠点というより欠陥だな」  
はやて

「コアにある程度のダメージが与えられればレオルバディアは停止します。皆さんの奮闘に期待します」

リオンの辛口コメントの後はやてが依頼内容の説明が終わった。

Sideシン

依頼内容説明から1時間後

クラッド6 リトルウイング管轄区 シンの部屋

依頼内容の説明を聞いた後シンはやてを自分の部屋に連れてきていた。

理由は何故ここにいるのか？

そしてなによりもはやてが言っていた『あの人』という人物が気になる。

シンはやてがこのグラールに害を及ばさないかの確認の為に彼女を自分の部屋に連れてきていた。

シン

「それで、なぜ機動六課の隊長と守護獣がこんな所に来ている？」  
はやて

「それは…」

カムハーン

『それについては我が説明しよう』

はやてはまさか『私も貴方と同類になりました』と自分で口に出すことを躊躇っているとシンにとって懐かしい人物の声が聞こえた。

はやて

「ちよっ！？カムハーンさん一体何処から！？」



シン

「カムハーン！？確かにミカは同朋って言うていたけどお前の事だったのか！？」

カムハーン@はやてはスルー

『そのとおりだ。それとこの娘は私の宿主に好いておつてな』

カムハーンは顔をニヤニヤさせながらはやてを見るとはやての顔は完熟したトマトのように真っ赤になっていた。

シン

「…どうせ管理局のやり方に不満を感じて脱走。他のヴォルケンリッターと散り散りになって行き倒れそうになった所をカムハーンの宿主に助けられてそのまま惚れたってところだろ？」

はやて

「ナゼバレタシ…」

カムハーン

『ついでに言うて脱走ついでに管理局が奪って保管してあった。サイコウオンドを盗んで次元犯罪者になった』

はやて

「モウヤメテーワタシノライフハ…」

次々と自分の隠していた秘密を暴かれて言葉も片言になっていたはやてにシンがトドメを刺した。

シン

「それでもってテクニククのディスクを持っていないからタダの杖程度にししか使えなかった…じゃないか？」

はやて

「コンナハズハー！！」

そしてはやては遂に倒れてしまった（精神的なダメージの意味で）。

シン

「…もしかして全部凶星か？」

カムハーン

『うむ。全てお前の予想通りだ』

シン

「それで、ミカが【復活計画】のことを勘違いしているようだけど何かあったのか…？」

カムハーン

『それはだな…』

実はシンがミカと再会した時にある違和感を持っていた。

それは【復活計画】の内容の食い違いである。

シンの知っている【復活計画】とはかつてのシンの愛機であったあの機体を完全に復活させるという内容であり、現在カムハーンが行っている計画もこちらの方である。

しかし、ミカが語った【復活計画】とは今存在しているヒューマン・ニューマン・キャスト・ビーストにマガハラに住む魂達を憑依させるという内容であった。

カムハーンはその事を説明しようとしたら現在のカムハーンにとって最悪の客が来た。

エミリア

「うーす！シンに頼まれていた物は全部揃ったってスバル達が言っていたよー！ってそこにいる人は誰！？」

ミカ

『ッ！カムハーン！！』

エミリア

「え！？こいつがミカの言っていた！？」

ミカ

『はい！何としても彼の野望を阻止しなくては！』

カムハーン

『ぬ！？よりもよってこのタイミングか！？』

ミカ

『逃がしませんよカムハーン！！貴方の野望はここで阻止します！』

！

はやて@起きた

「起きたと思ったらきわどい服着たお姉さんがカムハーンさんに襲いかかるうとしている！？」

状況は最悪だった。

カムハーンは逃げようとしても恐らくはやてがいらぬ疑いを掛けられてしまう。

しかし、カムハーンは武器を一つも持っていない。

さらに部屋としては広いが室内では狭すぎて自分の強みである人間離れた動きもできない。

それに対してミカは殺る気満々で彼女の宿主であるエミリアも戦闘態勢を取っている。

この状況でカムハーンに逃げ道はなかった。  
が、ここでミカにとっては思わぬ介入が入る。

シン

「お前ら……。痴話喧嘩をするのは止めないけどここは俺の部屋だぞ！」

ミカ

『しかしシン！このまま彼を放っておいては…』  
シン@何かが切れた

「…おい。そこに座れ」

ミカ@不満げな視線をシンに向ける

『な、何を…』

シン@手に持っていたハリセンでミカの頭を思いつき叩く  
「なんだその目は!？」

普通精神体のミカには利かない筈だがシンの持っていたハリセンは正確にミカの頭に直撃し、ハリセンで叩いた時独特の軽快な音がシンの部屋に響き渡った。

ミカ@涙目

『なにも叩く事は無いじゃないですかあ…』

シン@SEED覚醒時の眼でミカを睨む

「何か言ったか？」

ミカ

『ナンデモアリマセン…』

シン

「カムハーン。ミカに本当の【復活計画】について教えてやってくれ…」

カムハーン

『う、うむ…』

太陽王説明中…

ミカ

『そんな…私が聞いていた内容とは違います』

シン

「カムハーンの話だとその時には時空管理局がここを狙っていたらしいから恐らくあいつらの策略だろ」

ミカ@顔を赤くする

『は、恥ずかしいです…』

エミリア@脱空気

「あとでレイ達にも謝っておかないと…」

カムハーン

『だがミカの知っている内容の方も実行に移されかけていた』

ミカ

『え？』

シン

「それを直前に俺が潰したけどな」

エミリア

「いつの間に!？」

ミカが知っている方の計画が実行に移されかけていたこととその計画は潰れ居ていることにエミリアとミカは目を点にしているとシンは説明を始めた。

シン

「もともとはあいつらが計画していたけれど当時その計画に注目した奴がいてな」

カムハーン

『それに勘付いたシンは今の時代に再びこのグラールに来訪し、そいつの行方を追っていたのだ』

シン

「で、俺がレイ達と会うまでの間にその首謀者を潰しておいた」

シンの説明を聞いたミカは更に恥ずかしくなった。

自分の知っていた復活計画はシンと再会するまでもう潰されていたのだから。

シンはそんなミカをスルーしてエミリアが自分に伝えに来たことを聞いた。

シン

「それはそうとエミリア。もう準備は出来たのか？」

エミリア

「うん。明日にはもう出発できるよー！」

はやて@脱空気

「では向かう際に私とザフィーラも同行するで」

エミリア

「あれ？はやてさん。なんか口調が……」

シン

「こいつはこっちの口調が素だぞ」

はやて

「とうわけでよろしく頼むで」

エミリア

「うんー！」

その後シン達は明日の出発に備えて少し早い睡眠を取るのであった……。

第12話「レオルバディア破壊依頼」受諾編」(後書き)

どうも飛鳥です。

今回は受諾編となっています。

この話以降はやてとカムハーンは共に行動するようになります。  
次回はシンがはやてを連れてくる間のスバル達の話になります。  
では(・・)ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3834n/>

---

交錯戦記 CROSS OF DESTINY

2011年10月13日12時53分発行